

通路は選擇の後に起る

種學上では蒙古系の人種であつて、全蒙米系に屬してゐるといはれてゐるのを見ても、此事は最早毛頭疑ひを容れる餘地がない。通路は選擇の後に出来るものであつた。前の通路は後の通路であらねばならなかつた。先發のアジヤ民衆が新大陸へと急いだ如く、それに續いて異つた民衆もまた、同じ方向を採つて移住しなければならぬ運命を見た。先發の人群は後續の人群に追跡せられ、後續の人群は更にまた後から進んで来た人群の爲めに追跡せられて、自分達の安全を圖る爲めに逃避しなければならなかつた。

エスキモーの故郷

かうした理由で、或長い期間に互つて、アジヤ民衆の或部族は、西から東へ移動の旅を續けた、ちやうど渡り鳥が地帯の果てから地帯の果てに移つてゆくやうに。——さうした移動民衆の中には、今日アジヤとアメリカとを股にかけて住んでゐるエスキモー(Eskimo)も計へられる。彼等はベーリング海峡(Bering Strait)を越えて、舊大陸から新大陸へ移つて往つたに相違ない。エスキモーは、今日、アジヤに於いては、ベーリング海中の島々、及びそれに面した海岸に住んでゐるのみであるが、西半球に於いては北緯七十一度(グリーンランドの北東)から、コッパア河口、即ちアトナ(Atna—アラスカの西方)に至るまでの間に、海岸線から五千哩よりは奥深く進まぬ程度に於

人口三十六萬人

ウグリヤンの類似

いて占據して居り、其人口は少くとも三十六萬人あるといはれる。歐洲學者の研究によると、彼等の故郷はハドソン灣、或はアラスカの南部で、そこから或は東進し、或は西進し、グリーンランドに達したのは千年前であり、アジヤに達したのは三百年前であるといふ。彼等は今日では蒙古人種、高加索人種など、混血して、大分其本質が失はれてゐるけれど、アジヤにゐるものはアラスカにゐるものよりも小さい。エスキモーの純粹型は、アメリカの北岸、グリーンランドの東岸に住んでゐるものであらうが、それらを特別の一人種であると考えられるものもあるけれど、身長の高いこと、頭の長いこと、眼の形などがウグリヤンに似てゐる點から觀て、これを北アジヤから移つたものと考へることも不可能ではない。現にリンク博士(Dr. Pink)らは、彼等が東から西に移つたことに反對し、アラスカからグリーンランドに行つたことを主張してゐる。

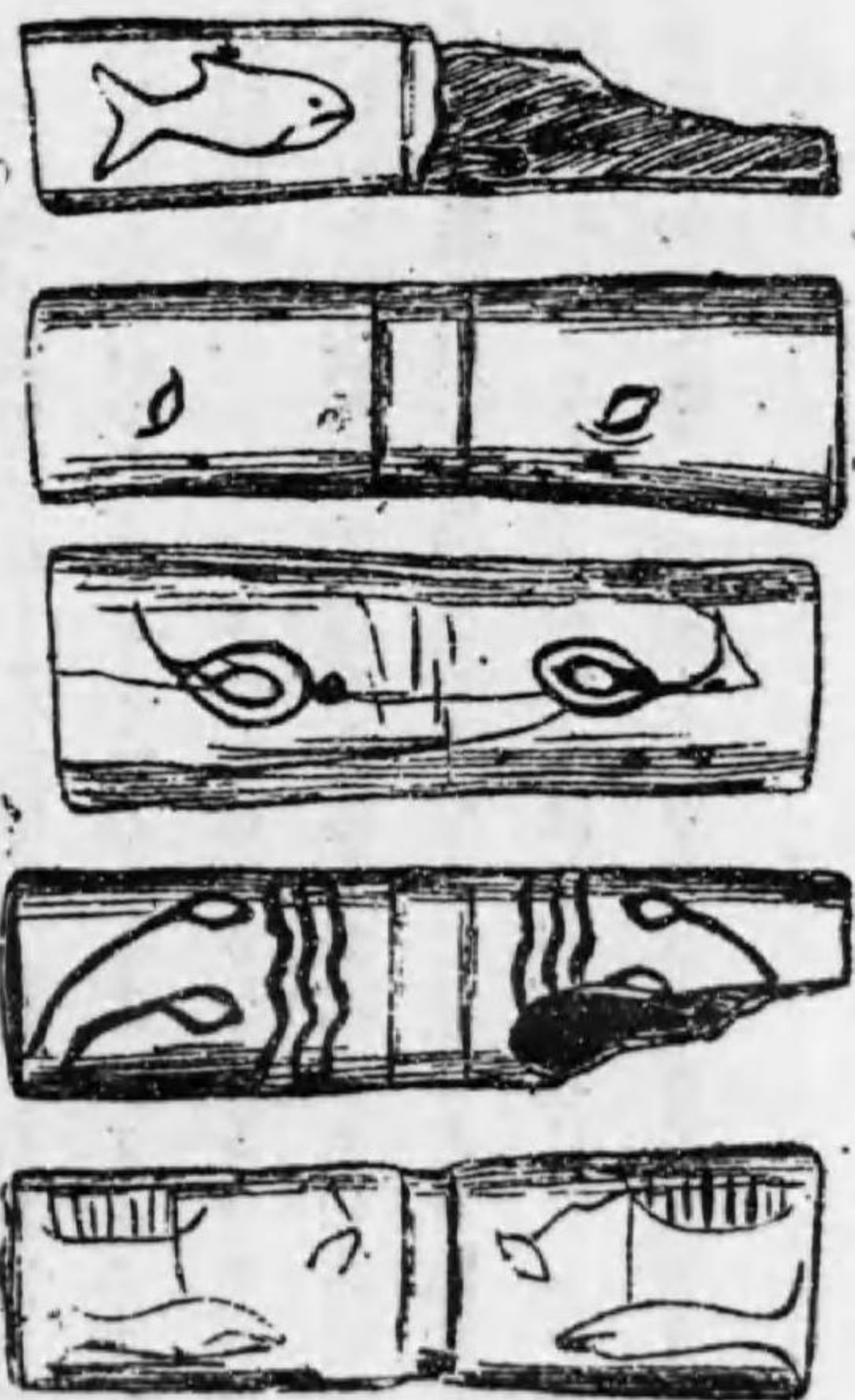
樺太も彼等の通過した路筋  
ススヤ河畔の貝塚

かうしたアジヤ人の血を持つたエスキモーが、アメリカ大陸へ移つて行くのには、色々の道を通つたであらう。移動の道筋は大概極つてゐたとしても、群に離れた或個人或は集團が、異つた道を進んだといふことは想像が出来なくはない。彼等の一群は樺太に紛れ入つて、ススヤ河畔に其一時の家居を定めたこともあつた。先年ススヤ河

畔の貝塚からは色々の遺物が發掘せられたが、中でも最も珍らしいのは陰刻のある鳥骨管であつた。大きな猛鳥の骨で造られたこれらの管が、何に使はれたかは知れず、また誰れが造つたといふことも知れないが、其出來榮えだの、手法だから推測すると、

或はエスキモーではなかつたかと思はれる。

若し此鳥骨管を遺した民衆がエスキモーであつたとしたら、彼等は全滅してしまつたか、或はアリューシャン列島を縫うて遙かに東の方に進んで行つたか、或はまたアイヌ其他と混血して自分達の



(塚貝ヤヌス太樺)管 骨 鳥

特性を失つてしまつたかしたであらう。アイヌの間に残つてゐる小人傳説、コロボツグル説話だのを考へ合はして見ると、背丈の低い、溫和な、内氣の民衆が、西から東



彫刻の - モ キ ス エ

へ移つて行つて行衛知れずになつたといふことは想像される。其説話中の小人こそは、曾て坪井博士が想像したやうに、エスキモーであつたかも知れない。

鳥骨管の彫刻から推すと、彼等は漁撈によつて其口を糊してゐた。彼等は可也に大きな船を持つてゐて、それで海上を乗り廻して鯨の類を捕獲した。捕鯨には大方銛を用ひ、銛の柄には浮袋を着けて、その流失を防がうとした。彼等は恐らくチュクチやアイヌが鯨を崇めるやうに、鯨を海岸に追ひ寄せて來る鯨を崇めて神としてゐたであらう。彼等は可也に美を解し、自然を觀察する力を有し、繪畫と彫刻によつて其藝術的本能を満足せしめた。彼等は舊アイヌとは異つて、直線型の文様を好んだ、勿論若干の曲線型文様も見られるけれども、好んで用ひたのは直線を色々に按排して種々の物象を文様化する手段だつた。此點は舊アイヌよりも寧ろ原日本人に類してゐたやうである。

此鳥骨管に似たものは、舊アイヌの遺跡からは発見せられないところを観ると、之を遺した民衆が舊アイヌでなかつたことは確實であらねばならぬ。そこに驚くべき一事がある。それはエスキモーの骨器——發火棒——が様々の彫刻を持つてゐて、甚だしく此鳥骨管に似てゐることである。かうした類似は、私をして遠い昔にエスキモーが東遷する時、此群島の北端を掠めて往つたやうなことがなかつたらうかと想像せしめるのであつた。

(一) 故理學博士坪井正五郎氏『コロボツクル北海道に住みしなるべし』『人類學雜誌』第二卷第十二號所載) 參照。

(二) A.H. Keane: "Ethnology," p. 300. 參照。キーン教授は、エスキモーを蒙古韃靼族から分枝したものと考へてゐる。

(三) Deniker: "The Races of Man," p. 520.

(四) 故坪井博士『カラフト石器時代遺跡發見の鳥骨管』『人類學雜誌』第二百六十三、四號所載) 參照。

(五) 原始時代にアリューシャン列島を縫うて、アジヤ方面からアメリカ大陸へ行くことが出来ようかとは、今日の文化人の頭には浮び得る問題であるけれども、それは直ぐ解決のつくことである。數年前、樺太アイヌ研究の爲め樺太に行かれた金田一京助氏の談話によると、樺太アイヌは數個の眞鍮製の鈴を非常に大事にしてゐたが、それはアリューシャン島人が、

長い海路を權て漕ぎ寄せて貿易に來た時、船一ぱいの干鮭と交易してやつたものだといつてゐたといふ。此一事によつても、遠距離との交通が可能であつたことは想察せられる。

(六) 拙著 "On the Boat of the Koro-pok-guru in the Legend of Ainu" 『人類學雜誌』第三十二卷第六號所載) 參照。

(七・八) 註(四)の圖解に依る。

(九) Czapliska: "Aboriginal Siberia," p. 259. 參照。——「三つの悪靈の外に、尙一つの『怪物』といふ階段がある。これらの中で首長と見做すべきは鯨である。鯨には北極圏の人々の間では、タプーがつき物である。どんな人でも、鯨を殺せば直ぐ死ぬと考へてゐる」。

(一〇) 文學博士鳥居龍藏氏『千島アイヌ』七一頁參照。アイヌの間にも、矢張り鯨を崇拜する習慣のあることは、該書の記載した船章(コロモシリ島)を見ても分る。尙ほ此事については同博士の論文 "Les Aïnou des Îles Kouriles," pp. 23, 257. を參照せられたい。

(一一) 坪井博士論文(註四)中の挿畫(左、第五)は明らかにそれが鯨を象つたもので、鳥居博士の指摘したコロモシリ島船章と同じ目的を持つてゐることが知られる。

(一二) Lord Avebury: "Prehistoric Times," pp. 506-509.

### 第三章 原日本人の生活

#### 第一節 ツングース族の移動

ツングース  
の南下運動

アルタイ山  
脈とヤプロ  
ノウアイ山  
脈

キンガン山  
脈

ゴビ沙漠

東胡と匈奴

舊アイヌ族が日本群島へ移住してから間もない頃、それと略同一の路筋を取つて、アジア大陸の東北部——たとへば黒龍江のあたりから、異つた他の一種族が南下運動を始めた、それは紀元前二千年よりも早からぬ頃であつたらう。其種族はツングース(Tungus)といつて、初めは南方に居住してゐたが、アルタイ山脈(Altai Mts)を超えて蒙古地方に足を踏み入れ、或者は更に北進してヤプロノウアイ山脈(Yablonovoi Mts)を突破してレナ流域に出で、或者は黒龍江に沿うて北東に進み、沿海州地方に其好適の住地を發見した。かうして彼等は色々の部族に分れたけれども、其大部分は興安山脈(Kingan Mts)を中心として其東西に住み、西方のゴビ沙漠(Gobi)地方に住んでゐた匈奴種族と絶えざる戦闘を續けてゐた。

ツングース族は、支那史には「東胡」(Tung-Hu)として現はれてゐる種族で、其故郷は今日では明確に分らないけれども、支那史の所謂「匈奴」(Hsiung-Nu)や「突厥」

先住民族の  
驅逐

ツングース  
の分布

東方民衆の  
九種

(Tu-chieh)と同系の人種で、學者のいはゆる「蒙古韃靼」(“Mongolo-Tatar”)種に屬してゐるものに相違ない。ツングースは、一方、西方に於いて匈奴と戦つてゐる間に、他方、東方に於いて先住民族を驅逐し、エスキモー(Eskimo)、チュクチ(Chukchee)、コリヤーク(Koryak)、カムチャダル(Kamchadal)などの舊シベリヤ族は、相隣りで東方或は北方に逃れた。舊アイヌも恐らく、ツングースに逐はれて日本群島に入つたものであらう。さうした史實は、今日の種族分布から見ても、大概それと推察せられる。

便宜上、こゝに人種學者の記述を借りて、北東アジアに於けるツングース族の分布を見ると、「彼等の住地は北は北氷洋から南は北緯四十度に及び、西はイエニセイ(Yenisei)から東は太平洋に及んでゐる。かうした廣大の地域を占めてゐる彼等の人口は、僅かに、五萬人に過ぎない」。けれども、これは現今ツングースといはれるものについての記述であつて、歴史的に觀ると、彼等をもつと廣い分布と、もつと大きな住地とを持つてゐる。歴史以前に於ける北東アジアの民衆分布が、どんな状態にあつたかは不明であるけれども、支那の古書に従へば、東方民衆は少くとも九種あつた。それらが今日の何種族に當るかは的確に分らないけれども、東者は東胡であり、滿飾は滿洲人であり、鳧曳は扶餘であり、天鄙は鮮卑であることに疑ひはない。更に他の

古い書物によつて観ると、戦國時代には漢族の住地である北部支那の北方に匈奴が住み、匈奴の東に東胡が住み、其間に林胡、樓煩などの部族が占據し、匈奴の北には渾庾、屈射、丁靈、鬲昆、薪犁などが占據してゐたやうに思はれる。これらの小種族がどういふ人種であるかは分らぬけれども、東胡がツングースであり、匈奴がモンゴルであることだけは疑ひがない。多少、突厥族の交つてゐたことも推想せられぬことではない。

「肅慎民」

ツングース  
の三大別

ラムト

北ツングース

東胡は「肅慎民」と呼ばれた種族と同一であつて、餘程古くから今の滿洲、沿海州あたりに住んでゐた民衆であつた。私の考へるやうに東胡を今のツングースの祖先と見做せば、漢代の烏丸、鮮卑、東夷は皆ツングースであつたと解せられる。現今のツングースは學者によつて三大別せられる。——「北ツングース、南ツングース、及び沿海ツングース、或はラムト(Tamut)といふもの、三通りで、黒龍江が南北兩ツングース族の境界線になつてゐる。ラムトはオホツク海の沿岸を占め、カムチャッカの北西からイヤナ河の岸に至る間に住んでゐる。北ツングースは多數の部族に分れ、東方から段々と西方に移つてゆく傾向を示してゐる。黒龍江の河口にはオルチャ(Olchas)一名をマンダーン(Mandarin)といふ部族が住み、薩哈連島に住んでゐるものはオロッコ

南ツングース

鮮卑と女眞

ツングース  
の性能

(Oroko)と呼ばれてゐる。鄂魯春(Orochons)は、ツングース族中で最も代表的な人種的典型だといはれる。またマネグ(Manegres)及びオレンニエの二部族がある。オレンニエ(Olennyie)といふのは、「馴鹿を持つてゐる」といふ意味である。南ツングースの中には、烏蘇里(Ussuri)や黒龍江のゴルド(Goldes)を始め、沿海州のオロチ(Oroches)、ソロン・ダウル(Solon-Daurs)、滿洲人(Manchus)などがある。ゴルドは純粹型で、頗る裝飾の技術に熟達して居り、ダウルは蒙古人と混血して原型を失つてしまつた。滿洲人は甚だしく漢人化し、全人口の十分の一しか原型を保つてゐるものがないけれど、言語及び體質によつて、それがツングースに屬することは明瞭である。支那書の所謂「鮮卑」、「女眞」などもまた、ツングース族であることに疑ひはない。——これら諸種族の中、オロチは「沃沮」として、ダウルは「濊離」として、漢代よりも以前に、當時の東方の文化中心であつた支那人に知られてゐたものである。

ツングースがかうした分布、發展を見ることが出来たのは、一つは地理、氣候などの自然的原因にもよつたらうけれども、一つは確かに彼等の民族心理にも因つたことと思はれる。ツングース族は遠い昔から勇敢であり、善良であり、信すべく、敬すべき、勤勉聰明の民衆であつた。彼等が極圏内の先住民を驅逐して、北方に移住するこ

との出来たのは、全く自分達の生活をあらゆる經濟狀態に適應せしめることの出来る國民性に基づいてゐる。これはひとり私の考へであるばかりでなく、外國の歴史家も十分に認めてゐるところである。

かうした優秀の素質を持つて、ツングース族は西に、北に、東に、或は南にすら、自分達の新しい住地を求めて移動した。民族移動に當つては、それが自然或は他種族の壓迫による場合であつても、また自分達の能動的計畫に因る場合であつても、多くは最も勇敢にして最も機敏なものが先行し、稍庸劣なものがそれに次ぐのが原則であつた。今の黒龍江、烏蘇里あたりに占據してゐたツングースの中、最も勇敢にして進取の氣性に富んでゐたものは、夏期の風浪靜かなる日を選んで、船を間宮海峡或は日本海に泛べて、勇ましい南下の航海を試みた。樺太は最初に見舞つた土地であつたらう。彼等の船は更に蝦夷島を發見して、高島附近に門番(Ottoi-小樽)を置き、一部はそこに上陸し、他は尙も南下して海嶺多き土地を見出し、そこに上陸してそこを海嶺(Moto-陸奥)と命名し、海岸傳ひに航海を續けて、入海多く河川多き秋田地方に出たものは、そこに天幕を張つて假住し、鮭の大漁に食料の豊富なことを喜んだであらう。そこを彼等は鮭(Dawa-出羽)と呼び慣らしたので、遂に長く其地方の地名

移動民衆の素質

第一移住

オトリと小樽

メチと陸奥

ダツと出羽

オトリと小樽

第二移住

移住の道筋

烏丸、鮮卑  
扶餘

となつた。陸奥、出羽は、しかしながら、ツングース族の最後の住地ではなかつた。彼等は日本海岸に沿うて南下し、或は直接に母國から日本海を横切つて、佐渡を経て、越後の海岸に來り、そこに上陸し、或は更に南西方に航行して出雲附近までも進んで行つたであらう。かうした移動を、私はツングース族の第一移住と呼んでゐる。これは紀元前一千八百年から千年位の間に進まれたと思はれる。

此移住と殆ど同時に、沿海州及び滿洲に住んでゐたツングースの一部も、南方或は西南方に向つて移住を開始した。此ツングースは後に所謂「鮮日人」を形造つた重要民衆であつて、同種族中最も勇敢であり、又最も憧憬心の強かつた部族と思はれる。沿海州に住んでゐた彼等は、「肅慎人」として知られた民衆で、そこを船出して千島海流に乗り、沿岸航海を續けて朝鮮半島の東海岸を南下し、或者は半島に植民し、或者は出雲半島に上陸し、更に北上して因幡、丹後、若狹、越前、能登、越中、越後邊までも進んで、日本海の沿岸平地に其永久の住居を見出した。これを私はツングース族の第二移住と呼んでゐる。彼等の最後の移住は、紀元前一千年から紀元一年頃まで引續き行はれたと思はれる。古い支那史に現はれてゐる烏丸、鮮卑などはツングース族の中心であり、其中心を離れて疾く移住を試みたものが、一部族を形成して扶餘と呼ば

嶮夷、萊夷、  
淮夷  
高句驪、馬  
韓、沃沮、挹  
婁、獯、貊、  
辰韓

オロツコと  
ゴルド

移住は石器  
時代

れてゐた。扶餘族の住んでゐた中心地は滿洲の東北部で、長白山脈の北方を西に向つたものは、遼東半島から山東半島に入り、更に南下を續けて、嶮夷、萊夷、淮夷となつたものは漢族に滅ぼされ、遼東半島に残留したものは後に高句驪となり、其一部分の先發部隊は朝鮮半島の西海岸を南下して馬韓民衆となつた。他方、扶餘の中心地を離れて日本海沿岸を南下したものは、沃沮となり、挹婁となり、獯となり、貊となり、辰韓民衆となり、日本群島に入つたものは出雲民衆となつた。

私の考へにして間違つてゐないならば、第一移住のツングースは今のオロツコと同一系統であり、第二移住のツングースはゴルドと同一系統のものであらうが、第二移住線上に住んでゐるものでも、沃沮の如きは或はオロツコであるかも知れない。第一、第二の移住は、ツングースの文化のまだ進まなかつた時代で、無論、彼等は石器を用ひ、狩獵によつて生活を支持した石器時代であつたから、其航海の如きも極めて危険で、世代を累ねてつき／＼に送られた移住者の中には、少らぬ犠牲者を出したことであらう。船は浮を装置した筏、或は刳舟が主なものであつた。其航海は主として沿岸航行で、風が續いて、海面が靜かな日でなければ、陸地を遠く離れるやうなことはなく、主として風と潮流とを利用し、それらの力で目的地に運ばれる自然航海法を採

自然航海と  
人為航海

第三移住

越、出雲、  
日向民衆と  
原日本人

つてゐたと思はれる。

かうした日には浪の高い荒海だの潮流の早い海峡だのは航行が不可能であつたが、やがて船舶が安定を増し、人力で自然力を制肘することが出来るやうになつてから、朝鮮半島と日本群島との最近距離である對馬海峡を横斷することを知り、それ以後は従前のやうな迂遠な航路を取らず、直接に辰韓或は弁韓から對馬、壹岐を経て九州の北端に到着する直接の航路を取ることにした。此新航路が開かれてから、大陸及び半島に残留してゐたツングース族が南下運動を起し、九州の北端から主として東海岸、或部分は西海岸に沿つて南下した。これを私はツングースの第三移住と名づける。日向民衆などは、此時の移住集團であつて、其數は比較的にかつたやうに思はれる。

これらの越民衆、出雲民衆、日向民衆は、いづれも大陸に於いて多少の異つた血液を混へてゐたけれど、それはほんの僅かであつて、大體としてはツングース族の純粹の典型を保つてゐた。混血は移住の後に始まるのであつて、それがまだ始まらなかつた前を、私達は特に名づけて「原日本人」(“Proto-Japanese”)といふ。學者によつてはこれを「固有日本人」(“Japonaise proprement”)とも名づけてゐることは既に説いた。

- (一) Arthur Mee: "Harnsworth History of the World," vol 1, pp. 652-658.
- (二) 『史記列傳』、匈奴列傳第五十參照。
- (三) Keane: "Ethnology," p. 299.
- (四) Deniker: "The Races of Man," p. 373.
- (五) 『三國史記』參照。所謂「東方之夷九種」は、玄菟、樂浪、高麗、滿飾、覺曳、素家、東耆、倭人、天鄙である。けれども、古書では吠夷、于夷、方夷、黃夷、白夷、赤夷、玄夷、風夷、陽夷の九種になつてゐて、尙更これらを近代の人類學的分類に當て嵌めることが困難である。吠夷は恐らくはツングースであらう。また前掲九種中の東耆は、原は「東屠」になつてゐるけれども、「屠」と「耆」の誤りとすればツングースと見ることが出来て面白い。
- (六) 『史記列傳』、匈奴列傳第五十。——「晋北有林胡。樓煩之戎。燕北有東胡山戎。——冒頓……遂東襲擊東胡。」——「後北服渾度。風射。丁靈。焉昆。薪犂之國。」——
- (七) 文學博士白鳥庫吉氏は東胡が蒙古人であることを言語學的に證明せられ、文學博士島居龍藏氏もまた考古學的研究の結果、東胡をツングースでないやうに力説せられた。私は今尙ほ東胡を矢張りツングース族であるとする説に賛成である。私の此考へは主として土俗學的研究に基づいてゐるが、證據は必ずしも多くはない。
- (八) 『淮南子』卷四、地形訓。——「凡海外三十六國。自西北至西南方。有修股民。天民。蕭慎民……」
- (九) Deniker: "The Races of Man," pp. 373-374.

(一〇)註(一)と同書、六五六頁參照。——“Observers have unanimously described the true Tungusians as brave and yet good-natured, trustworthy, honourable, industrious, and intelligent. It is owing to these qualities, coupled with their great capacity for adopting themselves to all economic conditions, that the Tungusians were able to expand farther to the north and practically drive out the Hyperboreans.”

(一一—一三)これらの地名は、在來、多くアイヌ語と説かれてゐたが、アイヌ語では都合な點が少らずあつた。私は今これらをツングース語、殊にオロッコ語で説くことにした。オロッコ語に関する著述は殆ど少いが、邦人のものでは、中目覺氏の『オロッコ文典』が唯一の貴重な著書であり、外人のものでは、Sergei Leontowitch: "Rusko-Orotchenski Slovar" がある。私は「小樽」は門番を意味し、「陸奥」は海嶺を意味し、「出羽」は鮭を意味するオロッコだと解してゐる。これは初めての試みであるが、追々研究をして往つたなら、もつと多くの好材料が手に入るに相違ない。

## 第二節 民衆移動の動因

以上略述し來つたやうに、ツングース族は三つの路筋を探つて日本群島に移住を試みたが、さて其目的は果して那邊にあつたであらう。移住を實行するについて、彼等は殆ど死の覺悟を持たなければならなかつた。右からは太平洋が嘯き、左からは日本

日本群島の  
地勢



海が嘯く火山島、日本群島は、絶えず鹽分を含んだ海風の荒さと、大きなうねりを見せる波浪の物凄さとに圍まれてゐて、それらを蹴破らなければ群島に到着することは出来なかつた。しかも彼等は脆弱な船に乗つて、それらを凌いで火山島を志ざした。死も彼等を脅かすことが出来なかつた、恐怖の心も彼等をひるますことが出来なかつた。否、むしろ死や恐怖やは、彼等を勵まし、彼等を刺戟し、彼等をして喜んで、満足の情を以てそれらに面して立たしめた。

すべての民衆の住地移動には、それらの深い理由があるやうに、ツングースの移動にも強力な動因が横はつてゐた。それは内外両面から觀察されねばならぬ性質を持つて居り、近代の人類生活が、主として經濟力に支配せられてゐると大に趣きを異にし、經濟力以上に、内觀的な宗教上の信仰や、種族それ自身の持つてゐる性質やが大きな動因となつてゐた。私はこゝに、少くとも彼等の移住の動因五つをを擧げることが出来る。

(一)種族の移動性。——第一に擧げなければならぬことは、ツングース族の有つてゐる本來の性質が、著しく移動性に富んでゐたことであつた。彼等は其故郷が忘れられるほど遠い昔に南方から北進し、或は西し、或は東し、或は北して北氷洋にまで進出

住地移動の  
原由種族の移動  
性

## 進取性

し、或は南して中部支那にまで入つたといふ風に、移動を以て其生命となし、其歡悦となす習慣があつた。多くの民衆にまで、移動は煩惱であり、厭苦であるのが常だけれど、彼等にまでそれはさうは感ぜられないのみか、寧ろ非常の牽引力を持つてゐた。彼等は靜的民衆でなくて、動的民衆であつた。彼等はじつとして冥想するのに不適當な性質を持つてゐた。彼等は活き、動き、はしやぎ、騒いで、生活を享樂する性質を帯んでゐた。彼等は保守性に缺けてゐる代りに、濃厚な進取性に富んでゐた。彼等の天分は、一所に定着してそこを死の場所とするよりは、よりよき場所を見出してそこに死なんことを願ふ動的性能に充たされてゐた。彼等は夢想家であつた、憧憬者であつた、常にあくがれ、常に夢みて、片時もじつとしてゐることが出来なかつた。しかしながら、それは彼等の生の倦怠に胚胎したものではなくて、新しき生の要求に培はれた心的萌芽であつた。それ故に彼等は新しき天地を見出した時、それに適應し、それに順當するやうに彼等の生活を改善し、曾て過去を顧みて現在を憐むやうな回顧的氣分を持たなかつた。遠征！ 遠征！ どこまでも行き行きて、行き盡きるまで行かうといふのが彼等の希望であつた。此希望が彼等の適應性を高め、此適應性が彼等の移動慾を刺戟したのであつた。

遠征！ 遠  
征！

宗教の推進力

東枕と入日

西枕と朝日

ラー  
オホヒルメ

(二)宗教の推進力。——第二に擧ぐべきは宗教的信仰が、背後から彼等を推し進めたことであつた。新石器時代の終末に近づいた頃、舊世界の人類は二つに分れて、其一半は東方を憧憬し、他の一半は西方を渴仰した。ヨーロッパの石灰横穴や巨石古墳から發見せられる死體の多くが、東枕をして仰臥されてあるのは、彼等が西に春づく夕日を眺め得る爲めであつた。西方淨土の觀念も、西王母の信仰も、かうした基礎的信仰からそれらの端を開いたのであつた。これら西方民衆の宗教に反して、東方民衆のそれは東方に憧憬れる形式を具へてゐた。私達が今日も尙ほ死ねば西枕或は北枕に安臥せしめられるのは、豊榮昇る朝日を望み得るやうに計畫した祖先の心的産物の痕跡を辿つてゐるのである。東方君子國の觀念も、佛法東流の信仰も、日出國の誇りも、旭日禮拜の習慣も、皆かうした東方憧憬の基礎的動因から生れた結果に外ならなかつた。太陽は人生に取つて最大最強の自然現象であり、どんな古代民衆もそれを崇拜することから免れることが出来なかつた。西の果てのエジプト民衆がラーを信じたやうに、東の果てのツングースはオホヒルメを信じない譯にはゆかなかつた。太陽崇拜は色々の儀式を産み、色々の信仰を産み、色々の習慣を産んだが、其中最も顯著な思想は、太陽の昇る源泉が樂土であるといふことで、其結果それを極めようとする慾望が

新舊シベリヤ族の移動方向

生活の支持慾

湧いて來た。寒い時、暗い時、無上の不快と不安とに襲はれた原始民衆は、暖い、明るい東方に憧憬れる心を起したのに無理はなかつた。さうした憧憬は舊世界の北半を占領した新シベリヤ種族の間に分布し、トルコ族も、蒙古族も、ツングース族も、また舊シベリヤ族たるカムチャダル、コリヤーク、舊アイヌの間にさへ同一の觀念が傳へられて、彼等は多くは主として東方、従として東北方に向つて移動した。移動に次ぐに移動を以てして、道が盡き、土地が盡き、海洋が横はれば、彼等は其憧憬をあきらめねばならなかつた——道の盡きたところを達し得べき此世界の東の果て、太陽の昇る源泉に一番近い處と思はねばならなかつた。此東方憧憬といふ宗教的刺戟が、彼等を東方、或は北方、或は南方に異動せしめた重い原因の一つであつた。

(三)生活の支持慾。——第三に擧ぐべきは生活を支持する爲めに、住地を移動する必要のあつたことである。彼等ツングースは、シベリヤの原始林(Taiga)及び矮草原(steppes)に於いて、狩獵、後には牧畜を生業としたが故に、勢ひ水草を逐うて轉徙しなければならなかつた。彼等とても日々に住地を變へた譯ではなく、或期間は天幕(Chum)を張つて一定の場所に生活し、狩獵によつて食料を得てゐたのであつた。けれども狩獵の器具が完全ではなかつたから、獲物が餘程豊富でなければ、彼等は飢

を免れることが出来なかつた。それ故、彼等は山林に鳥獸が淡くなると、直ぐ其影の濃い場所を覓めて、東へ北へ彼等の天幕テントを移したのであつた。かうして山脈は越され、河川は横ぎられ、海洋さへも渡られたのであつた、どんな困難も生活の支持には替へることの出来ないのは人生の常であつた。

(四)氣候の壓迫力。——第四に擧げらねばならぬのは、氣候が非常な變化をして、狩獵生活及び牧畜生活を營爲してゐる民衆を、一定の場所に漂泊せしめることを不可能ならしめたことである。最近の學者コウの研究によれば、世界には二つの大きな長い時期が、昔から交互に働いてゐた。其一つは乾期であつて、他の一つは濕期であつた。いづれも可也に長い期間を占め、其各はじりぐぼつくと週期的に地球上を襲つて来る慣はしであつた。乾期が來た時には水分は缺乏し、地面が乾燥、龜裂、灰化して、そこには青々とした草木がなくなり、どんな動物も生活を支持することが出来なくなると同時に、人類も亦動物性、植物性の食物を二つながら失ふことになるので、そこに徘徊を續けることが不可能になり、或は群をなし、或は單獨で、住み慣れた場所を棄て、他地方に移動しなければならぬ運命を見た。西ローマ帝國の滅亡も、元帝國の勃興も、かうした氣候の激變が或民族に與へた壓迫の爲めに描き出された活畫圖

氣候の壓迫力

乾期と濕期との交替

一週期六百年

ツングース移動の年代

異種族の迫害

に過ぎないのであつた。さうした恐るべき週期は、どれほどの年月の間に来るか明らかでないが、學者の研究によつて紀元六百五十年と千二百五十年とを中央として、乾濕兩期が交代したといふことは明らかにせられた。これによつて觀ると、週期は約六百年毎に來るものであるやうに思はれるが、果して然りとすれば、紀元六百五十年より六百年溯つた紀元五十年、其一週期前の紀元前五百五十年、二週期前の紀元前千五百五十年、三週期前の紀元前千七百五十年の頃に、さうした乾濕兩期が徐々に交代し、其結果、アジアの狩獵民衆、並びに牧畜民衆が大移動を起したといふことはあり得ないことではなかつた。假りにツングースの主要な移動を三回と見做して、それらをかうした氣候の變化にも原因したとすれば、私達は大概其年代を紀元前千七百五十年、紀元前千五百五十年、紀元前五百五十年と推定することが出来るではないか。年代はたとへ不明確であるとしても、かうした氣候變化は動かすべからざる事實であつて、今日でもメソポタミアと印度のデッカ半島では、乾濕が交代しつゝ、あるといふから、ツングースの住地に會てそれが起り、如上の三原因と一つになつて、彼等を移動せしめたといふことは疑ふ餘地がない。

(五)異種族の迫害。——今一つ最後に擧げなければならぬのは、異種族が武力を以

「後方」と「敵」との一致

日本人歴史の第一頁

て後方から脅威し、迫害し、安心して生活を続けしめなかつたことである。ツングース族が東進或は東北進した時には、舊シベリヤ族は自然に驅逐せられて、東方、北方、或は東北方に向つて逃去した。それと同時にツングースが移動を開始すると、彼等もまた後方から異種族の迫害を受けた。異種族が何であるかは不明であるが、中でも最も強力であつたのは蒙古種の匈奴であつた。東胡と匈奴との戦争は紀元前三、二世紀の頃までも續いた。此事は確かにツングースをして移動を急がしめた一つの原因となつたに相違ない。ツングースの一派オロク語では、「後方」を意味する言葉は *Этот* であつて、日本語のアトと一致して居り、此アトから「敵」を意味するアタといふ新語が出来たのである。それから推すと、異種族の迫害といふことは、ツングースに取つて可也に重大な移動の原因であつたらしい。

かうした色々の原因が、双關的にツングース族を動かして、北東アジアから彼等の一部分を日本群島に移らしめたことは、即ち日本人の歴史の第一頁を繰り擴けしめたことになるので、國史上では極めて重大、極めて肝要の史實であるのであつた。さうして日本人の歴史の第一頁を繰り擴けた彼等の生活は、どんな様式を以て營爲されたであらう。私達はそれを非常な懐かしさと、非常な珍らしさを以て眺めなければな

らない。

(一) マルクスの唯物史觀を無上の史觀とする人々に在つては、經濟力が人間の進化の全過程を蔽ふものであるとする傾向があるけれども、私達人類學を研究するものからいふと、人類の心理進化史の初頭は、宗教によつて第一頁を飾られてゐる。新石器時代の民衆の歴史は、宗教の動力を最も大きいものと見なければならぬ。

(11) "Harnsworth History of the World," pp. 656, 657. 参照。私の此項の説は、主として此書の言説に基づいてゐることを斷つて置く。それは、私が私達民衆の長所、強點を自畫自讀することを快く思はぬ人が多からである。

(三) 東方憧憬と西方渴仰との境界線を、假りに東半球の中央と私は定めてゐる。此學説は私自身の立てたものであつて、誰れの學説を借りたものでもないが、其證據は未だ必ずしも豊富であるとは云へない。それ故、私はこれを假説として提供して置くに止める。

(四) "Ancient Hunters," pp. 180, 181.

(五) 『淮南子』地形訓。

(六・七) 『日本書紀』參照。

(八) 『史記列傳』匈奴傳、冒頓の條參照。

(九) Czapliska: "Aboriginal Siberia," pp. 256-290.

(10) Huntington: "Civilization and Climate."

(11) 中目覺氏『小樽の古代文字』三一六頁參照。

(111) "Geographical Journal," 1904, 1914. 及び印度マイソール政府首相の故大隈侯に對して試みた談話に基づく。

第三節 原日本人の社會生活

日本海岸の植民地

原日本人——主として南ツングース族に屬し、若干は北ツングース族に屬するものもあつたらう——が日本群島に移住して、日本海に面した沿岸平地に植民生活を開始した時、其經濟状態はどうであつたらうか。又其社會組織はどうであつたらうか。今日からそれを窺ふことは至難中の至難であらねばならない。けれどもそれを或一地方に代表せしめて述べることは、必ずしも不可能ではない。

原日本人の移住は、一時に大部隊が來たのではなく、群集をなして來たとしても、それは一家族、或は二三家族ぐらゐるものであつた。時には一人或は二三人から成る小集團もあつたらうけれど、大體としては移住者の單位は家族であつたに相違ない。若しくつかの單位が集團を造つて移住したとすれば、それらの家族は同一血統の氏族であつたに相違なかつた。

穴居

原日本人は大陸にゐた時には、多少の農耕は試みたけれども、主として狩獵牧畜に

移住者の單位

イハロ

カリホ

家長

婦人家長制度と男子家長制度

よつて其生活を支へてゐたが故に、其住民は一所に定着することなく、季節に従つてそれを移動しなければならなかつた。遠い昔に於いては、彼等は冬季が來ると、重疊式の石壁を有する地下室に住んでゐたが、夏になると、暗い地下室から這ひ出て、明るい、開けた、構架式の家屋に住んだ。前者は彼等に取つて冬の家であり、それが重に岩石から出來上つてゐるが故に、それを一般にイハロと呼んだ。後者はまた夏の家であり、それが大方は草葺であつたが故に、それを彼等はカリホと呼んだ。オロッコ族は今日でも夏と冬とで家が異ひ、夏の家を Kaola と云ひ、冬の家を Hāgdu と云つてゐる。これらは古代の殘片であるに相異ない。

かうした家屋には、一家族が雜揉して住んだ。時には犬も一つ屋根の下に寝た。それらの家族は、一人の家長によつて率ゐられ、其支配を受け、其命令を聞いた。家長は久しい前には婦人がなつてゐたが、移住前後には男子がそれに當つてゐたらしい。純粹の狩獵時代にはまだ婦人家長制度(Matriarchy)が残つてゐたらうが、牧畜時代が來た時には、それは段々と影が薄れて、男子家長制度(Patriarchy)が芽を吹いてゐたであらう。ツングース族が日本群島に現はれたそれらの日に於いては、勿論長老が家長の位地にて、彼れは一家族の人々から尊重せられ、崇拜せられ、經濟、宗教、其

天幕から掘立小屋へ

「天地根元造り」

屯、氈

外色々の権力を彼れに與へて、自分達は其権力の下に服従してゐたであらう。

天地根元造り



Chum (Tum)から轉訛したもので、「垣」を意味する朝鮮語「Tam」と同源であり、漢字の「氈」も亦此北方語を輸入して新たに造つた文字であるとすれば、其原始形式はカル

な鈍重陰暗のイハロを捨て、輕快明暢のカリホをのみ用ひることにした。北方の天地に彷徨つた日の天幕や穴居の形式は次第に廢れて、やうやうと掘立小屋が發達して來た。これが今日の日本家屋に生命を與へた原始形式の構架式家屋であつて、多分初めは合撐の形式を持つてゐたらうと思はれる。關東に多いノゲヤは、建築學者の所謂「天地根元造り」であつて、或人々が考へるやうに南方式のものでないと私には考へられる。

かうして木造家屋が發達した後にも、彼等は天幕時代と同じく、家族のいくつかで集團して一地點に假住することゝ屯といつた。邦語タムロはツングース語の

穹廬

植民地は河岸、湖畔



キルギスの天幕

マック(Kalmuck)やキルギス(Kirgis)の天幕に見られるやうに、周圍に垣根を結へて地域を限り、其中に穹窿狀の假廬——『史記』の所謂「穹廬」——を造り、壁は席の類、屋根には毛皮、毛織物などを葺いたものもあつたらう。しかし大體に於いては、白樺の皮などを張つたのが多かつたらうと思はれる。

原日本人は群島に上陸すると、沿海平地に屯して狩獵に従事し、或は土地を開墾して麻、稻、麥などを栽ゑつけたであらう。彼等は住居の地として、河川の畔、湖水の岸を喜んだ。水は日常生活に於いて最も大事

平地から高地へ  
村落生活の一日

のものであるばかりでなく、原始時代には群島は鬱林に蔽はれてゐて、陸地の内奥深く入り込むことが出来ず、僅かに水畔の平地に居住することが出来たのみであつたら、湖沼や河川の畔が居住地として選ばれたのであつた。彼等は大方河川の流域を自分達の勢力範囲とし、其谿谷に屯集したであらう。平地から高地へ、海岸から山林へ、一時的の天幕式木造家屋が連つて、草葺、板葺、皮葺の屋根がちら／＼と日に輝いて見えた。どこの木屋にも嬰兒の啼き聲が聞かれた。其傍には婦人が石鏃を造り、獲物を料理し、草莖を織つてゐるのが見られた。少年らが駆け廻つて鬼ごっこをしてゐるのが眼に映じた。年を取つた男が日和ぼつこをしながら荒縄で網をすいてゐるのが、如何にも尊けに感じられた。老婦人の栗の實の毬を剥き、胡桃の殻を砕いてゐるのが、人目にも満足げに映つた。

日暮の村落  
狐の獲物  
石斧の音

日暮れが近づくと、山の上に懸つてゐた白い三日月が輝き始めた。魔が住むかと思はれるばかり、こんもり繁つた林の方から、一本の樹幹を肩に擔いで、左手に弓と一所に狐をぶらさけた若者の歸つて來るのが見られた。遠方では人の笑ふ聲、罵る聲が、石斧で木材を切る音とごつちやになつて聞えて來た。一疋の犬が勢ひ切つて彼方の家陰に走せ去つた。鴉はが／＼と啼いて時を急いだ。闇の幕は山の陰、林の蔭から垂

今日主義の平和生活

れそめて、家の前の平地に積まれた麻がらがくつきりと白い夕闇に認められた。やがて夕月に白く輝く家々の屋根の間から、赤い煙のたなびいてゐるのが見えた。數家族合同で獲物の鹿の肉でも焼いてゐるらしい。遠くの方では人聲が一團になつて聞える。

家長の勇敢主婦の忍苦

かうした一日の村落生活は、平和と歡悦と希望とに充たされてゐた。そこには現在があるのみであつた。明日もあるにはあつたが、その幻は淡かつた。昨日もありはあつたが、其影は薄かつた。たゞ今日只今は、彼等原始民衆に取つて非常に貴重視せられ、それを享樂することが生活の一切であるやうに感じられてゐた。親が子を愛し、子が親を懐しみ、兄弟姉妹が一人であるやうに一致して動作した家族の生活の有様は、今日から觀ても羨ましく思はれるほどのものであつたらう。家族を擁護する爲めに勇敢であつた家長、子女を育む爲めに忍苦であつた主婦、それらは多くの子女を始め、同一家庭に起居する一族の人々を結びつけて、互に扶け、互に勵ますことを怠らざらしめる力を持つてゐた。我儘なもの、邪なもの、奇矯なものは、漸次、天死したり、漂泊の旅に出たり、或場合には委棄されたりして、家庭の中には、健全、忍苦、愛慕の感情に満ちた人々のみが残つた。歡びには彼等は共に笑つた、悲みには彼等は共に

非協同者の驅逐

飢饉

生産と死亡

泣いた。怒りも、憂へも、驚きも、恐れも、彼等は皆それを共にした。不獵續きで鹿の肉の香ひをだに嗅ぐことの出来ない時、さうかと云つて川から漁つた少許のハヤやウグヒでは一族の腹を満たすに足らず、また貯へ置きの粟の實も食べ盡くしたやうな飢饉の日には、彼等は飢をも共々に凌いだのであつた。赤ん坊の生れた朝には、彼等は狂ひ廻り、踊り廻り、歌ひ廻つて、一族の人々の喜びを分つた。経験に富んでゐた親切の老人が死んだ夕べには、彼等が出るだけの大聲を出して慟哭して、一族の人々の悲みを分つた。働く時にも、遊ぶ時にも、彼等は共に働き、共に遊んだ。彼等の間には、たゞ家族があつて個人がなかつた。個人の鍛錬と教養とは、個人の爲めにそれがされるのでなくて、たゞ家族の爲めにされるのであつた。

家族、氏族、部落

家族は延長して氏族となつた。氏族はやがて一つの大きな部落であつた。部落はいくつも出来て、河下から河上にまで續いた。これらの部落は皆同一血族で、各家族が互に相愛するやうに、各部落は互に相愛して、一日も互助の精神を失ふやうなことはなかつた。そこには下界の天國が現出して、罪も、禍も、其影を投げなかつた。それは寔に繪にのみ見られるやうな美しい世界であつた。

異族の來襲

たゞ此美の世界、此地上の天國に、平和を攪亂する一つの出来事が時々起つた。そ

死傷者の手當

戦時の老幼婦人

マジック

好戦民衆に非ず

れは山奥に住んでゐる異族——原日本人よりも前から此群島に住んで居り、生存競争に敗けて次第に山林深く逃げ入つた舊アイヌ——の來襲であつた。異族の來襲する時には、一家族、一部落は一團となつて共同的に防禦し、決して甲乙を區別するやうなことはなかつた。彼等の中で傷いたり、死んだりするものが出ると、それを劬はり、慰めて、疵口を清水で洗つたり、蒲の穂をこすりつけてやつたりした。女と子供との間にも、此時には區別が置かれなかつた、彼等は矢張り強壯な男子と一所になつて、石鏃を運んだり、食料を運んだりして、戦線に立つてゐる同胞を勝利に導かうとした。家に残つてゐる動けない老人達さへも、横臥しながら呪文を唱へたり、神葉を打振つたりして、異族の悪い精靈の退散するやうに、熱誠を籠めたマジックを行つた。異族の來襲した時には、いくつもの生靈は皆一つになつて行爲し、そこにはどんな怠け者も、どんな遊び者もなかつた。共同の敵に當る時ほど、美しく、勇ましい原日本人の行動は、他の民衆に多く比を求めることが出来なかつた。彼等は社會生活を生命とし、彼等の各個を集團の爲めに存在するもの、やうに考へてゐたのであつた。

必ずしも原日本人は戦を好まなかつた、それは已むを得ない場合に闘はれるに過ぎなかつた。また舊アイヌとても平和を愛する民衆であつて、戦闘を好まなかつたが故



に出来るだけはそれを避けて、自分で山間に逃避したのであつた。原日本人とても舊アイヌを驅逐しようとする意圖は持たなかつたらうが、其人口の繁殖率と、其生活の適應性とは、自然にそれらの劣つてゐる先住民を驅逐する結果を見たのであつた。かうして舊アイヌは高地に住み、原日本人は低地に住み、前者はいつまでも漁撈と狩獵との生活を送つてゐたのに、後者は其生活様式を進歩させて、漁獵生活から次第に農耕生活に移つてゆかうとする努力を見た。こゝに兩民衆の優劣の差點が横はつてゐた。

けれども、元々兩民衆とも、戦争好きではなかつたが故に、食ふべき食料があり、住むべき場所があり、着るべき衣服があつた間は、彼等は互に接觸し、共に生活して、同一の聚落にこれらの相異つた二つの民衆の共同住居を見たことすらあつた。共同住居は直ちに文化接觸であつた、文化接觸は相互理解を來し、相互理解は言語の混同と血液の混淆とを齎らして、原日本人と舊アイヌとの藝術、思想、宗教、言語、血液は年まじりに接近し、調和し、融合して、或點に於いては全く區別すべからざるまでになつた。私達は群島の東北の或地點に於いては、舊アイヌ式とも原日本人式とも區別のつかぬやうな遺物を見ることがある。それは云ふまでもなく兩民衆の平和的接觸、相

文化接觸と相互理解

言語の混同血液の混淆

新文化の發生

非戰連盟

ヤクト族

小獨立國

互的理解が生み出したところの新文化の存在を證明するものであつた。兩者の間には、さうした理解が出来たとしても、種族の差異は矢張り幾分の反感を相互に其胸の底に懐かしめて、遂には舊アイヌは舊アイヌの大群を作り、原日本人は原日本人の大群を作つて、時には相戦うて無益の争ひに血液を流し、それが度々繰り返され、ば其弊害を認めて、戦争を防止する約束のやうなものを結んだこともあつたらう。さうした戦争防止同盟は、シベリヤ族の間では珍らしからぬことで、今日も尙ほヤクト族(Yakut)の間では *ayellakh* といふ語が残つてゐる。これは氏族の連盟を意味する語で、同時に「和解」とか「平和」とかいふ抽象名詞ともなつてゐて、過去に於けるツングース民衆の平和を憧憬した文化政策を窺知すべき絶好の材料であつた。

家族には家長があり、家族の集りである氏族には氏族長があり、氏族長が社會の最高階級であつた日は長く續いて、日本群島には無数の小獨立國が現はれた。これらの小獨立國が統一されて、大國家の現はれたのは餘程後のことであつた。大國家の現はれるまで、少くとも千年間ぐらゐるは、ツングースは其本來の社會組織を以て、此群島に集團生活を送つてゐたこと、思はれる。

(一)日本語イヘ(Tpe)は、イン(Tpe)と同原であると言語學者に信じられてゐる。古代朝鮮

語では、「家」を意味する語は「Ip」であつて日本語と一致してゐる。

(二) カリホは普通に「假麻」と考へられてゐる。イホはイへと同源である間に間違ひないけれども、カリホは「草」を意味する鮮語 *Kai* と同語ではあるまいか。日鮮人はすべて子音語尾を厭つて之を母音語尾に變ずるが、さうした場合にはいつでも母音「i」をつけるから、*Kai* は當然 *Kaii* と變じなければならぬ。カリホは草舎の義であらう。

(三) 本書第六章第一節参照。

(四) 工學博士伊東忠太氏『稿本日本帝國美術略史』(建築之部)四四三、四四四頁参照。

(五・六) Deniker: "The Races of Man," pp. 164, 165.

(七) ツングースの第一移住に於いては、恐らく農耕は營爲されなかつたであらう。けれども後期の移住者らは、既に禾稻麻苧を植ふつけることを知つてゐた。

(八) 彌生式土器の發掘される場所は、多くは河の岸とか、湖沼の畔とかであつて、さうでない場所からはあまり發見せられない。東京附近で云へば、本郷の彌生町、市外の落合村の如きはそれである。

(九) 『史記列傳』匈奴傳第五十。——「燕北有東胡山戎。各分散居谿谷。自有君長。往々而聚者。百有餘戎。然莫能相一。此記述はツングースが群島へ移住してからも、矢張り保たれてゐた習俗であつて、新羅も、任那も、百濟も、皆私達の祖先たる原日本人と同じく、かうした聚落の發達を見たのであつた。

(一〇) 私は越後の西頸城郡に於いて、聚落發達の歴史地理的研究を試みたことがある。同

郡には名立川、能生川、西早川、姫川、青海川などの八溪谷があつて、いづれも急傾斜の河床が南から北に向つて走つてゐる。中でも一番大きいのは姫川で、糸魚川から始めて其兩岸に多數の聚落が出来、河川を溯つて遙かに信濃の大町まで續いてゐる。これはツングースの部落の一單位は谿谷であつて、同一谿谷なれば遠距離でも同一部落であり、谿谷外なれば遠距離でも部落外と見做すことを例證するものである。一例すれば能生谷の能生町民の如きは、近い隣りの名立町よりも、遠い信州境の小村の方をより親しく、より懐かしく思つてゐる。これらは原日本人の聚落發達を示すのに好適の材料と云へる。

(一一) 一村悉く一つの氏から成つてゐるやうな村はこの國にもある。また一村が二三氏から成つてゐるところもある。いづれも同一血族で、遠かれ近かれ親戚縁戚でない家はなはいふやうな状態にある。

(一二) かうした平和の世界は、どんな未開人の間にも見られる。かうした原始生活については、Tylor: "Anthropology," pp. 405-407. を参照せられたい。必ず領會せられるところであらう。

(一三) どんな種族でも、戦争の時には自分達の部族を鞏固に結合する。原始時代には個人は認められず、たゞ群團が認められるばかりであつた。

(一四) 『古事記』上巻。——「於是大穴牟遲神。教告其孫。今急往此水門。以水洗汝身。即取其水門之蒲黃。敷散而輾轉其上者。汝身如水膚一必差。」

(一五) ツングースは薩滿教 (Shamanism) を信じてゐる。日本の神道は原始形式に於いて

は、シヤマニズムであつたと思はれる。

(一六一—一八)かうした共同住居の證據としては、私は同一の地平から同一の場所で、舊アイヌ式、彌生式、二種の土器の發掘せられる個所を指摘したい。相模の小田原、羽前の醜湖村などは其一例で、後者の如きは二種の土器が重り合つて出て来る。文様に於いてさへ一致を見せてゐる。之らは文化接觸、血液混淆をさへ證據立てるやうに私には思はれる。

#### 第四節 原日本人の經濟狀態

石器時代

(一)石器時代。——人種は同じでありながらも部族が異ひ、移住の年代が異つてゐるが故に、概括して「原日本人」とはいふもの、其經濟狀態はそれ／＼異つて居らねばならなかつた。

古志部族の經濟狀態  
小聚落  
器具

第一次の移住を試みた古志部族は、北海道から出雲あたりへかけた日本海沿岸に住んで、主として漁撈と狩獵とによつて其生活を支持した。彼等は紀元前十八世紀頃から斷續して群島へ移住したが、最初の植民は比較的小群團で、そここに小聚落を作つて、僅かに數家族、最も少い場合は只だ一家族が、孤立した寂しい生活を送つてゐたであらう。彼等の生活様式は、他の石器時代の民衆の如く、武器も日用品も大方石器を用ひ、また若干の木製器具を使つてゐたことと思はれる。彼等の石器は大方大形

大形石器

原始彌生式土器

出雲部族の經濟狀態

で、其製法は無論「打製」であつた。北海道から本州の北部、主として陸奥、出羽の一部にかけて發掘せられる大形の石鎗、石鏃、皮剥などは、此部族の残したものであらう。陸奥海灣に臨んだ高臺の地點からは、極めて原始的な無紋の淡褐色土器が發掘せられた。これは全形でないが故に、形態の上からその種類を定めることが不可能であるけれども、大體、舊アイヌ式よりも彌生式に近い性質のもので、私はそれによく似た原始土器を、嘗て朝鮮の龜旨峰<sup>(三)</sup>上で發見したことがある。此土器の特徴は、質が粗鬆、脆弱で、焼いた時の火力が弱かつたことを偲ばしめる點に在る。文様のないこともまた誰れにも特質づけられる表徴の一つであらう。それらの日に於いては、經濟狀態は甚だ幼稚で、ほんの家庭經濟があつたばかり、社會經濟の日はまだ明けてゐなかつた。

第二次移住を企てた出雲部族は、沿海州のシホタ・アリン山脈(Sikhota-Alin Mts)と、朝鮮半島の白頭山脈(Paik-tu Mts)とに、彼等の陸地に於ける活動を妨げられて、無障無碍の海上に發展を試みた結果、日本海の對岸に松青く砂白き日本群島を發見したのであつた。彼等の渡來は紀元前十二世紀から六世紀に亙る間で、石器時代の終末に近い頃、金屬器時代の初頭に遠からぬ頃であつた。彼等は勿論石器を用ひたが、後

漁獵  
漁網

錘  
獸類と果實

家長  
婦人の勢力

婦人の任務

には若干の金屬器具をも用ひたらしい。生活は狩獵と漁撈とによつて與へられたが、彼等の最も得意であつたのは海灣及び湖沼に於ける漁撈であつた。彼等は漁網(五)を作ることを知り、それに素燒の錘(六)をつけて水中に沈め、一時に可也多數の魚類を漁獲するを企てた。漁網は水草たとへば蔦だの蔦を編んで造つたもので、目の粗い、目方の重いものであつたらう。それ故に、彼等の遺跡から發見せられるもの、やうに、長さ百二十ミリメートル(七)に餘るほどの、大きい、重い網錘が用ひられねばならなかつた。狩獵は川沿ひの山林に於いて試みられ、鹿、猪、兎などの獲物が食料に供せられたであらう。植物性物質、たとへば栗の實とか、胡桃の實とかの如き毬果堅果も攝取せられ、また眞菰(九)の如き水生植物の實も食用せられたらしい。家屋は極めて幼稚な構架式のもので、古志部族のやうに洞穴に住むやうなことはなかつたらう。

彼等は家長を中心として團體を作り、一家族は一箇の群として活動し、個人の勢力は家長の外認められなかつた。家長は大抵男子であつたが、中には婦人(二〇)が支配權、命令權を持つてゐるものもあつた。幾個かの家族群はそれ／＼河岸、湖畔などに住んで、各、其經濟上の獨立を保つてゐるが、血液の同じものは交通して有無を交易したりした。それらの日の工業は多く婦人の經營に一任し、男子は偶々材料を供給するぐらゐる

古志、出雲、  
兩部族の接  
觸

舊アイヌと  
の關係

接觸と理解

のものであつた。土器、石器、木器の製造は勿論、植物の纖維を織つて衣服の材料となし、動物の皮を剥いで、袋を造つたり、靴を造つたりしたものも、また皆婦人であつた。食物の調理には無論婦人が當つたであらう。婦人は子女を育てる外に、かうした任務を持つてゐるので、常々極めて忙がしく暮らしてゐた。

古志部族と出雲部族とは、ひとしくツングースに屬してゐるから、前者が南下し、後者が北上して、日本海岸の沿海平地で相逢ふことがあつても、そこに容易に相互の理解を見たが——無論、時には鬭争を試みたこともあつたに相違ないけれども——風俗も習慣も言語も異つてゐた先住民の舊アイヌとの間には、屢々地理上の勢圏について争つたであらう、時には相互に全く敵視し、怪物視し、人類として相互を視ないこともあつたらう。舊アイヌとツングースとはかうして戦つた、互に勝敗があつたけれども、概して前者は負けて次第に山林深く逃避した。けれども、平和にしる、戦争にしる、接觸は接觸たるに相違なかつた。異種部族の接觸は、其各々をして他の強點と弱點とを知らしめる。舊アイヌの退いてしまつた後で、彼等の住居からツングースは種々様々の珍らしいものを發見したであらう。ツングースの捕虜から、彼等の裝飾品、武具などを舊アイヌが手に入れて、其精巧、銳利なのに驚いたともあつたらう。彼れ

出雲石と黒曜石

に有るところの物は必ずしも此れに有るのではなく、此れに有るところの物は必ずしも彼れに有るのではないことを互に知つて、彼等はいづれも缺乏を歎じたり、剩餘を喜んだりしたであらう。舊アイヌを最も垂涎せしたのは、ツングースの持つてゐた出雲石の曲玉(一)であつたらう。ツングースに頗る遺憾を感じしめたのは、舊アイヌの持つてゐた黒曜石(二)の石鏃であつたらう。こゝに美を愛する舊アイヌと、力を愛するツングースとの差異が横はり、また兩種族を接近せしめる楔子が横はつてゐた。

沈黙の貿易

原始人の金  
屬に對する  
憧憬

いつの間にか兩種族の間には、沈黙の貿易が行はれてゐた。古く大陸を離れて、久しい間、日進月歩の文化の影響を受けなかつた舊アイヌは、稍、後れて群島を訪問して、進んだ文化を持つてゐたツングースの生活の剩餘を、自分達の剩餘と交換することによつて、どれだけ其缺乏を満たし、其不満の感情を癒したであらう。殊に時代が進んで、多少の金屬器がツングースに現はれるやうになつてからは、それに舊アイヌはどんなに憧憬れて、それを手に入れることを夢想したのであらう(三)。金屬時代が來た時、舊アイヌはさうした夢想を實現する爲めに、怨めしさも、腹立たしさも忘れて、ツングース族と握手するやうになつた。無論武力の戦争に於いて、續けざまに負かされたことも一因であつたが、平和の戦争に於いて勝ち得なかつたことが、舊アイヌをして

金石併用時  
代

敗北し、退却し、次第に自分達の勢圏を異種族に與へるの屈辱を見しめた原因でなければならなかつた。

青銅器

自然物資の  
豊富と産業  
の墮落  
食料の減少

(二)金石併川時代。——出雲部族は引續き移住して來たが故に、其人口の増加は單に繁殖のみに由つたのではなく、主として移住によつたものであることに疑ひはない。かうした植民的性質に富んだ彼等は、年増しに新しい大陸の文化を輸入して、紀元前四五世紀の頃には、もはや純粹の石器時代は終りを告げて、輝かしい青銅器石器併用時代を迎へてゐた。他の言葉で云へば、漂泊的な漁獵生活の時代が去つて、定着的な農業生活の時代が來てゐた。彼等は北方に於いて異種族たる舊アイヌに接觸した如く、南方に於いても自分達と風習の異つた他種族に接觸し、それらから様々の進んだ文化を輸入することが出來た(四)。彼等の中、後れて來たものは、移住の日に於いて、既に若干の農耕を試みつ、あつたが、自然物資の豊かさの爲めに人工物資の收穫を怠り、自分達の生活様式を改めて一時舊の漁獵時代に還つたやうな觀があつた。けれども、間もなく、自分達の子孫の繁殖と、後來民衆の絶えざる移住とで、其人口が急激に増加して、自然物資のみに由ることが出來ないやうな破目に陥り、こゝに再び彼等は目覺めて農耕民衆と進化した。山林に於ける鳥獸の減少(五)、河海に於ける魚貝の後退は、ど

んなに彼等を食料の缺乏から苦めたであらう。彼等は豊かな漁獵の日に腹鼓を打つことが出来たけれども、さうでない日が幾日も續くと、長い間の饑饉に苦まざるを得なかつた。此經驗は彼等をして、從來の生活様式を改めて、口一日と農耕生活に向つて、其歩を轉ぜしめた。

農耕生活の模範は、自分達と血液を同じくする後來の北西民衆であつた。血液は同じくないけれども、文化が一段進んでゐた南西の移住民衆もまた、彼等に農耕を教へた先覺者であつた。大陸に於けるツングース族が、石器時代の末から農業を試みつ、あつたことは、朝鮮金海貝塚の石器時代の層から石器や土器とともに角製の鎌が出ることも證明せられる。金海は朝鮮半島の最南端洛東江の沖積層上にあり、後に任那の首都となつた場所、三韓時代には弁韓に屬する土地であつた。弁韓民衆は辰韓民衆と雜居し、食住衣ともに同一であつた。辰韓は弁韓の北東に在つて、古くから五穀を作り、稻を栽ゑ、養蠶をすら知つてゐた。馬韓は辰韓の西に在つて、其民衆は土着して農業を營み、蠶を飼つたり、布を作つたりしてゐた、辰韓の北に位する濊に於いても、濊の北方である東沃沮に於いても、東沃沮の西である高句驪に於いても、高句驪の北である扶餘に於いても、皆農業を營んでゐたらしい。これら大陸の東端に占據

農耕生活の模範

金海貝塚の

弁、辰、馬三韓の農業

濊、東沃沮、高句驪、扶餘の農業

耕作の大革命

「羅段耕作」



南支那那順寧溪谷の羅段耕作

してゐた民衆は、皆原日本人と同一種族で、其生活様式は相近かつたからして、農業に於ても殆ど同一形式の耕作法を採つてゐたに相異ない。

これらの民衆の外、原日本人の農業に大きな影響を與へて、耕作の土に大革命を齎したのは南西から移住して來た印度支那族であつた。彼等から私達の祖先が學んだ耕作法は所謂「羅段耕作」(“Terraced Cultivation”)で、稻の栽培もまた彼等から教へられたに相違ない。其事は次ぎの章に於いて詳しく述べよう。兎も角も、かうして石器時代を漁獵生活で推し通して來た原日本人は、其終末に於いて農耕生活の曙を見たので

作物の種類

あつた。それらの日の作物は、主として粟、稗、黍、豆などの五穀(二二二)であり、麻(二二三)も恐らく栽培されたであらう。蠶桑は米作と共に、事によると南西民衆の齎(二二四)らした土産であつたかも知れない。何にしても、此事は經濟界の一大變動で、これが爲めに「原日本人」は「日本人」となることが出来たのであつた。

商業の曙

農業の曙は、原日本人に取つて、同時に定住の曙であり、また商業の曙でもあつた。商業は勿論前述の如く、石器時代から微弱ながらも光りを射いてゐたけれども、其光りの第一線は農業の夜が明けた時に投げられたのであつた。其譯はかうである。農業が起らなければ民衆の定住がなく、民衆の定住がなければ、聚落の發達がなく、聚落の發達がなければ物資の過不及が著しく感ぜられない。物資の過不及が著しく感じられた時は、無言貿易が相對貿易となつて、相互の承諾の下に任意の物々交換が行はれ、次いで交易媒介としての貨幣を通用せしめるに至つた時であつた。最古の史籍(二二五)に従へば、辰韓は多く鐵を産出したので、馬韓や、濊や、倭の民衆は皆それを輸入した。市場では鐵が支那で錢を用ひるやうに用ひられたとある。

無言貿易から相對貿易へ  
辰韓の鐵  
言語習慣から觀た古代交易

原日本人の商業が餘程古い時代に其芽を萌(二二六)いたことは、普通の史籍ではこれを知ることが出来ない。言語習慣からは、しかしながら、それを窺知することが出来る。漢

貝貨

「買ひ」の語原

「賣り」の語原

馴鹿は財産

大形の鹿角

字の「貨」が「貝」に従ふ如く、北東アジアに於いても一時貝貨が行はれたことがあつたに相違ない。貝の古代語は恐らくカブ(Kab)で、子音語尾を忌む原日本人はそれを母音語尾に變化する爲めに、彼等の言語法則(二二七)に従つてイ(i)を加へてカビ(Kabi)となし、餘剩ある物資——たとへば馴鹿を對手に手渡して、貝或は缺乏してゐる物資——たとへば鐵を受取るやうな場合に、受取ることを貝(kabi)で現はし、名詞カブを四段活用の語尾變化によつて動詞化し、カビ、カブ、カベ、カバナ(Kabi, kapu, kaje, kapana)などと云ひ、手渡すことを彼等の唯一の財産で、常に餘剩のある馴鹿(ula)で現はし、名詞ウラを四段活用の語尾變化によつて動詞化し、ウリ、ウル、ウレ、ウラナ(uri, ulu, ule, ulana)など云つたのではあるまいか。そしてそれが今日の國語「ウリ、カヒ」に變化したのではあるまいか。オロッコ人は、今日でも「財産」を意味する語は、「馴鹿」を意味するウラ(ula)の轉訛であるウリ(uri)であることなどを思ふと、私の假定は決して無理でないやうである。若し、私の假定が正しいとしたならば、原日本人の商業の發達を、非常に古い時代まで溯らして考へることが出来る譯である。群島の處々からは、今日、日本に住んでゐない大形の鹿の角(二二八)が發掘せられ、そしてそれらはまだ學者によつて種が決定されてゐないけれど、或は馴鹿の角又ではないかとも云は

れてゐる。實に興味のある問題の一つと見なければならぬ。かうした梗概の記述によつて、おぼろげながらも原日本人の經濟狀態を窺ふことが出た。尙ほ遺された重要なことは、<sup>(二七)</sup>礦物の種類、産地、其製鍊などであるが、それらについては、金屬時代の經濟狀態と共に、別に節を設けて述べることにしよう。

(一) 山形縣西村山郡の峯地から出る石器には大形のものも多く、關東地方で出るアイヌ式石器とはまるで類を異にし、却つて大陸の石器時代遺物によく似てゐる。

(二) 青森縣上北郡有戸の高臺から發掘したものを、私は近衛直麿氏から送られた。どうしても、それは、舊アイヌ式の石器と區別せられねばならぬ。

(三) 龜旨峰は金海盆地の奥にあつて、駕洛國王の生れた土地だといふ傳説がある。こゝで發見した土器は、彌生式土器の原始形と見ることの出来るもので、いたく註(二)のものと似てゐる。

(四) 陸地生活に慣れた民衆を、慣海民衆に變化せしめるには、色々の動因があるけれども、大山脈が沿海平地を狭小にしてゐる土地は、往々民衆をして陸地を見限つて海上に發展せしめる。出雲民衆の如きは其一例で、私はいつも之をレバノン山脈(Libanon)に住地を限られて、地中海に發展していつたフェニキヤ民衆(Phoenician)に比較してゐる。

(五) 漁網は發見せられない、それが腐朽性に富んでゐるからであらう。けれども網が出る以上は、それをあつたと假定しても差支ない。

(二六) 土鍾は舊アイヌの遺跡からも多く發見せられる。けれども彌生式土器の出る遺跡からも之を發見することがある。越後西頸城郡梶屋敷の海中から出る石製品は、一種の石鍾ではなにかと私は思ふ。

(七) 東京府南埼玉郡舎人村發見の彌生式土鍾、早稻田大學藏品。

(八) 鹿角、猪牙、兔齒が往々にして彌生式遺跡から發見せられる。

(九) 眞菰(*Zizania aquatica*)は「朝日民衆」(“*Ce-es-saw*”)と自稱する北米のチツペワ族(Chippewa)によつて食用に供せられてゐる。其事は Densmore: “Study of Chippewa Material Culture” (“*Smithsonian Miscellaneous Collections*,” vol. LXVIII, No. 12.) に詳しく載つてゐる。私はマコモの分布からして、シベリヤ、日本、北アメリカでは、昔これを食用に供したと思ふ。

(一〇) 本書第六章第一節参照。

(一一) 舊アイヌは原日本人と接觸を始めて、其裝飾としてゐる曲玉を愛し、それに似せて自分で曲玉を造つたらしい。舊アイヌの遺跡から出る曲玉は、原日本人のそのやうに彎曲が巧くいつてゐない、L字形に角立つて曲つてゐる。

(一二) どうも確證はないけれども、黒曜石を産しないところに黒曜石の石器が發見せられるから、此石が貿易の目的物になつてゐたやうに思はれる。原日本人の遺跡と私の信する出羽發見の石槍に黒曜石で造つたものがあつて、其原料は北海道から來てゐるらしい。

(一三) 金屬を持たぬアイヌが如何に金屬を愛したかは、彼等が船一ぱいの干鮭と、たつた



三個の鈴とを交換したことによつても知られる。此事は金田一京助氏の調査に依る。

(二四)南方の異種族として、私はインドネシヤン (Indonesians)、印度支那人 (Indo-Chinese)、漢人 (Han Foo) 等を擧げて置きたい。詳しくは本書第四章の各節を見られたい。

(二五)いくら漂泊民族でも、一定の場所に假屋を造つて狩獵或は漁撈に従事するから、自其附近で鳥獸魚介が減るのである。農業が発達して山林の開かれてゆくことも、また山林の動物を脅して、彼等の繁殖を妨げる一因となる。

(二六)金海貝塚發掘の角織は、鹿又の上下を切つて、角の末の方に柄をつけ、又て地、耕すやうにしたものである。文學博士鳥居龍藏氏『新羅伽耶以前の南韓族』參照。

(二七)『魏志』卷三十、東夷傳。「弁辰與辰韓雜居。亦有城郭。衣服居處。與辰韓同。言語法俗相似。」

(一八)同上。「土地肥美。宜種五穀及稻。曉蠶桑。作織布。」

(一九)同上。「常以五月下種。……十月農功畢。」

(二〇)同上、濊、東沃沮、高句驪、扶餘の各項參照。

(二一)本書第四章第二節參照。

(二二)普通「五穀」は米、麥、粟、黍、豆の五つを計へるが、『魏志』などには「五穀及稻」とあるから、米は五穀の中に計上せられてゐないと見るのが正しい。米は漢族本來の食料でないが、後に主食物となつたから、これを勘定の中に入れることになつたのだらう。

(二三)麻は比較的古くから日本民衆に栽培せられてゐた。武藏の國名の如きも、移住の朝

鮮民衆が彼等自身と共に携へた麻種から得た名で、ムサシは多分鮮語の "Mōsō" 即ち「麻種」であらうと、鳥居文學博士は云つてゐられる。麻には二色あり、一つをアサ(大麻)——(Cannabis sativa)と云ひ、他をアヤ(亞麻)——(Linum ossariyide)といふ。支那ではアサの方は川也古い昔から織物の原料として用ひたが、アサの纖維は用ひなかつた。日本もさうである。然るに地中海方面ではアサを用ひ、却つてアヤを用ひなかつた。東方ではアサを用ひ、西方ではアヤを用ひたといふところに、東西文化の差異が横はつてゐる。歐羅巴地方に此アヤを輸入したものはスキタイ人 (Scythian) であらう」とルンドン氏 (A. de Cordale) は説いてゐる ("Origin of Cultivated Plants" 參照)。

(二四)『魏志』卷三十、東夷傳。「國出鐵、韓濊倭。皆從取之。諸市買皆用鐵。如中國用錢。」

(二五)ツングース族には語尾が子音で終るのを忌んで、母音イを語尾に加へ、母音語尾に變化せしめる語法がある。日本では今日かうした語法が減んだが、動詞が名詞に變じた動名詞は、いつも語尾がイで終つてゐる。朝鮮には今日でも尙ほ此語尾變化が行はれてゐる。

(二六)千葉縣東葛飾堀之内貝塚、及び東京府東埼玉郡舍人村發掘の標品に依る。

(二七)金、銅、朱、鐵などについて述べたいことが多いけれども、其説明は後章に譲つて置く。

### 第五節 美の追求と生の享樂

美を求め  
心的萌芽

低徊趣味と  
率直趣味

固有の生活  
法は單純

どんな自然民衆の頭にも、美を追求するところの心的萌芽が含まれてゐる。舊アイヌが美に憧憬れたやうに、原日本人も矢張り美を追求して止まなかつた。しかしながら、そこに兩者の間に、追求せらるゝ「美」の型式の差異があつた。其差はやがて人種の差であり、また文化の差でもあつた。たとへて云はゞ、舊アイヌの憧憬れる美は、弧線によつて示される低徊趣味であつた。原日本人の追求する美は、直線によつて表はされる率直趣味であつた。舊アイヌは、移住以來、久しく群島に住んで、その自然から色々の美形式を發見し、それを自分達の藝術に取入れた。故に其藝術は、多く獨立起源を持つたものであつた。之に反して、原日本人は久しく大陸に住まつて、近周民衆から色々の影響を與へられ、其生活も部族々々によつてそれ／＼異つて居り、群島移住後も在來様式に従つて其生活を生活し、尙ほ未だ自分達のみに限られたやうな特殊の藝術を持つてゐなかつた。いはゞ大陸——殊に北東アジアに共通の形式であつた。

原日本人は元來が移動性に富んで居り、従つてどんな地理的哀境にも適應し得る性能を持つてゐたが故に、其固有の生活法は極めて單純であり、色ならば何色にも染めらるべき白に比べらるべきものであつた。彼等と血液を同じくする北東アジア種族は

扶餘族

高句驪族

馬韓族

沃沮、挹婁、

濊

辰韓と弁韓

原日本人移

それらの日に於いて殆ど相同じき生活を生活し、また其民族性に於いても、いくらか共通した點を持つてゐた。今の滿洲に蟠居した扶餘族は、比較的純粹の生活をしてゐたが、其體格は粗大で、性質は極めて勇ましく、しかも謹直重厚であつて、侵寇と剽盜とを喜ばなかつた。扶餘族から分れた高句驪族は、文化民族たる漢族の影響を受けて、本來の鈍重性を失ひ、いくらか神經質的になつて、生活の保障の爲めに寇鈔をさへ試みるに至つた。高句驪から出た馬韓民衆も、性質は剛強勇健であつたが、異種族と雜居してゐた爲めに綱紀が弛んで、社會的秩序は立つてゐなかつた。沿海州から朝鮮半島の東海岸にかけて住んでゐた民衆も大差なく、沃沮族は率直であり、挹婁族は剛勇であり、濊族に至つては社會道徳が大分進んでゐたと見えて、窃盜する者はなく、自己を抑制して他人の爲めに闘るほどの徳性を有つてゐた。辰韓族の社會組織は可也に進んでゐたらしく、弁韓族は大きな體格を美しくしい衣服に包んだ長髪の民衆で、峻嚴な法俗の間に克己の生活を營んでゐた。かうした民衆と同一の血液を受け、類似の土俗を有つてゐたのであるから、原日本人が率直、剛勇、潔癖な民衆であつたことは大抵それ／＼推知せられる。

偉大な體格、長直な毛髮、鋭く尻の切れた眼、引締つた輪郭の顔——さうした體質

住後の心理  
變化

古志部族の  
技工の墮落

出雲部族の  
藝術

珠の愛

を持つた原日本人が、北方の暗い、乾いた、廣大な天地から放されて、山高く、海潤く、草木繁り、水蒸氣多く、林には鳥囀り、野面には花笑ふ明快の天地に移住して、豊富な自然の物資の供給を受けた時には、俄かに天國に來たやうな氣がしたであらう。忍苦と自制とが不必要であるやうに思つたであらう。肥沃の土地は豊かな果實を生じ、脂ぎつた獸、人を恐れぬ鳥、捕つてもく、捕り盡せぬ魚介は、彼等をして一時茫然として何事も手に着かぬ感に打たれさせたであらう。第一移住を試みた石器時代に於いては、一時彼等は墮落した自分達を群島に發見したらう。彼等の土器が粗製であつて、形も整はず、質も脆く、何らの文様の施されてゐないのは、時代の古さを示すといはうよりも、技巧の墮落を示すものではなかつたらうか。

原日本人の藝術の進歩は、早くとも第二次移住からであらねばならぬ。第一次に移住した古志部族よりも遙か南方に住んで、比較的に進んだ大陸文化に接觸してゐた出雲部族は、移住と同時に様々の物質文化を輸入した。彼等は其時既に半ば開けた社會生活を送り、いくらかの制度といくらかの道徳とを持つてゐた。彼等は最早たゞの實川だけに満足する民衆ではなかつた。其胸裡には美を求め心が湧いてゐた。彼等は燦爛たる金銀の飾りは好まなかつたけれども、色澤と文理とに富んだ珠を愛し、それ

織物

玉の種類

自然の模倣

を衣に綴つたり、頸にかけたり、耳に垂れたりして喜んだ。此點に於いては馬韓民衆、扶餘民衆と嗜好を同くした。彼等は衣服の美しく、清らかなのを好んだ。麻布の晒しは恐らく彼等がそれらの日から持つてゐた工業であつた。此點に於いては弁韓民衆と習俗が均しかつたであらう。

織物は朽腐性に富んでゐて、今日何らの考古學的材料が残つてゐないけれど、珠玉の類は古墳其他から多く發見せられ、彼等が直線を愛する本來性を持つてゐたにも拘

らず、尙ほ弧線に對する趣味をも解し得たことを示してゐる。玉類で普通なのは管玉であり、それらの間に切子玉だの、棗玉だの、丸玉だの、小玉だの、曲玉だのを交へて、緒で貫いたものが所謂「みすまるの玉」であつた。かうした玉の形は皆自然物の模倣であつて、恐らく彼等が長い間に工夫して創造したのであらう。管玉は



玉切



玉棗



玉丸



玉曲

玉の故郷

竹幹、切子玉は水晶、丸玉は木の實、曲玉は魚や獸の齒牙を模倣したものであらう。<sup>(一九)</sup> 曲玉の中には其彎曲内側に刻みを入れた丁字頭といふ一種がある。玉類の嗜好はこの民衆にもあるが、特に東方民衆はそれが濃厚で、それを得たい爲めにどれだけ遠隔の土地に遠征を試みたり、他種族と接觸をしたりして、同胞觀念、平和思想の促進に間接の力となつたか知れやしなかつた。米國の一考古學者は、イラニヤ人、トルコ人、アラビヤ人が、西部アジアの寶石を東部アジアに輸出したことを暗示してゐる。

玉の原料

これらの玉の原料は色々あるが、主として瑪瑙、玉造石、青瑯玕、水晶、玉髓、滑石などで、中には「吹玉」といつて古代硝子で造られたものもあつた。それらは必ずしも原日本人が造つたり、日本群島が産出したものばかりではなく、交易によつて他種族、他地方から輸入したものもあつた。瑯玕の如きは明らかに大陸から輸入したに相違ない。<sup>(二〇)</sup> これらの珠類は緒に貫いて、馬韓人が試みたやうに、頸飾りとしたり、或は耳飾り、或は頭飾り、或は衣服につけて飾りとしたりしたが、それは單に其形狀、色彩、光澤を喜んだばかりでなく、それらが擦れ合つてちやらくと鳴るのを喜んだのであつた。<sup>(二一)</sup>

玉の音

ガラガラ

原始音楽は摩擦音に始まる。それを私達は音楽發達史上の第一段階としてガラガラ

鈴

歌口ある土笛

(Rattle)と呼んでゐる。珠の音は所詮ガラガラの域を脱しないものであつた。原日本人が最も愛したのは鈴で、後には金屬製のものも現はれたが、最初は土製のものを川<sup>(二二)</sup>ひた。また尺八のやうに「歌口」を有つた高坏形の土笛もあつた。<sup>(二三)</sup> 私の友人は私と共に<sup>(二四)</sup>此樂器の共同研究に従事して、それが有つてゐる音質、音程などについて綿密の調査をしてくれた。これは唇の工合と、息の噴き入れ方とで、少くとも六音を出すことが出来る。これだけの音が出れば、可也に複雑な歌謠の伴奏に適したと思はれる。



歌謠の形式

神樂歌と朗詠

歌謠の形式がどんなであつたかは、その本來の性質上、今日から窺ふことが出来ないけれども、少くとも延音によつて調子を調べたものではなかつたらうか。長音の旋律ある連続は、忙がしい今日の私達には、眠りを誘ふ夢の邦の音楽のやうに思はれるけれど、悠長な古代人は、さうした歌謠によつて、どんなに共鳴を感じさせられたらう。神樂歌だの朗詠だのには、いくらかさうした古代の痕跡が残つてゐると私は考へる。歌謠は常に何らかの形式で器樂の伴奏を作つた。原日本人の歌謠も、土笛だの、土鈴だの、木琴だの、伴奏によつて音の調譜が試られたに相違ない。聲樂も器樂も其

宗教の後推し

狩獵祭から農業祭へ

馬韓の祭り

洗鉢晏  
瑟と木琴

發達の経路を考へると、これらは決して單なる樂美の追求からは生れなかつた。それらはあらゆる他の藝術と同じく、いつも背後から宗教儀式の後推しをされてゐるのであつた。原日本人の音樂もまた其原則を離れることが出来なかつた。

初めは狩獵祭が行はれる時に、何らかの形式の音樂が行はれたであらう。金石併川時代が來て若干の農耕が營まれ、漁獵兼農耕生活ともいふべき生活を原日本人が營みつゝ、あつた時、彼等は今日の田植祭や神嘗祭に匹敵すべき祭祀を行つた。無論、狩獵祭も行はれたに相違ないが、祭祀の目的が次第に農業化しつゝ、あつたことは、それらの日の支那人の記述によつてそれと窺はれる。馬韓では五月に下種の祭り（田植祭に相當する）があり、十月に農功の畢つた祭り（神嘗祭、新嘗祭に相當する）があつて、其時には民衆が多數群つて、歌つたり、舞つたり、酒を飲んで酣酔したりした。手拍子、足拍子を取つて、酒に酔ひしれた彼等が踊り廻つた有様は、今日朝鮮で見られる洗鉢晏や、我國で見られる秋祭りなどで想像せられる。辰韓では一種の瑟を用ひて、歌舞飲酒の興を助けたが、それは筑に似しるたといふから、今日出雲大社に残つてゐる木琴の如きものであつたらう。濊民衆の祭りも、高句驪民衆、扶餘民衆のそれらも、共に十月に行はれて、飲酒、歌舞に夜の明けけるのも知らなかつた。扶餘民衆は殊に歌

祭祀は生活理想の影

滑稽演劇

演劇の原始形式

神事劇

アマテラスの岩戸隠れ

舞を愛し、老いと若きも皆歌つて、幾日もく歌聲が絶えなかつたといはれる。

祭祀は民衆の生活理想の影である。かうした東方民族の祭祀に伴つた宴會、儀式、音樂は、直ちに彼等の生活に對する考へを表現するのであつた。原日本人の間には、それらの場合に行はれる餘興に、一種の低級な滑稽演劇があつたやうに考へられる。私の此假定は決して亂暴なものでなく、相當の理據を持つてゐるのである。かの岩戸隠れ説話の如きは、私の假定を證據立てるのに大事の一材料である。石器時代の日が破れた時に、既にあつた形式の演劇があつたかどうかは分らないが、假りにあれを飛鳥寧樂時代に出來たものと考へて見ても、それらの日にそれが俄然として湧いて來る筈がない限り、それが原始時代からあつた形式を以て徐々に發達しつゝ、あつたといふことは出来る。

どこの民衆でも、演劇の原始形式は神事劇（Oratorio）で、それから色々の要素が分岐して其各々が發達したのであることは、誰れしも人の知る所であつた。原日本人の滑稽演劇も、矢張り此神事劇から出立した。——スサノヲがアマテラスの田の畔を壊したり、食事の時に大小便をし散らかしたり、機場で布を織らしてゐるところへ、逆剥ぎにした馬を投げ込んだりしたので、アマテラスは天の石屋戸の中へ入つてしまつて出

八百萬の神達の評議

ワズメの舞踊

大神樂

語り物

て來ない。高天原も闇になり、葦原の中つ國も闇になつた。闇は罪惡の衝であつた。惡神は急に活動を始め、災禍は俄に民衆を苦めた。八百萬の神達は天の安の河原に集つて會議を開き、知識の神であるオモヒカネの計畫に基づいて、常世の長鳴鳥を鳴かせたり、鏡を造つたり、玉を造つたり、木綿だの麻だの、幣を造つたりして、それらを神の枝につり下げ、それらを岩屋戸の前に獻けて、さてアミノコヤネが祈禱をする、タヂカラヲが戸の傍に立つて機會を待つてゐる。アミノウズメが蔓草を攀にしたり、鬘に冠つたり、笹の葉を手に持つて、乳も露はに桶を踏み鳴らして踊り狂ふ、神怒りして面白可笑しく煽情的に踊り狂ふ。八百萬の神達は、高天原をゆるがして笑ひ倒れる。あまりの騒々しさにアマテラスは好奇心を動かして、岩屋戸を細目にあけて外方を窺ふ。内と外とでは二三の問答が交換せられる。其間にタヂカラヲがアマテラスの手を取つて引出す。高天原も葦原の中つ國も舊のやうに明るくなつた。そこで、スサノヲが鬚を切られて、追放の刑に處せられる。<sup>(三四)</sup>——これが神事劇の粗筋で、其系統は今日の大神樂に繋がつてゐる。かうした筋を持つた語り物も、また同時に行はれて、可也に當時の民衆一般から歓迎せられてゐるらしい。

語り物は、恐らく聲の美しい、節廻しの巧みな人々によつて語られたであらう。

落ち

葛藤の和解

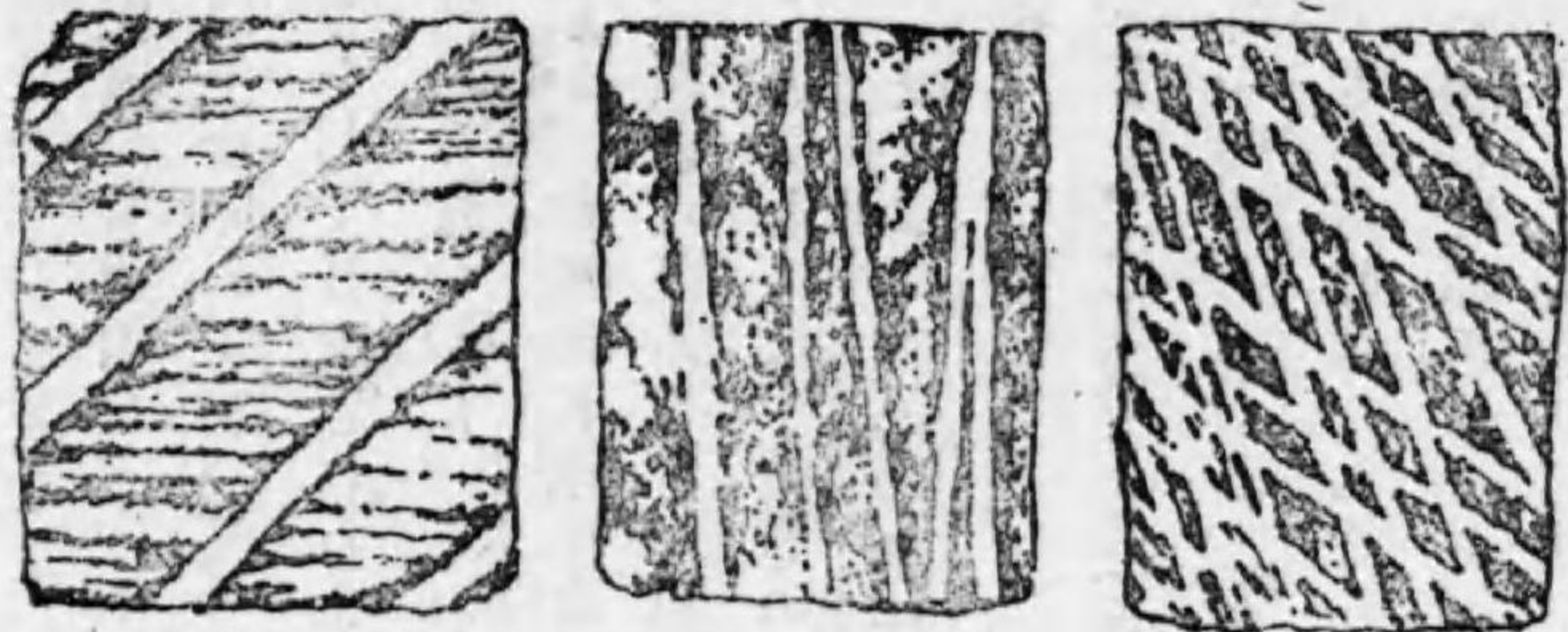
「語り部」

眼の娛樂

赤色顔料

語るとは云ひながら、それは半ば歌はれたに相違ない。天岩屋戸隠れを始め、國譲り、八咫遠呂智退治など、あつた神話は皆所謂「落ち」を持つてゐて、大團圓になると聽衆は手を叩いて喜び笑つたのであつた。悲しみも憂へも彼等には慰めであつたけれど、彼等をして吾を忘れるまでに喜ばしたものは、かうした葛藤の和解に伴ふ突梯であらねばならなかつた。それはどの民衆の歴史の曙にも見られることだけれど、原日本人に於いては殊更に著しかつたらしい。それは彼等が歡樂を追求し、怡悅を憧憬し、喜び、騒ぎ、笑ふことを以て人生の目的としたからであつた。かうした樂觀主義を認めることなしには、彼等の神話も傳説も理解することが出来なかつた。こゝから「語り部」といふ一種の職業氏族が発生したといふやうなことも否定が出来ない。「先代の舊辭」などいはれたものも、所詮は此語り物の一種であつて、アイヌのユーカーラ<sup>(三五)</sup>(Yukara)に比較するべきものであつた。

耳を娛ましめることを要求するほどの民衆は、眼を娛ましめることをも要求する民衆でもあらねばならなかつた。彼等の趣味は明るさに繋がつてゐるが故に、彼等の愛する顔料は赤色であり、常に喜んで丹と朱とを器具其他に塗つた。<sup>(三六)</sup>彼等の土器も亦褐色を呈し、彼等の衣服も丹赭が抹せられた。眼の醒めるばかり赤く塗られた古墳石室<sup>(三七)</sup>



(一) 彌生式土器直線文様



(二) 彌生式土器直線文様

の中に立つて、眩惑の經驗を嘗めた人々でなければ、此間の消息を本當に理解することは出来まいと思はれる。

彼等の土器は往々にして地下から發掘せられ、彼等の彫刻、文様、意匠などを私達に知らしめる。土器の形式は可也に色々あるけれど、平面圖は圓形を呈し、側面圖がY字形或はU字形を呈するものが一

彌生式土器

彌生式土器は原日本人の造つたもので、それが始めて東京市本郷區彌生町から發掘せられた爲めに、かうした地名を貢ふるに至つたのである。此圖は初めて發見せられた彌生式土器で、東京帝國大學人類學教室に保存せられてゐる。頸部に小さな圓形突起のあることは、東京府から埼玉縣に亘る荒川沿岸で發掘せられる此型の土器の特色の一つで、多分玉製の頸飾りを模したものであらう。三角文様(Chevron)の陰刻を持つたことも亦た注意すべき特徴の一つであらう。これら彌生式土器は、舊アイヌ式のそれと異り、把手なく、色が赤褐で、文様が直線型であることだ。此圖のものは彌生式土器の代表として、歴史上にも、型式上にも、頗る價値の多いものと云はればならぬ。



と云われりたるなり。

藤生友土器の外美として、縄文土器も、埴土土器も、類々甕蓋の形のもの  
異じ、形半ばく、色も赤褐色、文飾は直線縞であることだけ。此圖のものに  
意するべきは、井田の二つである。この二つは藤生友土器の、蓋とト×友の字の  
が刻されたものである。三貴文書(Copied)の刻字が井田の字も亦刻  
と兼川井の字も刻されたる此種の土器の井田の二つは、後代王姓の應神  
と外である。應神の字も井田の字も刻されたること、東京府の御正徳の巨  
圖の傍に丁登見の字も刻されたる藤生友土器、東京帝國大學人類學研究室の報告  
に、この報告の字も刻されたる、この二つは、蓋とト×友の字の二つである。此  
藤生友土器は、東京府の御正徳の字も刻されたもの、この二つは、蓋とト×友の字の二つ

### 藤生友土器



沈彫文様

山型文様

浮彫

圓孔

繪畫術

般に歓迎せられた形式であつたらしい。それらの土器には無紋のものもあるけれども、又往々にして沈彫文様<sup>(三九)</sup>(Incised pattern)を施したのもある。文様は物理文様(Physio-morphs)、一名を幾何文様(Geometric pattern)といふのが多く、従つて、いづれも、直線で現はされて、孤線を用ひたものは少い。植物文様(Phylomorphs)や動物文様(Zoosomorphs)は見られない代り、山型文様<sup>(四〇)</sup>(Chevron pattern)の果てしなき意匠變化を見ること出来る。直線の按排に於いては、原日本人は確かに舊アイヌを凌ぐものであつた。原日本人の彫刻には、若干の丸彫(Utatury)を除く外、舊アイヌに見られるやうな浮彫(Relief)を發見しない。そこに簡素な原日本人の通有性が現はれて居る。今一つの注意すべきことは、彼等の土器に圓孔<sup>(四一)</sup>の穿たれてゐることである。或學者<sup>(四二)</sup>の考へるやうに、これを太陽崇拜に結びつければ理解が容易であるけれど、果してさうした意匠が行はれてゐたであらうか、其點については私は疑ひを懐かざるを得ない。繪畫術は矢張り彫刻を離れてはそれを窺ふとが出来ない。古墳の中には新しいものあらうけれど、尙ほ彼等の繪畫術を窺ふとが出来、又それらからそれらの日の服装、動作、器具などを知り得るもの、あるのは、古代史家に取つては一つの歡悦であり、藝術家に取つては一つの主題であらねばならない。繪畫には自然、人事の寫生が多いけれ

様式化と簡單化

自由繪畫

ども、其大部分は硬い石面に沈彫したものであるから、描寫の技巧は分りにくい。ただ様式化と簡單化との實力は、文様によつて之を窺ふことが出来る筈であるが、今日の研究の程度では彼等の表現しようとしたものが何であるか分らないのは遺憾である。新羅や高句麗の唐草瓦を観ると、全然形式を打破して自由に、前者は植物(菊)、後者は動物(蛙)を描いたものがあつて、原日本人が様式化された表現よりも、自由自在な梗概化された表現を喜んだことが分る。こゝに原日本人の自由を愛し、束縛を厭つた固有心理が窺はれるのであつた。

建築様式の變化と系統

校倉式

建築のこともこゝに取扱はれねばならぬが、それは移動の道筋によつて様々に變化を受けたらしい。初めは土石混用の重疊式住居であつたが、天幕の形式を取つたこともあり、また構架式の木造家居を造つたこともあつた。北方民衆は一般に圓形の家を建て、南方民衆は概して方形の家を建てるが故に、日本の今日の木造家屋は、大方南方、たとへばマライ種族のものであらうなどといふが、それは勿論いくらかの南方系統も入つてゐるようが、北方とても圓形から、六角形になり、更に四角形になつたといふ例もある。シベリヤに見られる校倉式——木材を横に積み重ねてゆく形式の家屋は、朝鮮半島でも一時行はれたことがあつた。それが我邦で曾て行はれてゐたことは、正倉

アバイとユルタ

藝術から観られる生活理想

摸倣力と創造力

院の倉庫などによつて十分に痕づけると出来る。そこで、私は結論として、日本の構架式家屋は、マライ種族のアバイ(Abai——集會所)などから系統を引いたものでなく、シベリヤ種族のユルタ(Yuruta——小舎)から傳統せられたものであるといふことを明示して置きたい。

かうした藝術の發達の徑路から觀られる原日本人の生活理想は、現在を享樂して未來に伸張したいといふ彼岸的のものであつた。過去は回顧しないではないが、未來も豫想しないではないが、それらよりも先づ問題なのは當面の生活をどうして享樂しようかといふのであつた。これが彼等をして現實に即して理想を離れず、理想を追求して現實を忘れしめなかつた理由で、そこに原日本人の實際的な、しかしながら深味の足らない固有性が横はつてゐた。摸倣力には富みながらも、創造力に缺けてゐた彼等が、異種族との文化接觸によつてそれを取り入れ、思ふさま自分達の文化を發展せしめることが出来たのは、全く彼等の持つてゐる適應性の支持によるもので、そこからまた現在主義、享樂主義の彼等の生活理想が湧いて來るのであつた。

(一)『魏志』卷三十、東夷傳。——「其人龐大。性彊勇謹厚。不冠鈔。」  
(二)同上。——「其人性凶急。喜冠鈔。」

(三)同上。——「其人。性强勇。」——「其俗少ニ網紀。國邑雖有ニ主帥。邑落雜居。不能ニ相制御。」

(四)同上。——「人性質直彊勇。」

(五)同上。——「人多ニ勇力。」

(六)同上。——「無ニ門戶之閉。而民不爲盜。……其人性慳慳。少ニ嗜慾。有ニ廉恥。」

(七)同上。——「嫁娶禮俗。男女有別。」

(八)同上。——「其人形皆大。」

(九)同上。——「以ニ瓔珠爲ニ財寶。或以綴衣爲飾。或以懸頸垂耳。不下以ニ金銀錦繡爲珍。」

(一〇)同上。——「其國善養牲。出ニ名馬赤玉貂狛美珠。珠大者如ニ酸棗。」

(一一)同上。——「衣服清潔。長髮。亦作ニ廣幅細布。」

(一二)一七)これらの分類は在來の形式によつたものである、今少しく科學的觀察が必要であると思ふ。

(一八)『古事記』上卷參照。——「科ニ玉祖命令作ニ八尺之勾五穗百津之所須麻流之珠。……」

(一九)故坪井博士『人類學叢話』一〇二—一〇四頁參照。

(一〇) Berthold Laufer: "Notes on Turquois in the East," p. 15.

(一一)『西域記』參照。

(一二)『古事記』上卷。——「即其御頸珠之玉緒母由良遵。取由良迦志而。賜ニ天照大御神。」

# 欠

# 欠

鮮、滿洲、シベリヤの土器に發見せられ、また歐羅巴のケルトの遺跡からも發見せられる。

(四〇)山型文様は、新石器時代また青銅器時代の世界的流行文様で、漢鏡、銅鐸を始め、北方民衆の土器に多く彫刻せられてゐる。ケルトの青銅器時代に於いては、此文様が非常な流行を見た。J. Romilly Allen: "Celtic Art in Pagan and Christian Times," pp. 27—35. 参照。

(四一)尾張熱田發見の彌生式土器には皆圓い孔が明いてゐる。

(四二) George Winter Mitchell: "Anthropology, Up-to-Date," pp. 64, 65.

(四三)一例すれば同心圓の如き、菱形文様又は山型文様の如き、いづれも的確には何を表現したか分らない。

(四四)慶州發見、新羅時代の屋瓦には、野菊の葉と花とを描いたものがあつて、美術家の自然を愛し、自由を愛した心持がよく現はされてゐる。

(四五)平壤發見、高句麗時代の屋瓦には、蛙が匍つてゐる様を描いたものがある。

(四六)『魏志』卷三十、東夷傳、挹婁の條及び沃沮の條參照。馬韓の條には次ぎの記載がある。——「居處作草屋土室。形如家。其戶在上。舉豕共在中。」

(四七)ツングース語 Chum は天幕の意、今日でも尙白樺の皮を張つたテントが用ひられてゐる。

(四八)工學博士佐藤功一氏の早稻田大學史學會に於ける『柱と壁と天井と』と題する講演に據る。

(四九) "The Races of Man," pp. 164, 165.

(五〇) 同上, p. 166, Fig. 45. アルタイ人の六角形家屋参照。

(五一) 滿洲、朝鮮及び日本の家屋は、殆ど全部長方形である。

(五二) 『魏略』辰韓の條。——「其國作<sup>ル</sup>屋。横<sup>ニ</sup>累<sup>テ</sup>木<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>之。有<sup>リ</sup>似<sup>ニ</sup>牢<sup>獄</sup>。」

### 第六節 精靈と靈魂と神と

どんな自然民衆もマジックと宗教とを持たぬものがないやうに、原日本人の間にも矢張り宗教は存在した。否、他の民衆よりも遙かに密度に於いて濃厚な宗教民衆で彼等があつたやうに私の眼には映ずる。原日本人の持つてゐた宗教がどんな形式であつたかを、今日から推論することは困難であるけれど、そこにマジックと宗教との混淆のあつたことは事實で、或學者がいふやうに、マジックから宗教が進化したものであるとは云へない状態にあつた。

移住前に於けるツングース族の宗教思想は知ることが出来るとしても、それは原日本人のそれを知るのにさほどの必要條件ではない。彼等は群島に來る以前に、既に單純なマジックの域を離れて、タブー(Taboo)に重點を置くやうなことはなかつた。彼

原日本人の  
宗教思想

移住以前の  
ツングース  
タブー

マジック

注連繩と四  
手

シャマニズ  
ム

心理的説明

等は勿論あらゆる神聖物に禁忌タブーを設けて、それを恐れ、敬ひ、憚つたけれども、それだけが彼等の宗教全體ではなかつた。彼等の思想にはマジックらしい分子が甚だ多く加はつてゐた、けれども、勿論それが彼等の宗教を蔽うてゐた譯ではなかつた。私達の間に於いてすら、今日尙ほ、或場所に注連繩しづななはの張つてあるのを見るが、あれはタブーの痕跡でなくて何であらう。神道の祭官が四手しでをつけた榊の枝を左右に振つて咒文を唱へるのは、それがマジックの殘片でなくて何であらう。私は今さうした議論をして、私達の祖先である原日本人の宗教觀念を窺ひたくはない。私はたゞ彼等の宗教的行動を描寫すればよいのであつた。けれども、さうした材料は容易に得難く、得られたとしてもそれを秩序的に配列し、それによつて彼等の宗教思想を表現することはたやすい業ではない。

原始神道として在來の學者ウチノの説いたところは、實は餘程進化した後のものであつて、自然民衆であつた時代の彼等の宗教とは、大きな間隔があるやうである。私の考へによると、原日本人は今日シベリヤの各種族が信じてゐるシャマニズム(Shamanism)の状態にあつたやうである。心理的に觀れば、タブーとマジックとを結びつけてゐるところの前アニミズム(Pre-Animism)と、すべての物に精靈の存在を認めるところのアニ

ニミズム(Animism)と、それら二つの概念から構成せられた magico-religious <sup>マジック</sup> な自然教であつた。彼等のさうした宗教を知らうと思はゞ、先づ第一にシャマニズムがどんなものであるかを知つて置く必要がある。

シャマニズムに就いての比較研究は、故人になつたツアブリカ嬢の記述を典據とせねばなるまい。彼女に従へば、シャマニズムについての學者の見解は一致してゐない。ミハイロウスキイ、<sup>(三)</sup>ハルチンなど、ロシアの學者の間では、シャマニズムを北アジアの原住民、並びに新世界の原住民の間に行はれてゐる宗教、或は宗教的マジックの原始形式と考へるが、他の學者はそれを悪靈を祓ふところの北アジアの宗教的儀式の表現だと考へてゐる。たとへばヨヘルソン(Jochelson)やボゴラス(Bogoras)などは後者である。尙一つ、十分考量を要する異説が、クレメンツ(Klementz)によつて提唱された。彼れは云つた。「シベリヤの各種族が懐いてゐる様々の信仰は、互にそれ／＼密接な關係を有つてゐる。従つて彼等の神話の基礎に於いても、また其祭式に於いても、名稱の如きに於いてすらも、引離すことの出来ない一致が発見せられる。——かうした事は、彼等の信仰が、北アジア全體の知力的活動の連鎖的に働いた結果出來たものであることを人々に考へしめる」と。<sup>(四)</sup>

ツアブリカ嬢の研究  
分布についての見解

クレメンツの考へ

パンザロフの考へ

黒教と黄教

シャマニズムと他の宗教との交渉

ブリヤートの學者に、パンザロフ(Banzaroff)といふ人があつて、其人の著述の中に極めて簡単な記述が載つてゐる。「蒙古人と其近周民族との舊い宗教は、歐羅巴に於いて、シャマニズムとして知られてゐる」。——これによつて觀ると、土人の間にはこれについての特殊の名稱がないやうである。彼れは更に説いていふ、「——佛教輸入の後、蒙古種の民族は、其舊宗教を『黒教』(Khara Shadin)と呼び、佛教を『黄教』(Shira Shadin)と呼んで、それらの混同するのを避けた。教父ヤキウヅ(Jakivv)の言に従へば、支那人はすべてシャマニズムを跳躑(Tao-Shen)と呼ぶさうである。けれども、これらの名稱はシャマニズムの眞の性質については何等の觀念をも興へない。或人々は、之を婆羅門教や佛教に基づいたものであると考へ、他の人々は支那の老子の教義の中から其要素を求めようとする。果ては、シャマニズムは只だ自然崇拜に過ぎないものであつて、ペルシャのゾロアスター教(Zoroaster)に似てゐるとさへ唱へるものがある。しかし、注意深い研究をして見ると、シャマニズムは佛教其他どんな宗教から起つたものでもなく、全く蒙古種族の間で創められたものである。それは單に迷信やシャマンの儀式から成り立つてゐるのみでなく、外界——即ち自然——及び内界——即ち靈魂——を觀察する一種の原始的方法である」と。勿論、パンザロフは、特

に蒙古人のシャマニズムに就いて述べたのであるが、私達はシャマニズムが是等の民族に限られてゐると思はない。私達はそれが北アジア及び中央アジア一帯に分布してゐることを發見する。

新舊シベリヤ族の宗教

私達の見る所では、舊シベリヤ族は最も簡単なシャマニズムを有し、新シベリヤ族は最も複雑なそれを持つてゐる。前者の間には職業的なシャマニズムよりは、家族的なシャマニズムが多い。それは儀式、信仰、シャマンが、家族の範圍に限られてゐるからである。職業的シャマニズムは、基督教の感化を受けて起つたもので、今尙搖籃の中にあつて十分發達して居ないが、それでも尙ほ特殊の、職業的なシャマンが、或團體の儀式を行ふことはある。

職業的シャマン

然るに新シベリヤ族の間では、職業的シャマンが非常に發達し、ヤクトに於いて特に著るしい。家族的シャマニズムも、矢張り歐羅巴の影響を受けてゐるが、しかし私達は、此點から舊シベリヤ族のシャマニズムが原始形であると考へてはならない。職業

家族的シャマン

的シャマニズムは、家族的シャマニズムの發達したものと見るべく、或はまた墮落したものと見る事が出来る。いづれにしても、今日では團體生活が最早不可能な状態に入り、シャマニズムは在來の面目を保つことが出来なくなつてゐる。

新舊の差は地理的原因

舊シベリヤ族と、新シベリヤ族とのシャマニズムの差は、疑ひもなく北シベリヤと南シベリヤとの地理的條件の差に基づいてゐる。其事は北に移住した新シベリヤ族(ヤクト)と、南に移住した舊シベリヤ族(ギリヤーク)とを研究して觀れば直ぐに證明せられるのである。彼等が新環境に影響せられて、それに適應する習慣と信仰とを容易に馴致したことは、彼等のシャマニズムが根本的に異つてゐたものでないことを示すものである。差異は環境から生じた。それ故に移住すればそれは直ぐ消滅する。これらの變化が、接觸に基づいたものであることに疑ひはない。シャマニズムは、實に大陸の氣候が産んだ自然の産物である。大陸の氣候は冷熱の兩極端を示し、烈しき吹雪(ブルガス)と嵐(burans)とがあつて、長い冬季の間には飢と恐れとが續いて、單に舊シベリヤ族のみならず、遙かに高い教養を有つてゐる新シベリヤ族も、歐羅巴人でさへも、時としてはシャマニズムの迷信に陥らざるを得ない。さうした状態は、シベリヤに住んでゐるロシアの農民、官吏、及びシベリヤ生れのロシア種の人々の間に屢々見られるところであつた。

固有宗教の固執

舊ロシア政府の調査の結果によれば、小部分の原住民のみが、眞正のシャマニストとなつてゐるが、たとへ奥尔ソドックス・カトリック教徒、或は佛教徒と登録せられて

果してアニミズムか

るても、事實上、彼等が殆どすべて固有宗教の信者であることは確實である。理解を早からしめる爲めに心理的解釋を下して見ると、シャマニズムは、アニミズムと、前アニミズムと、二つの概念から組み立てられてゐると云へる。シベリヤでシャマニズムの調査に従事した人は、皆タイラア(Tyrol)のアニミズム説に影響せられて、「靈魂」などいふ語を濫用してゐるけれども、それらの人々がアニミスチックだといつてゐる現象は、實は全く異つた範圍のものであることを屢々發見する。

シベリヤ特殊の發達

「シャマニズムがシベリヤに特有の儀式であるか、或は一般的な、原始的のマジック式宗教であるかは、それを考へる人々の個々の判断に任さなければならぬ。基督教について試みられるやうな、一般的な原始宗教の科語を以て之を説明することは困難である。事に依るとシャマニズムの神や人や自然についての概念も、又其儀式も、アニミズムの中で類のない、一種特別の流派であるかも知れない」と、ツアブリカ嬢は述べてゐる。そこにシャマニズムの眞正の特徴と、それから分岐した日本神道の原始形式——即ち原日本人の宗教とが横はつてゐるのである。

獨立起原説の危殆

しかし、獨立起原説は、一應は尤もらしく見えるけれども、私達、文化接觸を信ずるものに在つては、それはそれを信ずる人々が私達を危險視するやうに、私達はそれ

文化接觸と諸要素の混和

を危險視しなくてはならない。私はツアブリカ嬢のやうに、シャマニズムをシベリヤ特有のものであるとは信じない。エジプトや、ギリシャや、ベルシャや、支那や、印度や、諸民族の宗教要素が間接或は直接の接觸によつて輸入せられ、それの上に加はつてゐると私には思はれる。シャマニズムは所詮「生氣教」を離れることの出来ないものであつた。多少の形式の差異があるとしても、シベリヤ族のシャマニズムは皆精靈を信ずるものであるから、其一分派たる南ツングース族に属する原日本人の宗教もまたそれから脱することは出来なかつた。

精靈の信仰  
パナとマナ

原日本人は精靈を信じてゐた。精靈と靈魂との間には殆ど距離が認められなかつた。それはオロッコ人の「パナ」(Pana)や、メラネジャ人の「マナ」(Mana)と同じもので、彼等はそれをタマと呼び、神聖な事柄に絡まつてゐる神祕的威力に對する一般稱呼であつた。それを認めることなしに、彼等は自然と人生との諸現象を説明することが出来なかつた。彼等の神話も、宗教も、皆此タマを基礎として組み立てられたものであつた。

生氣主義

不思議な形の岩石、醜い姿の動物、屍體、奔流する河水、洶湧する波濤、威力のある酋長、神通力を有つた巫女、どんな自然の顯現も、人類の行動も、それらが格別で



草木、鳥類、  
風

ある以上は、それらにタマが宿つてゐると信じられたのであつた。そこから祭式が湧き、禁忌が生まれた。自然崇拜も、人間崇拜も、かうして起つたのであつた。彼等の目には生物と非生物と、有機物と無機物との限界がなかつた。すべての物は皆生きてゐた、生命の息を呼吸してゐた。草木も皆ものを言つた。鳥類も皆人類と同様の感情と理解とを持つてゐた。風さへも人類と共同的に働いた。それらから觀ても、原日本人が如何に盛んな生氣主義者であつたか推想せられる。

自然崇拜

彼等の自然崇拜は一時極度に達し、どんなものをも崇拜せずには置かなかつたらしい。自然崇拜はそれを天體崇拜、植物崇拜、動物崇拜などに分けることが出来るけれども、所詮はそれらの威力と生氣とに對する信仰が産んだところの結果であつて、いづれにも共通した習慣やら祭儀やらが伴はれてゐた。

天體崇拜

原日本人の崇拜した自然の中では、天體が最も顯著なものであつた。天體崇拜は新石器時代に於ける世界的流行といつてもよいほど、汎く東半球に分布してゐた宗教的信仰で、原日本人も矢張りそれに影響せられてゐたやうに思はれる。彼等が尙ほ故郷に在つた時、彼等の同族と接壤してゐた匈奴は太陽、太陰、星辰を禮拜し、月の盈虧によつて吉凶を卜したほどの民衆であつたが故に、突厥族がそれに影響せられた如く、

匈奴の日月  
崇拜

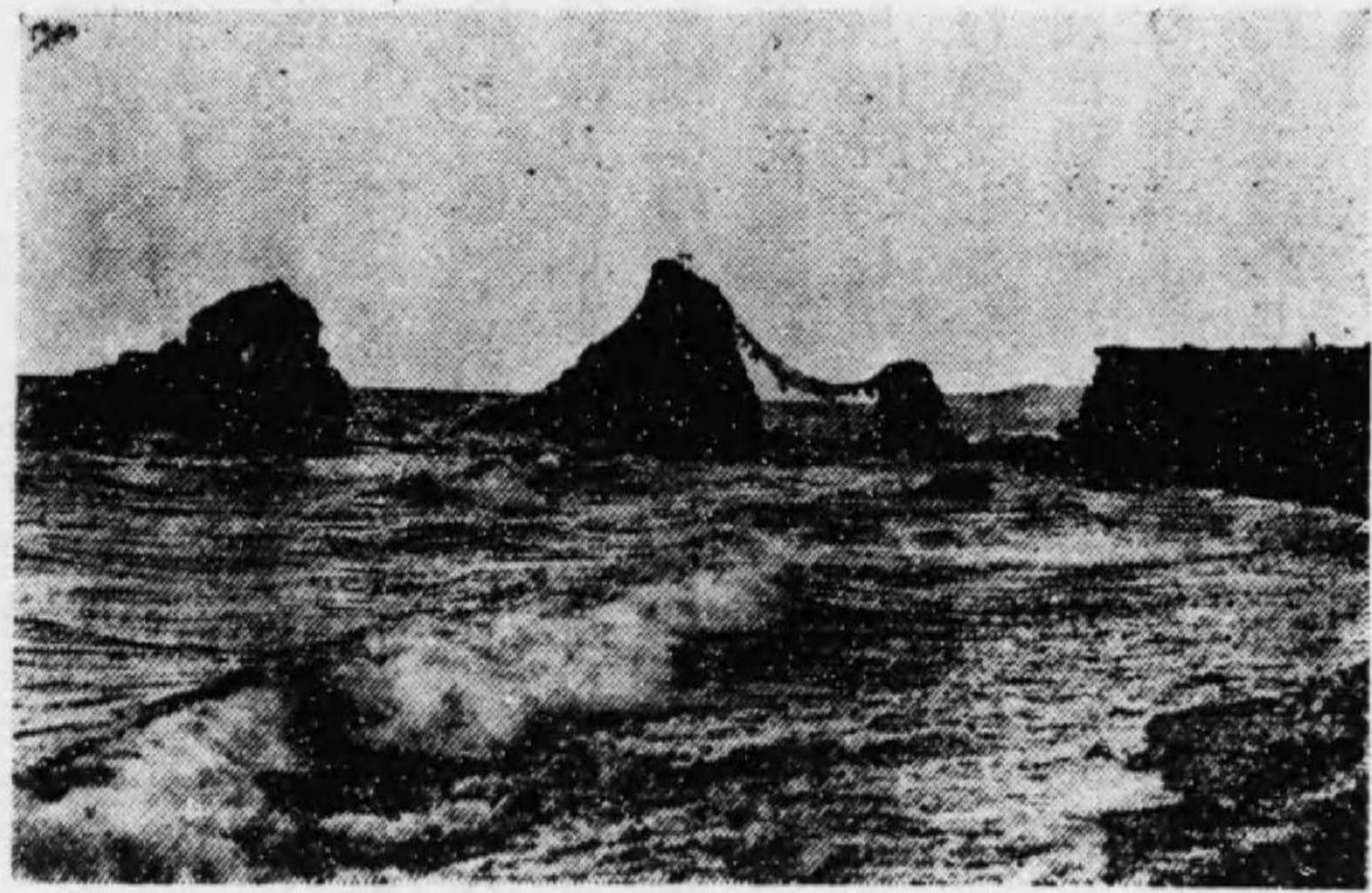
光體の性

日本神話の  
特徴

ツングース族もまたそれから感化せられることを免れなかつたであらう。日本神話に於いては、これらの光體は神話化せられて、太陽はオホヒルメムチと一致し、太陰はツクヨミと一致し、星辰はツツノヲと一致してゐる。しかし、原日本人では、太陽が女性、太陰と星辰とが男性で、他の民衆が殆どすべて太陽を男性、太陰を女性としてゐるのとは異つてゐる。此事は日本神話の特徴で、同時に原日本人の宗教思想と社會組織との他から異つてゐたことを窺はしめる證據となつた。私の考へでは、かうした差異は、原日本人の間には、尙ほ母系傳承、婦人家長制度の痕跡が残つて居り、婦人が男性に超えた社會的地位を持つてゐた爲めに起つた現象である。太陽崇拜に伴ふ祭式は、土俗學的に觀れば大分痕跡が残つてゐるけれども、考古學的にそれを證據立てることは困かしい。たゞ伊勢の二見浦に於ける夫婦岩は、忘れられた遠い昔から朝日を拜む場所となつてゐて、夏至に太陽が其岩の間から昇るといふ風に信じられてゐる。これは朝鮮南部で見られる堂山と同じ性質のものであり、また英國キルトシヤ(Wiltshire)の「フライヤの踵」(“Friar's Heel”)と呼ばれてゐる樹石の上に朝日の昇るのを眺めて禮拜したのとよく似てゐる。今日では消えてゐるけれども、かうしたドルイド教(Druidism)らしい祭式が昔我國に行はれてゐたことに疑ひはない。

二見の夫婦  
岩

朝鮮の堂山



二見浦の立石

スコットランドのアバチンミア(Aberdeen-shire)で発見せられたロジイメイ<sup>(一四)</sup>(Rothiemay)の巨石建造物の横石や、スカンヂナヴィヤのダルビー<sup>(一五)</sup>(Dalby)で発見せられたそれには、北天の星座を刻んだものがあつて、新石器時代の終末に於ける古代人の星辰崇拜を立證してゐるが、かうした習慣を原日本人は受納したやうなことはなかつたか。一般には北辰崇拜は道教の影響によると考へられてゐるが、既にウハツツノヲ、ナカツツノヲ、ソコツツノヲの三神<sup>(一七)</sup>が星と一致し、それらが航海神として崇拜せられてゐたとや、悪神ながらもアマツミカボシが星と一致する神であることを想へば、星辰崇拜は新らしく支那民衆から影響せられ

たものでなくて、原日本人が移住前から既に有つてゐた信仰と見て差支へない。それを彼等は巨石の建築法と同時に、ケルト(Celt)或はスキタイ人(Sythian)から輸入したと見られぬことはない。

樹木崇拜も可也に盛んであつた。神話に現はれて來るククノチ<sup>(一六)</sup>は木の祖先であり、カヤノヒメ<sup>(一七)</sup>は草の祖先で、いづれも草木の精靈を崇拜したものである。どこの神社にも鬱蒼たる森があるが、あれは樹木崇拜の痕跡ではあるまいか。國語「神奈備」は神木を意味するもので、ナビは「木」を意味する鮮語「nam」と同意である<sup>(一八)</sup>。朝鮮南部では、神聖な場所には、たとへ他の場所はどんなに禿けてゐても、そこだけは草木を刈らず、こんもりと繁つた森林が残されてゐる。木を伐る時に其精靈を祭つたりしたのは、原日本人の樹木崇拜が、樹其物を崇拜したのでなくて、樹に宿つてゐる精靈を崇拜したものであることが知られる<sup>(一九)</sup>。かうした精靈は、次第に動物形態的(Zoomorphic)となり、人類形態的(Anthromorphic)となつて、遂に後日の「主」といふ觀念を形造つた。ヌシの觀念は、しかし、可也古くからあつたもので、如何にもギリヤーク(Gilyak)のそれによく似てゐる。ギリヤークは木を伐る場合には、ヌシを傷けない爲めに一種の幣(Chekhun-kun-inan)を立てる。と、ヌシは其幣に乗り移つて、木が伐られても

山神バルと  
海神トル  
アイヌの木  
靈信仰

彼れは其生命を保つことが出来ると思つてゐる。ギリヤークの考へによれば、一般に眼に見えるものは、それが真正の實在であるのではなくて、其中に宿つてゐる人類形態を具へた精靈の假面であるに過ぎない。だから、彼等に在つては、山や海は假象であつて、實はそれらに被覆されてゐる「山の主」(Pal)や「海の主」(Tol)が實であるのである。(二五)此バルは原日本人のヤマツミに、トルはワタツミに當つてゐる。アイヌも木を伐る時には、日本人と同じやうな儀式をする。彼等が舟を造る場合には、山に入つて山の神にイナオを捧げ、さて舟にすべき良材を探して、それが見附かると其前にイナオを捧げて地の神を祭る。其祭詞は“Shiri-koro-kamui, tan chiku-ni kore”といふので、譯すれば「地の神よ、此木を賜はれ」といふほどの意である。此祭りは我邦の平安時代に行はれた木靈竝山神祭と同一形式のもので、舊シベリヤ族も、新シベリヤ族も、ヌシの觀念、精靈の觀念、竝びにそれらの祭儀に於いて格別の差異のないことを示してゐる。

岩石崇拜  
白玉、赤玉

岩石崇拜もまた盛んに行はれた。圓い石、平たい石、動物の形を具へた岩などは、どんなに原日本人の眼に不思議に映じ、それを崇拜畏怖せしめたであらう。圓い白色の石、赤色の石は、それが卵に似てゐるところから村落の守り神となつたことがあつ

蛙石

た。平たい石は酋長の座席に充てられたりした。蛙の形をした石は蛙石として崇められ、陰莖の形をした石は「石の神」「塞の神」などとして祭られた。これらは皆石に神秘性があると考へられた結果、起つた宗教的現象であつた。

咒物崇拜

咒物崇拜もかうして起つた。玉類の崇拜の如きは其一例で、潮溢瓊、潮涸瓊、死反玉などは、結局、玉それ自身か、或は其中に宿つてゐる精靈の力が、不思議の作用をすると思つてゐたものである。

火及び火山  
崇拜

火と火山との崇拜は、太陽の崇拜と一致するもので、原日本人の間ではそれが大分混同せられてゐた。純粹の火の神としてはカグツチが認められてゐるけれども、其外にも火を名に負うた様々の神が神話に現はれて来る。日向民衆の間では、彼等が阿蘇、高千穂、霧島などの火山群に圍まれて生活したが故に、特に火山崇拜の考へが湧いたに相違なかつた。

日向民衆と  
火山

善惡兩様の  
精靈

かうした精靈は善惡の二側に分れ、前者は人類を守護、扶助するのに、後者はそれを呪咀、迫害すると思はれてゐた。原日本人は善き精靈を「白」で象徴し、悪い精靈を「黒」で代表させ、常に黒白を對照せしめてゐた。たとへばオホヒルメは白く、スサノヲは黒く、白馬山に對しては黒姫山が配せられ(越後)、白馬嶽に對しては黒姫山(信

黒と白

悪靈に對する恐怖

濃)が配せられるといふ風であつた。  
原日本人——幸福と歡悅とを追求して厭くことを知らなかつた原日本人にまで、最も恐ろしく忌はしき敵は、疾病と災禍と死とを司る悪靈であつた、これらを祓ふといふことが、それ故に、原始神道の祭儀の中核であつた。異常の優れた精靈を持つてゐるものは、其力によつてこれらの悪靈を追放することが出来ると信じ、其結果、原日本人はマジックを行つたのであつた。マジックは所詮、恐怖から湧いた幻影を滅却する呪術に過ぎないのであつた。

宗教學者の原始神道觀

多靈教から多神教へ

かうした範疇の不明瞭な、漫然たる輪郭を有つたものが原日本人の宗教思想であつた。それはすべて具體的で、後世の神話に現はれるやうな抽象的な「力」に對する信仰は認められない。しかし、さうした間にも、自然宗教から次第に文化宗教へ進んでゆく道程を形造りつゝ、あつたことは事實であつた。我邦の宗教學者はそれらの日に於ける原日本人の思想界を批評して云つた。——「當時の日本人の思想界は、所謂『生氣主義』(Animism)、若しくは精靈信仰の盛んであつた時代である」とが分る。即ち多靈教(Polydemonism)期の宗教思想が、これによく現はれて居る。これ世に八百萬神、實は八百萬の精靈(Miriads of spirits)が存して居つた所以である。これ即ち宗教學上の精靈

崇拜(Spiritism)である。記紀の神話は此劣等自然教期の舞臺の上に、更に高等自然教期の神話を有する神祇が次第に勢力を得て來て、活動し始めた時代を表はすので、ここに多靈教が多神教(Polytheism)に變つて來たのである」と。私は結語として私の云はうとしたことを、此引用文に代表させることにする。

(一)神道に關する著述として纏つてゐるのは、津田敬武氏『神道起原論』、文學博士加藤玄智氏『神道の宗教學的新研究』などで、法學博士寛克彦氏『古神道大義』及び『續古神道大義』は大分近世的要素が多量に加はつて居り、原始神道を距ることの甚だ遠いものである。外人の著述としては、何と云つても W. G. Aston: "Shinto, the Way of the Gods" が一番纏まつてゐる。

- (一) Mikhailowski: "Шаманство."
- (二) Karuzin: "О Нойдахъ у Древнихъ и современныхихъ гопарей."
- (三) Encyclopaedia, Rel. and Eth., "The Burials," p. 26.
- (四) "The Black Faith," pp. 4-5.
- (五) Bo oras: "The Chukchae," p. 417.
- (六) Czaplicka: "Aboriginal Siberia," p. 168.
- (七)『日本書紀』卷二。——「復有草木成能言語」
- (八)『日本書紀』卷二。——「乃遣疾風舉戸致天。便造喪屋而殯之。即以川鷹爲持傾頭者」
- (九・一〇)同上。——「乃遣疾風舉戸致天。便造喪屋而殯之。即以川鷹爲持傾頭者」

及持箒者。又以雀爲春女。而八日八夜。啼哭悲歌。

(一〇)『史記列傳』匈奴傳第五十。——「單于朝出營。拜日之始生。夕拜月。……舉事而信星月。月盛壯則攻戰。月虧則退兵。」

(一一)太陽が女神となつてゐるのは、原日本人と現アイヌとの神話のみで、他の民衆は悉くそれを男神としてゐる。原日本人の間に婦人尊重の習慣が濃厚であつたことが窺はれて面白。

(一二) "Nature," Nov. 21, 1901. 及び Lord Avebury: "Prehistoric Time," pp. 133—135. 参照。サー・ノーマン・ロッキヤア(Sir Norman Lockyer) は天文學的實驗の結果、紀元前一六八年の夏至に於いて、太陽が正しく "Friar's Heel" と呼ばれるメンヒル(Menhir—樹石)の頂上に昇つたといふことを確めた。

(一三) G.F. Browne: "Antiquities in the Neighbourhood of Dunecht," p. 160 et Plate LX.

(一四) Dr. M. Schönfeld: "Prehistoric Astronomy in Scandinavia" (La Nature, 5 Fev. 1921.)

(一五) 文學博士加藤玄智氏『神道の宗教學的研究』一五二頁。

(一六)『古事記』上卷、阿波岐原御禊の條參照。神名ツツについては、色々とい説があるけれども、私は故吉田博士(東伍氏)と共に、ツツを星の意味に取りたい。ツツを星とするこの證據は薄弱であるけれども、「夕づ」といふからが痕跡が残り、ツツノチカ上、中、底の三つに分

けられて居り、しかもそれが住吉三大神として航海者に崇拜せられてゐるところを見ると、これらの神々は夜航に於ける目標であつて、これが所謂「三つ星」、即ちオライオン星座(Orion)のベルト(Belt)であることが知られる。

(一七)『古事記』中卷、仲哀天皇の條參照。

(一八)ケルトの巨石建築物と、スキタイ人のそれとは似て居り、スキタイ人の穹廬と匈奴のそれとが相近似して居り、そして原日本人にはそれらの二つが痕跡を止めてゐる故に、かう私は大胆に言ふのである。尙詳しくは後章に述べることにしよう。

(一九)『古事記』上卷。——「次生木神名久久能智神。ツクはクキ(莖)と同源で、語原は *kuk* であり、これに母音語尾をつけて、*kuka* としたものである。

(二〇)同上。——「次生野神名鹿屋野比賣神。カヤは今日「萱」と書き、またカルカヤ(刈萱)などいふ名詞もある。「草」を意味する鮮語 *kai* が、語尾變化をして *kala* となり、*kaya* と變つたのであらう。地名「伽羅」が「伽耶」と變つた例もある。

(二一)文學博士金澤庄三郎氏『言語の研究と古代の文化』一三六—一三八頁。

(二二)『日本書紀』卷二十二、雄古天皇二十六年の條、及び『延喜式』卷三、神祇三、臨時祭の條參照。

(二三) "Aboriginal Siberia," p. 271.

(二四) Sternberg: "The Gilyak," p. 42.

(二五)『古事記』中卷、應神天皇の條、及び『日本書紀』卷六、垂仁天皇二年の條參照。

(二七)三重縣宇治山田市外、勢田川の岸に昔から「蚌石」として崇められてゐる巨石がある。  
(二八)註(一六)同書、一六四頁参照。

第七節 未來觀と死體埋葬

日本群島に移住の後、原日本人は、約一千年間に亘つて、多靈教的信仰<sup>ポリデモニック</sup>を變へることなしに其心的生活を生活してゐた。多分、彼等の間にはトーテム信仰<sup>(二)</sup>の行はれたことがあつたらう。ひとしく南ツングース族に原日本人は屬してゐながら、彼等の間にはいくつも部族があつて、少くとも古志、出雲、日向の三つぐらゐには分れてゐたらうことは、既に前節<sup>(三)</sup>に於いて述べて置いた。それらの中、古志部族の間には蛇<sup>(四)</sup>が、出雲部族の間には、鱧<sup>(四)</sup>と白兔<sup>(五)</sup>とがトーテムであつた氏族があり、日向部族の間には太陽<sup>(六)</sup>、或は火<sup>(七)</sup>がトーテムである氏族があつたに相違ない。さうしたトーテムは、それらを信じ、敬ひ、尊び、畏れ、それらに對してタブーを實行してゐる族人を擁護する氏神となつてゐたらうが、一方に守護神があれば他方に禍害を加へる惡神のあるのが常で、彼等はいづれも自分達の近傍を彷彿する惡靈によつて取り圍まれてゐると信じ、心が一たびそれに向ふと、戦々兢兢々として暫らくの間は安らかな心持になることが出来なかつた。

多靈教的信仰の持續

三部族と其トーテム

蛇  
鱧と白兔  
太陽と火

惡靈に對する恐怖

死靈

巨石埋葬

出雲部族と古志部族との文化の差異

山には山の、河には河の、森には森の、谷には谷の、海には海の、それ／＼異つた惡靈が宿つてゐて、機會があつたら人間に憑<sup>もち</sup>かうと企て、ゐると彼等は考へた。それらの惡靈は「病」と「死」とを以て彼等を脅かし、生の無限の要求に向つて忍苦勤勉の生活を送つてゐる彼等を戦慄せしめた。さうした恐怖の中の恐怖——彼等をして膽を消さしめたところの恐怖は、「死」、即ち「死靈」であつた。死靈は死人の肉體について居り、又死んだ場所に残つてゐて、いつでもそこを離れて出動して、生者、殊に遺族に取りつくことが出来ると彼等は確信してゐた。彼等は、それ故に、人が死ねば其家を捨てた。歴代の遷都も一つは之に原由してゐたと思はれる。此死靈を防ぎ得る偉大な力は、不思議な精靈の宿つてゐる岩石に若くものはないと彼等は考へ、さてこそ巨石埋葬が行はれたのであつた。私達日本人の間に残つてゐる古墳は、多くは死靈の脱出を防ぐ爲めに營爲されたものであつた。イザナミの冥府神話に現はれて來る千引<sup>(八)</sup>岩は、後世の「塞神」<sup>(九)</sup>信仰の基礎をなしたもので、其原型は死靈の脱出を防止するといふ目的を持つてゐたのであつた。此信仰は主として出雲部族の間に盛んであつたらしい古志部族は人口も少く、且つ其移住が早かつたが故に、すべての點に於いて、出雲

部族ほど進んだ文化を有つてゐなかつたと思はれる。これが彼等の間に巨石埋葬の遺物を發見することの出来ない所以である。

死靈脱出の防止が死體埋葬の第一段階であるとすれば、そこにそれに次いで起つた第二段階があらねばならなかつた。それは死靈の恐怖が淡らいで、祖先の死靈を尊崇するやうな日でなければ見ることの出来ない死體保護の意圖であつた。死體保護の意圖は、死靈脱出の防止から進化して來た觀念である故に、全く獨立して存在することが出來ず、長い年月に向つてそれは兩々相竝んで存在し、今日の此電氣時代に於いてすらも、尙ほ兩者は共存してゐるほどである。此二つの意圖の混和は、ツングース族が大陸にゐた時、既に起つてゐた現象であるやうには私には見える。

原日本人の死體埋葬は、考古學的にこれを研究すると、決して一通りや二通りではなかつたが、一番多い様式は、地平線上に、或はいくらか地を掘り下けて死體を置いて、其周圍に巨石を疊み、更に其上を封じたものであつたらしい。時には礫で死體を埋めて、其上に土を盛つたこともあつた。場所によつては粘土を塗つたり、石を葺いたりして、死體を埋葬したこともあつた。また單に山腹の横穴に死體を收斂しただけのこともあつた。石棺の使用は、それ自體の性質上、石室よりも後でなければならぬ

埋葬の第一段階

埋葬の第二段階

埋葬の種類

石室古墳

石積塚

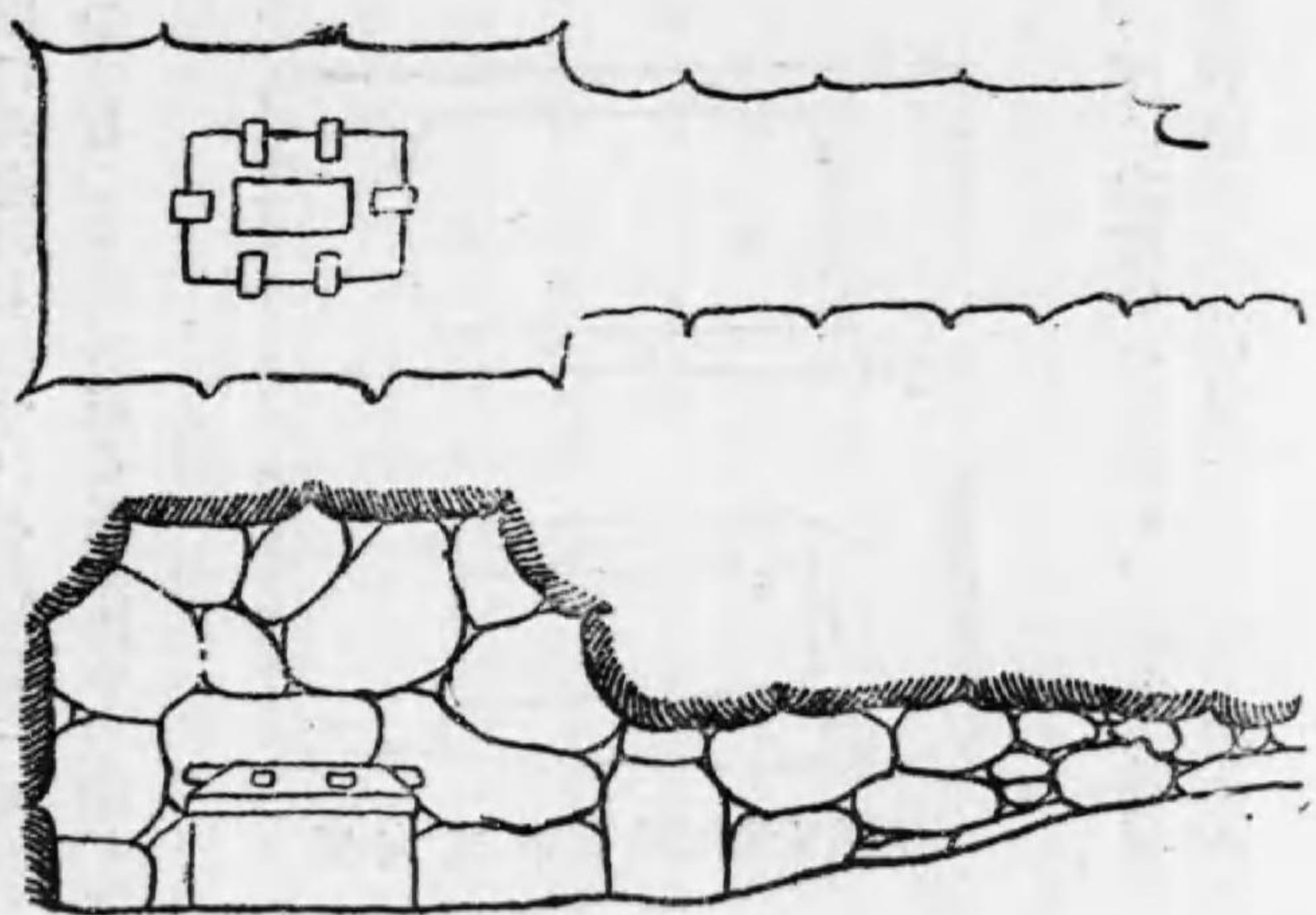
葦石塚

横穴

石棺

屈葬法

殉死と副葬品

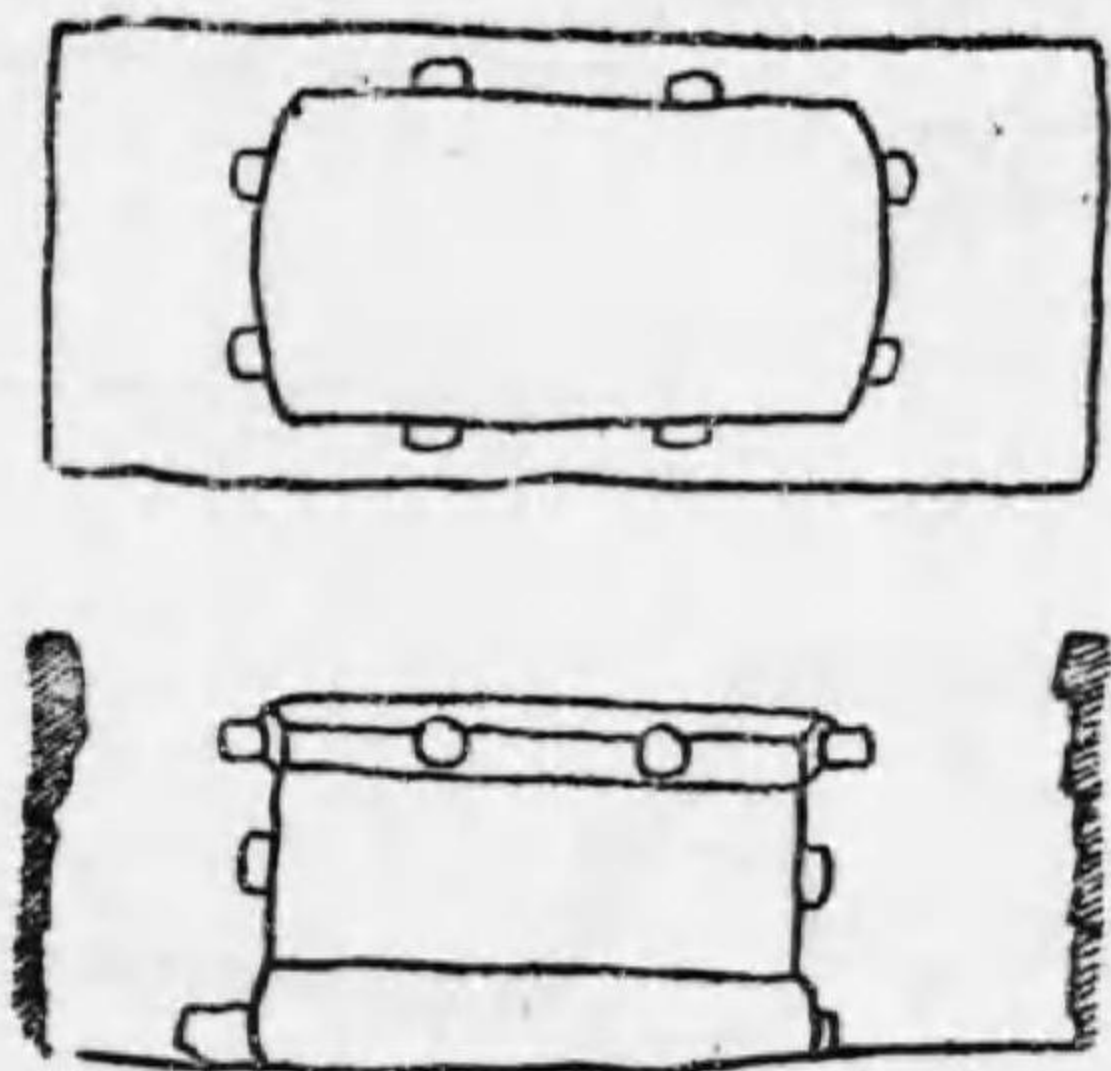


(墳古阪赤和大室石式穴横)

故に、ずつと後期に起つたことであらう。死體は多く屈葬法を用ひ、臂、或は膝、或は其兩者を折つて置く風があつた。かうした方式が、死靈脱出の防止を目的としたところに關係してゐることは論ずるまでもない。酋長など社會に勢力のあるもの、死んだ場合には、彼れの屍は多くの殉死者によつて取り圍まれた。妻妾は勿論侍者もまたそこに葬られた。彼れの平生乗用し、或は愛撫した馬匹も、同じ石室の中に葬られた。日用の器具は勿論、弓矢、刀劍などの武器、また裝飾品も副葬せられた。かうした殉死の風習は、北東アジア族の

間に共通のもので、それは更に西方に延長されて、トルコ族、フィン族なども結びつけることの出来る埋葬法で、殆ど世界的流行とも見るべきものであつた。

試みに大陸に残留したツングース族の死體埋葬法を記述して、それを原日本人のそれと比較して見よう。シャシュコフ(Shashkov)の研究に據ると、ツングース種族の埋葬法は、餘程注意に値する。即ち、死骸を馴鹿の皮に裹んで、それを縫ひ合はした上、死者の日頃用ひた武器や食器と共に木の上に懸けて置く。しかし食器の底には、豫じめ突き破つて孔を明けて置く。然るに他の學者の記述に據ると、死骸は馴鹿の革(nic)に納れられ、縫ひ合はした後、生前の所持品と一所に木棺の中に納め、武器と食器だけは近所の木の枝へ懸けて置き、木棺は森中の高い棒の上に安置せられる。葬式の行はれる間に、一頭の馴鹿と犬とが殺される。馴鹿の肉は食べられ、骨は犬と共に近所の木枝又は棒に結び附けられる。儀式中は寡婦



(墳古堂津内河)室石式穴豎

シャシュコフの研究

ツングースの埋葬法

原始林は死人の宿

バイカルの牧畜民衆

西部ツングース

オルチの冥府

は黙つてゐるけれど、式が済むと木を抱いて大聲に泣き叫ぶ。——かうした古めかしい葬式は、原始林の中で死んだ人々の爲めに執り行はれる。タイガは大抵の人の死場所である。

然るにバイカル州の牧畜民衆は、死者を地中に埋めることにしてゐる。モルドキノフの記述に従へば、葬式から人々が歸つて來ると、近親者は雪中に残つて道を掻き消し、或は木を伐り倒して路上に横へて、死者の歸つて來るのを防がうとする。江戸時代の末に東シベリヤを調査したマーク(三三)は、キルイ郡の西部に於けるツングース族の墓場について次の如く記してゐる。「死骸は北東枕にして棺に入れられる。棺は四枚の板で造り、高さ八尺ばかりの二本の樹幹の上に据ゑられる。死骸の右側にはバルマといふ木の柄のついた小刀と、六本の矢を納れた箆とを置き、左側には一本の弓を置く。また膝の傍には銅或はマムモスの骨で造つて矢を入れた小箱を置き、足の傍には銅鍋の底を抜いて置き、其中へは馴鹿の胃袋に其肉を詰めたものを入れる。かうした場合、容器の底はすべて抜かれるが、其理由は精確には知られなかつた。此墓場から少し離れた處に地域を定め、そこで犠牲の馴鹿の皮が曝される。」

ツングースと同一種族のオルチ族は、すべての死人は皆ブン(Bun)——冥府——に



オロチ

行く、と信じてゐる。ブンはギリヤークのムリ・ウオ(Murivoo)とは異つて、大地の中心にあるのではないが、熱心な研究家シュレンクさへも、其在家についての確實な知識を得ることが出来なかつた。けれども、オルチは、現在と全く同様の方法で、未來の生活が營まれることを信じてゐる。彼等の考へでは、來世の夏は現世の冬、現世の夏は來世の冬で、そこへは餘程すぐれたシャマンでなければ、活きながら行くことが出来ない、オロチもオルチと等しくツングースと同一人種であるが、彼等は死者を小屋の中に入れる、其小屋はギリヤーク人のラップ——死人を入れる小屋——よりも少し大きい。死骸は棺に納めて、此小屋の中部の上に置かれる。死人の顔は必ず海又は河の方に向けられる。かうした風に多少の差點はあるが、全ツングース族に共通の埋葬法は、決して死人を焼かぬといふことだとシュレンクは述べてゐる。

地理的環境  
の影響  
固有手法の  
残存

これらのツングースの埋葬法は、地理的環境から影響を受けて、それ／＼いくらかづつ變化してゐるけれど、大體に於いて原日本人のそれと相似てゐるのを覺える。副葬品の工合、容器の底を抜いて置くこと、雪中の道を消して木材を横へて置くことなどは、殆ど符節を合はしたやうである。日本移住後、四千年の間は、私達の埋葬法は大分變つたが、それでも埋葬地點の上には大きな板石を置いたり、碑石を樹てたり、

### 埴輪 土 偶

古代に於ける原日本人——それはまだ異種族の血液を混へることが少く、比較的純粋な人種型を有つてゐた——の容貌、服裝、裝飾などを、最も明らかに知り得る材料は、埴輪土偶であらねばならぬ。これは鎌倉の采女塚から発見せられたもので、顔面には赤色の彩色が施され、頸には勾玉を懸け、肩から胸へは領巾をかけてゐる。頭髮はちやうどエスキモー婦人の結つてゐるやうな形の高島田に結ばれ、衣服は上衣と下衣とに分れてゐる。埴輪には類型があり、いづれも其眼は西瓜の種子のやうで、小兒の眼によく見られる那なさが現はれてゐる。之を舊アイヌ式の土偶のその圖いに比べると、明かに人種の差が見出される。此寫眞は京都帝國大學に所藏せらるゝ實物から撮られ、美貌を表はした埴輪の代表といつても差支へないものである。



埋葬の心理  
的研究

宇宙觀

靈魂の不死

地方によつては海濱の小石を一面に敷き詰めたりして、古代の石洲古墳、樹石、石積、塚の原型を偲ばしめるところから、民衆固有の手法が多く年月を累ねても容易に變化せぬものであることが知られる。

私達の願ひは、かうした埋葬法の形式を知らうとすることよりも、寧ろどうしてそれらが起つたか、それは何に由つたか、又それから何を教へらる、かを研めたいことであらねばならない。前述の如き墳墓の状態から考へて、私はそれがアニミスティックな信仰の所産であると断定したい。原日本人の頭に映じた宇宙は、天と地と冥府との三つから成り立ち、天には神が住み、地には人が住み、冥府には死者が住むと彼等は信じた。彼等は人間が死ぬると、其肉體は朽ちてしまふけれども、其靈魂は永久に生き残つて滅びないことを信じてゐた。死者の靈魂が肉體から離れ切つてしまふまで、死者は此世界に於いて營爲したものと同一の生活を死後に於いても營爲しなければならぬと信じたが故に、家屋や器具や武具や、侍者、妻妾さへも墓場に伴はされたのであつた。墳墓は實に死者の冥府へゆくまでの住居であつた。死者は此世界に住んだ時と同一の形式を以てそこに住み、此世界の人々のやうに、食ひ、語り、動作し、思考するものだといふことは、原日本人の誰れもが信じて疑はぬところであつた。此未來

墳墓は家屋の模倣

観が殉死、副葬品を埋葬の一要素としたのであつたことに疑ひはない。

準物質的存在  
天上と冥府との交通  
耐久性材料の使用  
埋葬の第三段階

かう考へると、墳墓はどうしても、それらを造る民衆の家屋の模倣であらねばならなかつた。それ故に、原日本人の住居は、本来、石を疊んだ地下室であるべき筈であり、さうした住居を移動の後に捨て、からも、重要な死體の收斂に當つては、殆ど意識することなしに、踏襲的に舊時代の家屋形式を採用した墳墓を造つたものと観ることが出来る。此點から觀ると、彼等の信じてゐた靈魂は、今日私達一部の人々の考へてゐるやうな非物質的(Unmaterial)のものでなく、さうかと云つて極めて原始的な生活を送つてゐる人々の考へるやうな物質的(material)なものでもなく、物質と非物質との中間に介在してゐる準物質的(Quasi-material)のものであつた。それは人類學者(三三)の所謂「氣體的」(Vaporous)存在と同一觀念で、その存在してゐる超自然的な場所には、人類は出入してそれと交通することが出来ると考へられてゐた。天上と此世界と冥府との交通が神話に説かれてゐるのは、かうした信仰の具體的表現に過ぎないのであつた。(三三)かうした靈魂の存在が認められたそれらの日に於いては、その住み家は此世界のそれよりも重要であるが故に、遺族らは多くの努力と時間と工夫とを費して、耐久性物質を以て墳墓を營むことに努力したのであつた。これらは死體埋葬の第三段階

未來觀念

階に屬するもので、最も後に原日本人に懷かれた觀念であつたと思はれる。

古墳の主觀的側面

原日本人の埋葬法、従つて未來觀念は、他種族の文化の輸入と同時に次第に變形せられて、純粹の型式を失ふに至つたが、根本的要素は容易に失はれず、今日に於いても尙移住以前の埋葬形式がいくらかづつ認められる。そこに宗教の力があり、因習の力があり、固有文化の腐蝕し難い固着性があつた。死體埋葬は、これらの見地から、原日本人の宗教の大部分であつて、それが文化史上極めて重要な地位を占めてゐることを私達は知らなくてはならない。古墳研究は考古學者によつて年久しく行はれた、今は最早研究すべき何物も残されてゐないやうに思はれてゐる。しかし、それらは客觀的側面であつて、主觀的側面の研究は全く顧みられてゐない。試みに封土形式の一つである瓢塚を例證しようならば、その種類、大きさ、形状、階段などについては詳しく記載されてゐるが、何故、瓢の形が模されたかについては一言の理據ある説明を聞いたことがない。私の考へでは、瓢形古墳はトーテムを表はすところの象徴であつて、瓢から祖先が出たと信ずる一部族の好んで採用した構築様式であつたらしい。此一事だけでも、出雲部族と、大陸に残留した辰韓部族との間に存在する心的交渉をほのめかして餘りがあるではないか。

瓢形古墳とトーテム

(一)原日本人にトーテム信仰があつたといふことは、私が久しい前から考へてゐたことであつた。明確な證據は擧げてゐないけれども、石川三四郎氏は其著『古事記神話の新研究』(一七八、一七九頁)に於いてトーテムの存在を主張し、文學博士加藤玄智氏もまた其近著『神道の宗教學的新研究』(一六〇、一六一頁)に於いて、その存在を假定し、次ぎの如く云つてゐる。——「トーテム崇拝(Totemism)に至つては、これがあつたのか、なかつたのかといふことになる、アストンの如きは、トーテム崇拝の存在を日本に認めなかつたが、余の研究によると、どうも有つたやうに思はれる」。

(二)本書、第三章第一節參照。

(三)『古事記』上卷、八俣遠呂智の條參照。

(四・五)同上、『大國主神の條參照』。

(六)『日本書紀』卷一、日神の條參照。

(七)同上、卷二、火明命、火進命、火折尊の條など參照。太陽の末孫である自分達を考へた神話は、殆ど全卷に分布して居り、天孫以下の神話には火に關係したものが甚だ多い。これらは太陽をトーテムとし、又火或は火山をトーテムとして崇拝してゐたものと見てよい。原日本人が火の使用を憚んだのは、トーテムイズムに伴つたタブーであると思つて差支へない。

(八)『古事記』上卷。——「最後。其妹伊邪那美命。身自追來焉。爾千引石。引塞其黄泉比良坂。其石置中。各對立而。度事戶之時。……」。

(九)塞神は道反大神といつて、イザナヤが黄泉比良坂に立て塞いで、イザナミの死靈の追

隨を阻止した石に名づけたものが本來であつたが、遂に生殖器崇拝(Pallism)と混同して、今日では塞神といへば陰莖の形を持つた石神に變つてしまつた。

(一〇)高橋健自氏『古墳と上代文化』には古代の埋葬形式のことが詳しく記述してある。しかし、それは主とした形式論であつて、古代人をして埋葬を営ました心的作用に付ては、殆ど全く言及して居らない。在來の考古學は、形式論的範疇に止まつてゐたが、今日ではさうしたことは許されない。今日では個々の考古學的材料を集めてこれに統一を與へ、其時代の文化を窺はなければならぬやうになつてゐる。

(一一)かうした埋葬形式を石室古墳(Tumulus)といひ、それを更に横穴石室と竪穴石室とに分ける。

(一二)此種の埋葬を石積塚(Cairn)といふ。

(一三)粘土を用ひた古墳は日向國で多く發見せられた。私は出羽國でもそれを發見した。

(一四)かうした種類のものを、考古學者は葦石塚といふ。

(一五)石棺は火葬が知られた後に起つたものだといふ説が、今日、一部の人類學者に知られてゐる。けれども原日本人は火葬を知らなかつた。今日でもツングース族は火葬を用ひず、土葬或は空葬を行つてゐる。

(一六)文學博士濱田耕作氏『河内國府石器時代遺跡第二回發掘報告』(『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第四册所收)二二—二五頁參照。

(一七)殉死については『日本書紀』卷第六、垂仁天皇三十二年七月己卯の條に、これを禁止

した傳説がある。『史記列傳』匈奴傳第五十には、匈奴の殉死を記述して、「近幸臣妾從死<sup>レ</sup>者多至<sup>キハム</sup>數千百人<sup>ニ</sup>。」とあつて、此風がアッシャで盛んに行はれてゐたことが分る。南ロシアあたりで發掘せられるスキタイ人の古墳にも、多數の殉死者が發見せられる。北アッシャの殉死については、小松真一氏の『北アッシャに於ける殉死の風習に就いて』、『歴史と地理』第九卷第三號)に詳しい記述がある。

(一八)文學博士鳥居龍藏氏『有史以前の日本』四三四—四三六頁、及び『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第六冊、一九、二〇頁によれば、石器時代から日本に馬の棲んでゐたことが分つて、『魏志』の記述の間違であることも知れた。我國で神社に繪馬を献げるのは、蒙古人が馬を犠牲とする事と共に、馬の殉死の存在を證據立てるものであらう。『舊唐書』の韃靼傳に、乘馬を死者の前で殺して、祭祀を行ふことが記述せられてゐるのを見ると、私の此假定は愈々強化される。

(一九) "Shamanism in Siberia," 1864, p. 58.

(一〇) Palknoff:—"Essay on the Geography and Statistics of the Tungusic Tribes in Siberia," 1906, vol. i, part ii, p. 282

(一一) Maak: "Kr. nytemegerno na Anypp."

(一二) Tylor: "Anthropology," pp. 343, 344.

(一三)『日本書紀』卷一參照。イザナギ、イザナミが高天原に還つたといふ神話、イザナギが冥府に死んだイザナミを訪れていつたといふ神話は、人類が靈界に出入し得るといふ信仰の具體化されたものである。

## 第四章 南西民衆の移住

### 第一節 ネグリトリーの漂着

大正十年の夏、私は信越地方を旅行して、古代交通線の研究に従事したが、其際、信濃と越後との國境に近い葛草連<sup>くんそう</sup>といふ、地理的に全く孤立した小村に於いて、一般日本人とは全く懸け離れた體質と表情とを有つてゐる一少年を見た。彼は身長低く、膚黒く、肉が概して痩せてゐるのに、腹部と臀部とに於いてはそれが特に肥大であり、特に著しく目に映じたのは其眼が馬來型で、頭髮は極めて少い上に羊毛の如く縮れた鬘毛であることであつた。私は彼れを見て驚き、周圍の人々に比較して見ると、二三の人々を除いては殆ど全く近似點を持たぬまでに異つた體質であるから、他縣からの移住者でないかを聞き質したら、何代もそこに住んでゐる血液の純粹なものだといふ答へを得た。私は其時殆ど判断に苦んだが、やがて私の頭を衝いたのは隔世遺傳(Atavism)といふ考へであつた。

若し此少年を生態學的特徴によつて他の人種に比較するならば、どんな人種學者も

信な國境上の少年

稀教體質は隔世遺傳

アエタとの

類似

今一つの實例

必ず對微の材料として、フィリッピン群島のアエタ族(Aeta)を引き出すことに異議あるまいと思はれる。私も其時さうした感じがしたが、それ以來私は強く日本人の血管中に此人種——ネグリトー(Negrito)の血液の混つてゐることを主張するやうになつた。私の友達の中の一人には、それが立派な家柄に生れ、立派な教養のある紳士であるに拘はらず、體質に於いて甚しくアンダマン島のミンコビー族(Minkopis)に似てゐるものがある。これも葛草連の少年と等しく、間過的に祖先の特徴が子孫に現はれたものと見て差支ない。

ネグリトーの分布

人種の島

アエタ、ミンコビーは、サカイ族と共にネグリトーと稱する黑人系に屬し、印度のベンガル灣内に泛んでゐるアンダマン島(Andaman Isd)、マラッカ半島(Malacca Peninsula)の内部、及びフィリッピン群島(Philippin Islands)の山奥に分れて住んでゐる。<sup>(11)</sup> 第一のものをミンコビー、第二のものをサカイ(Sakai)、第三のものをアエタと云つてそれ／＼少しづつの差異を持つてゐるけれど、人種は同じことだといふのが一般人種學者の説である。かうした風に、同一種族が何故かうして遠隔の地に人種の島をなしてゐるかといふに、彼等は非常に古い時代に、これらの場所に分布してゐたのであるが、他種族の侵入によつて其住地を奪はれ、次第に山奥に逃避し、或は孤島に奔竄して、

自然航海で日本へ

ネグリトー來否論

上陸地點

ネグリトー漂着の證據

僅かに其種族を保つことが出来たのであつた。

アンダマン島から北上してマラッカ半島に至り、更に北上してフィリッピンに上陸してゐる人種は、たとへ人爲航海の開けなかつた日に於いても、風潮の助けによつて日本群島に渡來したことがあつたに相違ない、否さう見なければならぬ理由がある。或學者はインドネジヤンが群島に來る前に、どこかでネグリトーの血液を混へて來たといふことを主張するけれども、信濃の山奥の一少年のやうな類似は、種が比較的純粹に保たれてゐるのでなければ、たとへ隔世遺傳とは云へ、容易に見るとの出來ないものである。彼等は恐らくフィリッピン群島から臺灣、沖繩諸島、先島列島を通じて北上し、日本群島の或地點で上陸したものであらう。其上陸地點は分らないけれども、九州、四國、伊州、三河などはさうありさうな場所であつた。日本人中には往々にして甚しい鬘毛のものを發見する。越後の一部にもさうした人々が多い。さうした人々は多分ネグリトーの血液を濃厚に傳へてゐるのであらう。

ネグリトーが日本群島に上陸したとすれば、そこには體質以外何らかの證據がなければならなかつた。私は今さうした目的に適つた證據として、小人の傳説、州胡の記述、侏儒國の説話などを擧げることが出来る。

## 小人の傳説

## 小人の鯨漁

(一) 小人の傳説。——アイヌの間には一種の小人傳説が語り傳へられてゐる。「太古私達の間には穴居人種が住んでゐた。其身體は頗る短小で、唯だ一枚の蔦の葉の下に少くとも十人ぐらゐは集つてゐた。彼等が鯨捕りに行く時は、木の葉や笹の葉を縫うて小舟を造り、針で魚を捕ることを常とした。だから一尾の鯨を捕ると、五艘或は十艘の舟の人々が皆集つて来て、全力を傾注して之を海岸に引き揚げ、海岸に立つてゐる人々は、木或は鎗でそれを突き殺さねばならなかつた。驚くべきことには、かうした小さい人々が、時としては大きな鯨をさへ捕つたといふから、此穴居人種は神であつたに相違ない。」かう語り傳へられる小人は、身長が三尺乃至四尺で、雨に逢つたり、敵に攻められたりすると、直ぐ蔦の葉の下に隠れた。それ故に彼等をコロ・ボク・ウン・グル(Koro-fok-un-guru)、或は略してコロボクグル(Koropok-guru)といふのだ。アイヌ語コロコロニ(Korokoro-ni)は「蔦の木」を意味し、ボクは「下に」、ウンは「在る」、グルは「人」を意味し、全體で「蔦の下の人」といふ意味になる。此説話は之をエマキモ一の痕跡と見ても差支ない。

然るに日本人の間にも、矢張りこれに似た小人説話が残つてゐる。スクナヒコナは小神で、カムミムスビの手の俣から洩れ出たともいひ、また栗莖あはがらに弾かれて常世の郷

## コロボクグルの意義

## スクナヒコナ

## 埴

## 身長六七寸

に渡つたともいふが如きはそれである。支那にもかうした小人傳説は昔からあつて、東方には小人國があり、其名を埴ヒといつた。小人の身長は僅に九寸で、鶴がそれを呑んでしまふから、外出する時にはいつも群をなして行くといふ(七)。また一書には、魏の時代に八九人の子供が雨中に天から庭前へ落ちたが、其身長は六七寸ばかりであつた(八)。彼等の自らいふところに依ると、彼等は風に吹かれて飛んで來たのであつたと。まるで夢のやうな話であるけれど、其夢のやうなところに説話の價值があるので、長い間の民衆の傳説的信仰がそこにほの見えてゐるといつてもよいのであつた。

(二) 州胡の記述。——支那の古書に州胡の地理的記述がある。それは傳説としてよりも寧ろ事實として取り扱はるべきものである。それに據ると、州胡といふのが馬韓の西海の中に在る。其人は身長が短小で、言語は馬韓と同じくない。皆鮮卑のやうな髡頭で、革衣を着てゐる。其衣は上があつて下がなく、殆ど裸體である。彼等は好んで牛や豚を飼ひ、舟に乗つて海上を往來し、韓人らに交易をしてゐるとある(九)。これは只だの想像や説話ではないらしい。

(三) 侏儒國説話。——同じ書物の中に小人國の記述がある。即ち、倭の女王國から千里ばかり東方の海中に、又國があつて倭種が住んで居り、更に其南には侏儒國があ

## 侏儒國説話

## 州胡の記述



荒唐中の確實

つて、身長三四尺の人が住んでゐるとある。<sup>(10)</sup>これは半は説話、半は事實ともいふべきもので、後者に解すればフィリッピンあたりに侏儒國を擬することも出来、従つてアエタに其住民を擬することも出来るのである。

これらはいづれも私達の扱ふのには、あまりに荒唐なやうに見えるけれど、荒唐の中から確實を擷んで來なければ、雲霧のやうな古代史はこれをいつまで経つても明らかにすることが出来ない。

アエタの生活

アエタの體質

かうした理由で、私はネグリトローが日本群島に渡來したことを信ずる。彼等の群島に於ける生活は、それを知る由もないけれど、一番近いフィリッピン群島のアエタの生活を見れば、日本群島のそれをもおぼろげに思ひ浮べることが出来よう。米國の一學者はフィリッピン群島を研究して、彼等について次ぎのやうな記述を残してゐる。――「此群島中に、小人は約三萬人居る。彼等は廣く分布してゐるが、ルゾン島が一番多數を占めてゐる。ネグリトローは鬚毛を有し、鼻廣く、唇厚く、其足はアフリカの黒人の如く長いけれど、身長は僅に五呎<sup>フィート</sup>にしか達しない。其頭蓋は純粹の黒人と違つて圓く、其性質は單純濛昧である。彼等は家を建てない。若し彼等の寢てゐる木蔭、若しくは岩石の間に人が近づいたならば、彼等は兎の如く逃げ去るであらう。廣く旅行したも

黒潮で漂流

のでも、彼等の群居してゐるのを見たことは稀である。彼等は陸稻を栽培するにはしてゐるが、大體に於いては弓矢の獲物によつて生活する。弓矢はなか／＼巧みで、最

も猿の肉を愛食する<sup>(11)</sup>。



比律賓のアエタ

今日ですら群居することの出來ないネグリトローであるから、それが石器時代に於いては一層野蠻であり、性的慾求の淺ましい關係から、たゞ血液を私達の祖先の間に傳へたとい

ふだけで、大部分は奴隸として生活し、人口が段々に減少して、遂に今日では其痕跡さへも稀にしか見られなくなつてしまつたのであらう。<sup>(12)</sup>彼等の渡來は大方黒潮による漂着で、其年代はツングースの移住と同時、或はもつと古かつたと見てもよい。何となれば彼等には測り知られぬ遠い昔の原始民衆の體質的要素がいくつも備つてゐるからである。

(一)此少年の體格測定の中、最も重要な點二三を擧げて見ると、頭蓋は廣頭八二・六八、鼻は四五×三七×一六で、鼻梁はコンケーサであり、頭髮は褐色、鬚毛で、眼はいくら

かの蒙古式形状を帯んだ馬來式で、虹彩は極めて明るかつた。額はプログナツサスである。其時、私は葛草連村の住民二十人（其中男一三、女七）を同地青年會の好意によつて測定することが出来たから、序ながら頭蓋のみを表示して、その住民は一般に廣頭的傾向あることを告げたい。

葛草連村住民頭骨測定表

(男一三人・婦人七人)

性	最大長徑	最大幅徑	最大高徑	100×廣徑 長徑	分類 指示數
♂	192,00	148,00	143,00	77,08	中頭六人 指示數 78.52
♂	191,00	149,00	138,00	78,01	
♀	178,00	139,50	120,00	78,37	
♂	175,50	140,00	130,00	78,87	
♀	179,00	142,00	125,00	79,32	
♂	168,50	134,00	118,00	79,52	
♂	190,00	153,00	183,00	80,52	廣頭十一人 指示數 81.82
♂	191,00	154,00	130,00	80,62	
♂	179,00	145,00	125,00	81,00	
♂	177,50	144,00	124,00	81,12	
♂	172,00	140,00	130,00	81,39	
♂	183,00	149,50	135,50	81,69	
♀	181,00	149,00	115,00	82,32	過廣頭三人 指示數 86.85
♂	195,00	158,00	122,00	82,34	
♂	185,00	152,00	129,00	82,43	
♂	179,00	148,00	134,00	82,68	
♂	175,00	147,00	139,00	84,00	
♂	177,00	151,00	139,00	85,31	
♀	170,50	146,50	119,00	85,92	
♂	169,00	141,00	127,00	89,34	
平均指示數					81.59
分類優勝平均指示數					81.82

- (一) Deakler: "The Races of Man," pp. 397, 398.
- (二) 島居博士『有史以前の日本』三六二頁参照。
- (三) Batchelor: "The Ainu and Their Folklore."
- (四) 『古事記』上卷参照。
- (五) 『日本書紀』卷一参照。
- (六) 『三才圖會』參照。——「東方有小人國。名曰倭。長九寸。海鷗過而吞之。故出則群行。」
- (七) 『廣博物志』參照。
- (八) 『魏志』卷三十、東夷傳、馬韓の條參照。
- (九) 同上、倭の條參照。
- (一〇) Homer C. Stantz: "The Philippines and the Far-East."
- (一一) 古墳から發掘せられる埴輪の中に、甚だしく毛の縮れたものが表現せられてゐるのがある。それは多分ネグリトトではあるまいか。これについては小松真一氏『埴輪土偶に表はされたる原史時代日本人に於ける或一二の身的性質』『人類學雜誌』第三十七卷、第一、二、三號) 參照。

第二節 印度支那族の移住

原始時代の歴史は、民族相逐の歴史であつた。北方に於いては東胡、匈奴が沙漠の

歴史

北と東とに占據して漢族を南方に壓迫しようと努めてゐたやうに、南方に於いては漢族が黄河溪谷から脱出して、北嶺山脈を超えて揚子江流域に入り、そこに占據してゐた苗族らを驅逐しようと努めてゐた。漢族は初め西方から黄河流域に移住したのであつたが、南北の兩方面から異種族に挾撃せられて、其故郷との關係を絶つてしまつたのは、極めて古い時代のことであつた。漢族がそれらの日に「南蠻」と呼んだ人種は、今日人種學者の所謂「西藏印度支那種」(“Tibeto-Indo-Chinese”)と呼ぶものであつて、其故郷は明確には分らないけれど、どうも西藏あたりであつたやうに思はれる。

歴史以前に於けるこれら南方人種の分布、勢圏、生活状態などは、はつきりとは知られてゐないけれども、傳説史に従へば揚子江の南岸、洞庭湖と彭蠡湖との間に、三苗といふ種族が蟠居して集團生活を営んでゐた。彼等と漢族とは宗教、風俗が異つてゐたから、相互に理解することが出来ず、従つて相反目してゐたやうである。殊に漢族が勢力を得て北方に國家を建設するやうになつてからは、兩種族の軋轢は益々甚だしく、紀元前二十四世紀の頃、堯は東方及び北方の異種族を遠方に驅逐すると同時に、南方の異種族——それを漢族は人面鳥喙で、左右の兩翼を手足で扶けて歩き、海中の魚を食つて生活してゐると信じてゐた——驩兜を崇山に放流し、また江淮、荊州のあ

漢族と苗族

南方人種の  
先史分布

堯の異種族  
驅逐

舜と禹

荆蠻

楚秦の抗争

三苗の執着

たりに占據して、屢亂を作した南蠻——それを漢族は面貌や四肢は人の形をしてゐるけれど、脰の下には翼があるやうに考へてゐた——三苗を三危に驅逐して、次第に漢族の勢圏を南北に擴張して、廣大な黄河、揚子江の兩沖積層を自分達の掌中に收めようとした。漢族のかうした努力は世代を累ねて續けられ、紀元前二十三世紀の頃、舜は更に南方の異種族を征伐して、蒼梧の野——廣西の南部で死んだと傳へられる。舜の後を嗣いだ禹も、紀元前十三世紀の末葉に、異種族の征討と循服とに力を盡し、三苗の如きも西南の山間に蟄伏するに至つたやうである。

しかし、三苗の種族は全く滅んだといふ譯ではなく、團結の力が衰へて漢族に抵抗することが出来なくなつたといふだけである。周代に「荆蠻」といつたのは、苗種の熱蕃が荊州に残留して聚落をなしてゐたもので、それらは次第に漢族に同化して、春秋時代の初頭には楚國を形成し、戰國時代には中部支那に占據して北方の秦國と抗争した。楚秦の争ひは畢竟南種と北種との競争であつた。今日支那の南北相分れて抗争し、之を調和統一することの困難なのは、かつした傳統があるからだとは一般學者の説くところである。

漢族と同化することを肯んじなかつた三苗の一部は、甘肅、貴州、雲南方面に退却

力

南支那に於ける漢族以外の住民

して、自分達の固有の風俗に従うて、其傳統的生活を生活した。彼等の子孫は今日も尙ほ南部支那に定住し、執着力の強い民衆であることを現はしてゐる。南方支那の人類學的調査に従事した鳥居博士は、支那南方に於ける漢族以外の住民について、次ぎの如き意味を述べてゐる。「楊子江の上流チベット寄りの金沙江には、西藏族のモツソ、リソなどが住んでゐる。雲南省はマイコン河を始め印度支那に注ぐ大河の水源地で、東南は安南、緬甸、暹羅に接してゐるから、そこには色々の種族が住んでゐる。暹羅境にはタイ族、緬甸境にはビルマ族が居り、貴州、廣西の境には苗族が居る。四川省にはタイ族が少く、西藏、緬甸の民衆に近似した西蕃、<sup>シフワン</sup>、<sup>チベット</sup>、<sup>チベット</sup>などが住んでゐる。貴州は苗族の中心地で、そこでは比較的純粹な彼等の生活状態を見ると出来る。廣西省の北部、廣東河の流域には<sup>ヤオ</sup>、<sup>チベット</sup>、<sup>チベット</sup>などの印度支那族が居り、廣東省にもそれらと略、同一種族が住み、海南島には黎といふ先住民が残存してゐる。湖南省では貴州境に苗族の紅苗が居り、湖南には<sup>チベット</sup>が少らず住んでゐる。福建省には曾て『<sup>チベット</sup>』といはれた原住民が羅源、古田の附近に住んでゐたといはれる」。

印度支那に於ける住民

然らば印度支那地方には、彼等はどうした分布を有つてゐるか。佛蘭西人の記すところに従へば、印度支那半島は屢々異種族の侵入に逢つたが、其四周には雜種となる

安南族

ことを免れた純粹の人種が住み、また移動し去つて今は姿を止めぬ雜種民の通過の痕跡が残されてゐる。人類學的立場から観ると、印度支那の人種は、安南族、<sup>カムボジア</sup>、<sup>チベット</sup>、<sup>チベット</sup>、<sup>チベット</sup>などに分類することが出来る。此外に漢族の數も決して少くない。

「條支」

體質と性質

これらの中一番盛んなのは安南族(Annamite)で、其人口は全住民の六分の五を占めてゐる。彼等は東京平野の大部分と、安南及び交趾支那の全部とを占有し、東埔寨に於いても其住民の二十分の一を占めてゐる。彼等の發源地はチベットらしく、現在の場所に来るまでには數千年間を費した。其長年月の移動の間に、彼等は先住民と接觸して偉大なる影響を與へられた。それは今から千九百年ほど前のことで、支那書には「條支」(Giao-chi)として記載せられてゐる種族で、<sup>シム</sup>族とは十二世紀の間に互つて戦闘を續けたが、漢族と交渉を生じてから其文化を取り入れて自分達の生活を改善した。「條支」といふのは「切れた足」の義で、さうした名稱を此種族に與へたところの體質は、其直接の後裔たる安南族に殆んど全部遺傳されてゐる。彼等は身長低く、四肢短く、骨格は頑丈であるけれども、上半身は瘦せて細長く、粗大な足趾の各の間隔が大きく、手指もまた甚だ瘦せて細長い。彼等の顔面の特徴は、突起した頬骨、輕度の斜視、硬くて黒い鬚髯、銅色をした肌色等で、婦人にも長い鬚の生へてゐるのは

驚くべきことである。彼等はよく労働し、よく忍耐し、又質素な生活を送つて、宿命的な哲理を觀するに慣れてゐるにも拘はらず、實際の事件に遭遇すると敏捷な理解を持つことの出来る天稟を具へてゐる。彼等の柔和で、ともすれば阿諛的に見える容貌は、慇懃で禮儀正しい彼等の心理状態を外部に表現したものである。

安南族の社會は、家族を基調として組織せられる。其制度は支那のそれを模倣したもので、家族の支配権は家族の父が握り、刑罰を子弟に對して加へることが許されてゐる。彼れは數人の婦人を所有することが出来るが、其中家族の母となり得るのは一人で、他は皆妾として母の支配を受ける。これらの家族から村落が出来、村落は完全な自治と獨立とを保つてゐる。村落の行政は一村の名望家が司り、それらの人々は更に大きな名望家によつて指揮せられる。村落行政は中央政府とは本質的の交渉がなく、地主や職工の税額の如きも、皆村落それ自身で決定するのである。各村落には一種の共有田があつて、それからの所得は貧窮者と兵士との生活を支持する。安南族は一般に慈善事業を好んで、屢、相互扶助に關する施設を見る。彼等の宗教は儒教と老子教とであるが、今日では全く形式に墮して本來の教義などは忘れられてゐる。彼等の死靈を恐れることは甚だしい。

## 安南族の社會組織

## 村落の自治と獨立

## タイ族

タイ族(Thais)は安南族と同じく、チベットとビルマ高原との境から發源した移動民衆の後裔で、ラオ、フウ・エウム、タイ・ダム、タイ・ネウア、ルス、ユングなどの部族に分れてゐる。ラオ族はメコン河の岸に定住し、體格は中位である。頭は狭頭、顔面は平滑、口大きく、目眦切れ、黒く濃い毛髪は縮れてゐる。極めて溫和な性質を持つてゐるが、其代りまた極めて怠惰である。

カー族(Khas)は安南山脈の間に分布し、大部分は未開な状態で鬱林の中に生活してゐる。安南族との境界には墮壕が穿たれて、それから以内を自分達の勢力範圍と信じてゐる。彼等の生活は狩獵を以て支持せられ、米や玉蜀黍の耕作は稀にしか見られない。

東埔寨族は先住民と印度から侵入して來たクメール種(Khmers)との混血であらうと云はれてゐる。比較的新しく移住して來たマン族(Mangs)、コロ族(Tolos)、深編、マン族(Mangs)、ヤオ族(Yaos)なども此外に計へられなければならぬ。

これら諸部族は生活様式、體質などに於いてそれ／＼多少づつ異つてゐるけれど、言語學上、地理學上から推論すると、全く同一人種であることが知られる。人種學者は今かうした種族を一纏めにして「印度支那族」或は「西藏印度支那族」と呼ぶ。彼等は

## カー族

## 新來民族の色々

## 印度支那族の言語と文化

皆一様に單綴語を操り、古くから農業を知つてゐたらしい。彼等が中部支那の楊子江沖積層上に住んでゐた頃には、既に水田を耕して稻を作り、それを主食物としてゐたことは疑ひのないことで、彼等の文化淵源が甚だ遠く、古代に於いては却つて漢族よりも優れた點があつたと思はれるほどである。

さうした優越性を有つてゐた苗族は、紀元前六世紀を下らぬ頃に、中部支那から海を越えて北進し、日本群島の一端に上陸した。彼等の上陸地點は不明であるけれども、其生活の中心地點は九州の西海岸、たとへば有明海灣の沿岸平地——筑後川、菊池川、白川などの沖積層であつたらしい。彼等の移住は一つは、漢族の壓迫にも由つたらうけれども、一つは九州の活火山にあくがれて來たのもあつたらしい。彼等の固有宗教は今日全く失はれて、佛教、道教などを信じてゐるから、彼等の群島を訪れた日の宗教思想は、嚴格に云へば全く分らないといふ外仕方がないけれども、阿蘇山に對する南方支那人の後來の態度から推すと、拜火的觀念が苗族の間にあつて、それが南方支那の漢族に遺存したといふやうなことがなかつたか。阿蘇、霧島、温泉、高千穂の諸火山は、其物凄い噴火を以てどんなに古代民衆を畏怖驚嘆せしめ、従つてそれを崇拜する觀念を作興して、日夕其姿を仰ぎ得るやうな場所に住むことを歡ばしめたであ

苗族移住の理由

頁ヲ切リトルヤウナ  
不道義ナマニヤ  
ハヤメロ、

火山崇拜

欠

# 欠

## 農具の輸入

でなければ米でないほどに感じてゐたのであつた。

かうした耕作法と同時に、日本人は、農具のすべても亦た印度支那人から輸入したらしい。現今シヤムで行はれてゐる米の收穫、精白などに用ひる器具は、日本のそれらと殆ど全く同一であつて、其起原を一にしてゐることを私達に偲ばせる。<sup>(三三)</sup>

## 米の栽培

米の栽培がいつ頃から行はれたかは明らかでないけれど、漢族はそれを印度支那族から習うて、黃河流域で栽培に努力したらしい。漢代に朝鮮へ植民した漢族は、既に米を食物としてゐたからして、朝鮮半島に於いても、その栽培は紀元前二世紀の初頭以前のことである。<sup>(三四)</sup> 日本群島への輸入は、更にそれよりも古いとすれば、印度支那族が群島に移住した年代も大概それと知られるのであつた。日本語ウルチはサンスクリットのウリヒ(Drhi)から來たものであることを思へば、これが漢族から傳はつたも

## ウルチの語原

のではなくて、印度と關係の深い印度支那族から來たものであることに疑ひはない。それらの日に栽培せられてゐた米は、今日の日本米と異り、ずつと細長い形をしてゐたやうである。<sup>(三五)</sup>

## 優良米

長い年月の間に、私達の祖先が工夫に工夫を重ね、改良に改良を積んで、遂に今日見られるやうな多肉の優良米を作り出したことは確實で、それは園藝植物の栽培に於いて、私達日本人が世界に優秀の地位を占めてゐる如く、工業的農業に

印度支那人  
の性質

於いてもまた優秀な性能を有つてゐることを證明するものであつた。

印度支那族は食料改善を原日本人に教へたのみならず、金屬工業をも群島に輸入して、其文化の向上を助けたであらうが、性質が悲觀的で、實行の能力に乏しく、冥想や沈思に耽つてゐたい癖があつたので、政治上、産業上の勢力を失つて、強剛、敢爲の氣性に富んでゐる原日本人の爲めに、滅亡或は同化せしめられて、全く其存在を認められなくなつてしまつたのであつた。日本文化史上に於ける彼等の位地は、決して忘れることの出来ないもので、彼等の爲めに私達の祖先はどんなに惠福を與へられたか知れやしなかつた。古代の支那の史籍は、往々にして彼等を野蠻未開の種族のやうに記載してゐるけれど、それは自分達を高く見積る人種的僻見に過ぎないのであつて、彼等の文化は必ずしもそれらの日に於いては漢族の下に位しなかつたのであつた。「南蠻」(“Nan-man”)のマンは、「人」を意味する苗語ムン(Mun)の轉訛であつて、そこに何らの「野蠻」を表はす意味がなかつたといはれる。苗族には彼等特有の文字があつて、彼等の意志感情を自由に表現し得た。其文字は『八紘釋史』に記載せられ、日本の假名の中二三字はそれから發達したものであるといはれる。彼等によつて輸入せられた印度文化については、更に詳しく述べられねばならない。

「南蠻」の意  
味

(一)『史記』卷一。——「三苗在江淮荆州。數爲亂。」

(二)『書經』上、舜典。——「流共工于幽洲。放驩于崇山。竄三苗于三危。殛三苗于羽山。四罪而天下咸服。」

(三)『史記』卷一。——「踐帝位三十九年。南巡狩。崩於蒼梧之野。」

(四)同上、卷二。——「三危既度。三苗大序。」

(五)文學博士久米邦武氏『日本古代史』上卷、一八頁參照。

(六)文學博士鳥居龍藏氏『馬來種族と印度支那族との區別』『有史以前の日本』所收(三〇〇—三〇二頁參照)。

(七—一六)“L'Indochine”, pp. 133—52.

(一七)文學博士高楠順次郎氏『歴史以前の印度支那人種及其の太初同住の根源地』『史學雜誌』第九編第二號所載參照。

(一八)鳥居博士『苗族調査報告』一九〇頁參照。本書は博士の少壯時に於ける調査報告で、恐らく苗族に關する文献の最大のものであらう。苗族について言を立てようとするものは此書を逸してはならない。

(一九)『禪月集』卷十二。——「流山火著、碇石索雷鳴。また『義楚六帖』卷第二十一にも富士山の記載があり、明代になると阿蘇山を封じた記事が澤山に現はれてゐる。

(二〇—二八)『魏志』東夷傳、倭の條參照。

(二九)同上、參照。



(三〇)鳥居博士『有史以前の日本』三四二頁。——「私は此倭人と稱する者は、當時日本の九州の一隅にのみ分布して居つたので、全日本民族には餘り關係のないものと考へまゝ。而して彼等の支配者は固有日本人で、北方に關係するものと存じます。」私の考へては、『魏志』の「倭」として記述してゐるものが、悉く印度支那人であるといふのではない。たとへば壹岐とか、對馬とかの住民はツングースであつたらうが、女王國附近のものは大方印度支那人であつたらうと考へるのである。

(三一) Anory Austin: "Rice," p. 9.

(三二) H.R. Davies: "Yün-Nan," Plate XVI.

(三三) A. Cecil Carter: "The Kingdom of Siam," pp. 155—163.

(三四)私は朝鮮の調査旅行に於いて、平壤の對岸たる大同江面附近に於ける漢式墳墓の中から發見せられた米粒を手に入れた。それをどうしても漢代のものであらねばならぬとしたならば、樂浪郡に於ける米の栽培も亦それと同時に或はそれ以前のことであらねばならぬ。

(三五)『阿闍婆吠陀』("Atharva Veda")参照。

(三六)朝鮮で得た考古學的材料は皆米の形の長いことを證明してゐる。私が百濟軍倉址で發掘した米も恐ろしく長い形をしてゐた。

(三七)鳥居博士『苗族調査報告』一九一頁参照。

(三八)同上『有史以前の日本』三一七頁参照。

(三九)久米博士『日本古代史』上巻、一九頁参照。

### 第三節 インドネジャ族の北進

印度から南洋諸島へかけて住んでゐたネグリト族を驅逐して、それらの地方に自分達の住居を見出たしのはインドネジャ族であつた。インドネジャ族はこれまで屢々ポリネジャ族(Polynesian)と似てゐるやうに云はれてゐたけれど、最近人類學的研究の結果、さうした想像の當つてゐないことが明らかにせらるゝに至つた。

ロガン(Logan)を始め、ユングーン<sup>(1)</sup>(Junguhn)のバッタク族や、アミイ<sup>(2)</sup>(Hamy)のアルフル族についての調査が歩を進めて以來、インドネジャ族といふ語は、ボルネオ、スマトラ、セレベス、モルッカ群島などに住んでゐる民衆の集合名詞となつてしまつた。彼等は身長低く、平均僅かに一・五七米突<sup>(3)</sup>で、頭は中頭或は狭頭に屬し、其頭骨指示數は七八・五である。然るにポリネジャ族は身長高く、平均一七・二米突を算し、頭は廣頭である。たとひ皮膚の黄色い點、頭髮の眞直な點が兩種族同じであるとしても、鼻や唇や顔の形、其他様々の特徴が、これら兩種族を明らかに區別する條件となるであらう。

また他面に於いて、インドネジャ族は、マライ族(Malays)に似てゐると云はれ、

インドネジャ族

彼等の體質

マライ族と

の交渉

「前マライ族」

甚だしきに至つては兩者を混同してゐるけれども、マライ族は極めて新らしく移住し來つたもので、ちやうどインドネジャ族がネグリトローを驅逐したやうに、マライ族はインドネジャ族を驅逐して馬來諸島に占據したのである。だから、インドネジャ族は、マライ族以前のマライ族であつて、現今のマライ族よりは一時代古いといはねばならぬ。そこで、學者をこれをマライ族と區別する爲めに「前マライ族」(Pre-Malays)或は「原馬來族」(Proto-Malays)などいふ稱呼を用ひてゐる。マライ族は一般に身長が大きく、其高さは平均一・六一米突あり、頭は廣頭で、平均指示數が八五ある。も一つ大きな差點は、マライがインドネジャよりも混血の度が多いといふことである。マライ族——即ちマラッカ半島やスマトラのメナングカバウ(Menangkabau)並びにジャバ、スندا、其他島々の河沿ひに住んでゐる固有マライ族は、インドネジャ族とブルマ人、ネグリトロー、ヒンヅ、支那人、バブア人などの混血したものであるが、これに比べればインドネジャ族は純粹のもので、全く原型を保つてゐると云つても差支ない。

インドネジャ族とマライ族との風俗は相似てゐる。彼等の衣服ともいふべきは、兩脚の間と腰とに一枚の織物を捲きつけるもので、それを彼等はカイン(Kain)と呼ぶ。また男女を通じて用ひられる腰巻は、印度から輸入したものらしい。婦人の間にはジ

インドネジャ族の風俗

楯と楯

北進の路筋

ヤヴツ(Javat)といふ一種の犢鼻褌が用ひられてゐる。インドネジャ族は矢を用ひるけれども、それは他の種族から受け入れたもので、彼等自身の武器は槍と楯とである。楯は概ね長い六角形の木製で、モルッカのアルフル族(Alfurus)のものは象嵌がしてあり、ヂャク族(Dyaks)のものは繪を描いて、人間の毛髮などを飾りにつけてゐる。

此インドネジャ族が南洋諸島に移住したのは、餘程古いことであつて、彼等は多分



インドネジャ族の楯

紀元前に臺灣までも北進したに相違ない。既に臺灣まで來たとすれば、沖繩から先島列島を経て、九州四國邊まで入つて來ない筈はない。フィリッピン群島からバシー海

峽(Bashee Chan)を経て、紅頭嶼、臺灣に分布したやうに、彼等は忘れられた遠い昔に、臺灣から北上して薩摩地方に上陸したに相違ない。臺灣の生蕃とフィリッピンのインドネジャ族とが、人種的に繋がつてゐることが證明され、ば、此事も亦自ら推論される譯である。我邦の人種學者は生蕃がフィリッピンの北部から多く移住したことを主張して次の如く云つてゐる。——「此研究に向つて面白いのは、臺灣南東部のヤミ族、

黒潮よりは

## 島傳ひ

パイワン族、殊に紅頭嶼のヤミ族である。ヤミ族はバシー海峡附近の先住民と餘程深い關係があつて、彼等の口碑によると、始終丸木船でバシー海峡、バタン群島邊を往來してゐたらしい。これらから考へても、生蕃が臺灣に來たのは、決して大陸から來たのではなくて、飛石傳ひに島を通つて來たのである。——かういつて、インドネジャ族は黒潮に依らず、丸木船に依つて島傳ひに北上したといふことを暗示してゐる。

「隼人」  
隼人の風俗

此インドネジャ族こそは、國史に「隼人」として現はれてゐる異種族で、平安時代に至るまでも日本人と同化することが出来なかつたやうである。彼等は次々に北進して先島列島に住み、そこに原始的な農業生活を送つてゐたらしい。彼等は頭髮を斬り、腰篋をつけ、顔には丹などの顔料を塗つてゐたらしい。武器は矛と盾とを用ひ、また好んで舞踊を試みたらしい。

## 神話上の隼人の祖先

神話に従へば、ヒコホホデミが兄のホノスソリと争つて、兄が敗け弟が勝つたので、兄は弟の爲めに俳優となつた。此兄が隼人の祖先で、子孫に至るまで皇宮の護衛に任じ、犬の吠ゑる眞似をしたとある。『延喜式』の中に隼人に關する規定があつて、彼等が儀式に用ひる物品の名稱と數量とが掲げてある。それによると横刀は百九十四、楯は百八十枚、木槍は百八十竿、胡床は百八十脚とある。此中楯は長さ五尺、廣さ一尺

## 隼人の武器

## 隼人司

## 隼人の服裝

## 隼人の故郷

## 隼人の漸衰

八寸、厚さ一寸で、表面に鳥の毛をつけ、また赤土と白土とで鉤形に塗つた<sup>(二二)</sup>とあつて、如何にチャークだの、臺灣生蕃だの、楯によく似てゐる。時代が進んでからも、特に木槍を用ひたといふところにインドネジャらしい香氣がする。隼人司といふ役所さへ置かれ、そこには正一人、佐一人、令史一人、使丁十人、直丁十人を置き、隼人に關する戶籍を取扱ひ、又歌舞を習はせたり、竹笠を造らせたりした<sup>(二三)</sup>こともある。護衛に任ずる隼人は、大横の布衿を着け、白赤の木綿で造つた耳形鬘を着けて、楯と槍とを持って胡床に坐したとあるから、一種の假面<sup>(二四)</sup>、或は裏頭を着けたものらしい。何にしてもこれらの記述から見ると、昔、隼人と云はれたのはインドネジャ族であつたことに疑ひはない。

一學者は曾て隼人の故郷をボルネオと斷じ、其種族をソオと推定したが、ソオならばボルネオまで行かずとも臺灣にも居る筈である。古書の記述によれば、<sup>(二五)</sup>植嘉島の漁夫は容貌が隼人に似てゐるとあるから、九州一帯の海邊にも植民してゐたものと思はれる。

思ふに彼等は性質が慥悍で、久しい間印度支那人と争闘し、次いで原日本人にも抵抗して、自分達の固有の習慣に従つて、一種特別の社會組織を立て、ゐたが、次第に

弓矢が日本人と準人と  
の區別點

其勢力を失うて温和なものは原日本人と同化し、頑強なものは討ち滅ぼされてしまつて、其痕跡を全く留めなくなつたのは、恐らく平安時代の中頃であつたらう。一部の史學者の中には、心秘かに彼等インドネジャ族を、日本人の樞軸であるやうに考へてゐるものもあるやうであるけれど、彼等は弓矢を知らぬ種族であつて、昔から弓矢に堪能な日本人の祖先とは見做すことが出来ない。考古學上の遺物から見ても、神話學上の資料から觀ても、土俗學上の證據から考へても、日本人は鳴鶴を愛用した用弓民衆であつて、木槍と木盾とを唯一の生命としたインドネジャ族との間には、大きな人種的特質の差異が横はつてゐるとに留意しなければならぬ。歐洲學者の説に従へば、インドネジャ族はカウカシクス系であるといふ。

- (一) Junguhn: "Batuländer auf Sumatra," vol ii, p. 375.
- (11) Hamy: "Les Alfours de Gilola," ("Bull. Soc. Geogr." Paris, 6th Ser.,) vol xiii, p. 490.
- (三—五) Deniker: "The Races of Man," pp. 486, 487.
- (六)同上, pp. 267, 268.
- (七)文學博士鳥居龍藏氏『有史以前の日本』三〇六、三〇七頁。
- (八)『釋日本記』多福國の條。——「切髮卓裳。縷稻常豐。一植兩收。土毛支子莞子及種々海

物等多し。

- (九)『日本書紀』卷二。——「恒當<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>汝併人<sub>ニ</sub>。」
- (一〇)同上。——「是以。火酢芹命苗裔諸<sub>レ</sub>準人等。至今不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>天皇宮墻傍。代<sub>ニ</sub>吠狗<sub>ニ</sub>而奉<sub>レ</sub>事者也。」
- (一一)『延喜式』、準人式參照。
- (一二)『令義解』參照。
- (一三)沼田頼輔氏『日本人種新論』八一頁、參照。
- (一四)同上、七四頁參照。
- (一五)『肥前風土記』參照。
- (一六)Keane: "Ethnology," p. 326, 參照。キーンはインドネジャ族は、マライでもなく、バプアンでもなく、まさしくカウカシクスの人種型を持つてゐると論じてゐる。

#### 第四節 漢族の東遷

日本人が數種の人種から成り立つてゐるやうに、支那人もまた複式の人種であつた。けれども、日本人がツングース族を基調としてゐるやうに、支那人もまた漢族(漢)を基調としてゐるのであつた。漢族の發源地はどこであるか、まだ學界に定説ともい

支那人の基調は漢族

ホータンが  
カルデヤか

漢族の故郷

黄帝はバク  
族の首長ナ  
フンテ

崑崙は「花  
國」の意

チベット族

ふべき妥當性を持った學説が起つてゐないが、彼等が西方から移住して來たことだけは疑ひがない。或人は彼等の故郷を舊ホータン(于闐—Ancient Khotan)であるといひ、他の學者はそれをカルデヤ(Chaldea)であるといふ。ド・ラクベリーは次ぎの如く述べてゐる。

「支那の古物と傳説とは、其起原が西方であることを示してゐる。これらの材料を研究したならば、どんな支那學者も西方以外に支那の起原があると主張することは出來まい。支那本部の北西を通じて、漢族は徐々に北國に侵入したのであつて、今日の偉大は實に五千年前の微少から始まつてゐる。…ナフンテ(Nakhunte—近代音ナイ・ファン・チ(Nai Hwan Ti—黄帝))といふバク族(Bak)の最初の首長は、族人を率ゐて支那トルキスタンに入り、しばらくの後、カシュガル河(Kashgar—可失哈里)又はタリム河(Talym)に沿つて、クエンルン山脈(Kuenlun—崑崙)の東方に進出した。崑崙は「花國」の意で、未來の支那の沃土に適はしい名稱であつた。かうした考へは支那のナクンテ傳説と、地貌及び地名の一致とから私達の學び得る結果である。バク族は一人の首長に率ゐられてゐただけで、いくつもの小部隊に分れ、それらにはそれ／＼首長がついてゐるから、同時に皆が皆支那に達した譯ではなかつた。北チベット族と

神農はサル  
ゴン王

の關係の如きは、かうして理解せられる。ナフンテは北西支那に達し、黄河が南折してゐる地點より先きへは進まなかつた、そして甘肅、陝西の境である寧州で死んだと云ひ傳へられる。」



カデルヤ王サルゴン

ド・ラクベリーは、かうして黄帝をナフンテと見做したが故に、其前の神農(Shemung)をカルデヤのサルゴン王(Bargon)と見做し、ナフンテの東遷は紀元前二千三百年代であると斷定した。それはス

ーサ(Busa)の王タヅル・ナフンタ(Kudur Nakhunta)がバビロニヤを征服し、エラム(Elam)地方の秩序がそれ以來破壊されたのが、紀元前二千二百九十五年であつたからで、それらは支那の年代記と吻合してゐるといふのであつた。此外、彼れは尙ほ多く

の言語學的證據を擧げて、漢族がバク種であることを證明し、支那語の「民衆」を意味する「百姓」は、人種名バクに相當するもので、其固有名詞はバクヂ(Bakhtji)即ちバクトラ(Bactra)・バクタン(Bakhtan)・バクチャリ(Bakhtyari)・バグダッド(Bagdad)・バギスタン(Bagistan)などとなつて残り、いづれも「バクの邦」の意を持つてゐるなどと説いた<sup>(三)</sup>。

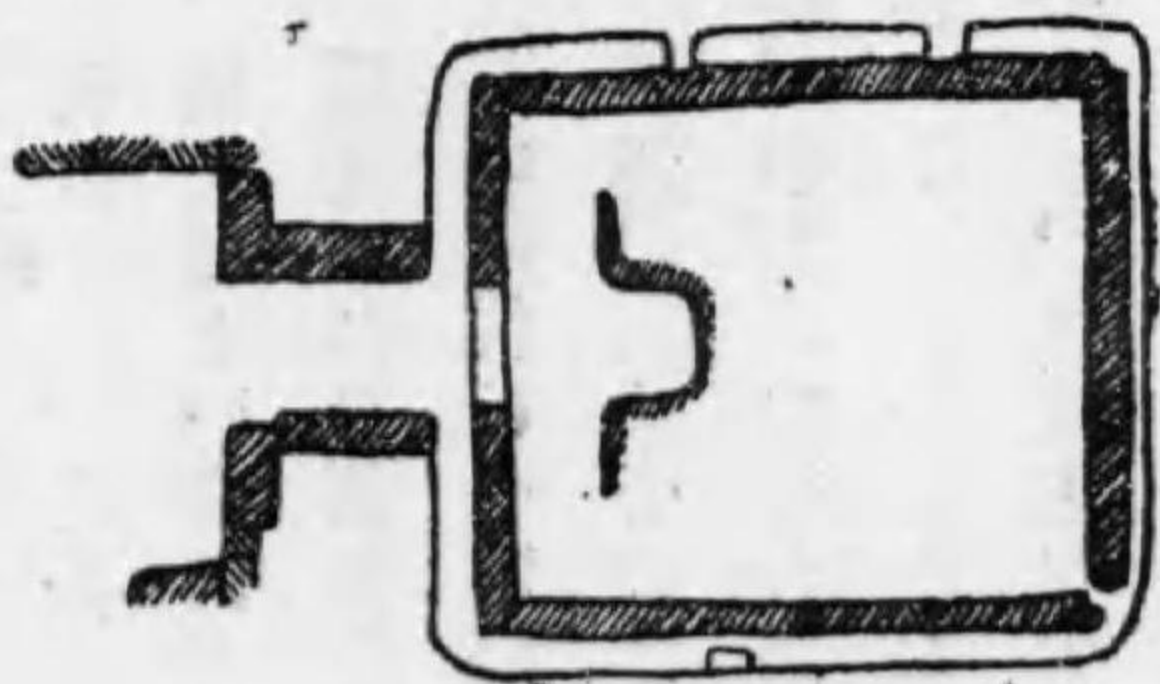
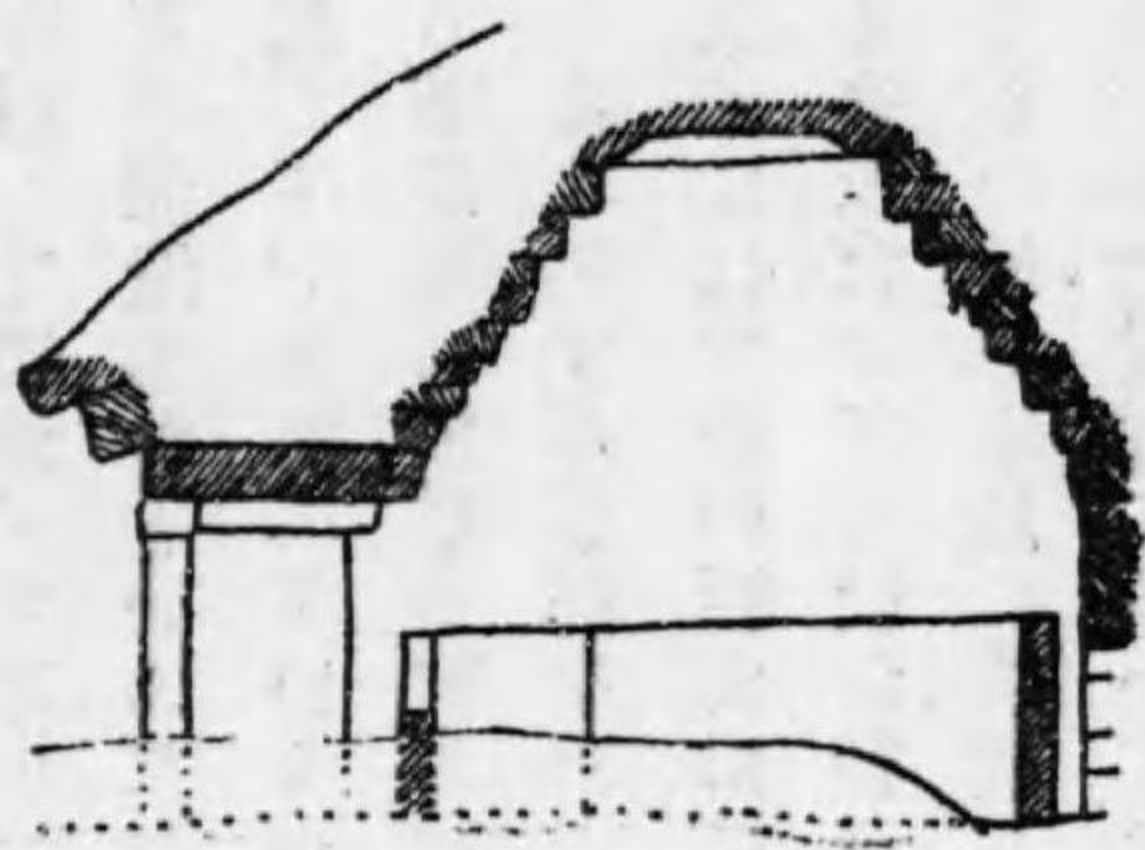
此説は多少牽強附會であるとしても、漢族が西域地方から出立して支那トルキスタンに入り、天山々脈と崑崙山脈との中間の沙漠沃地を漸次東方に過つて、遂に黃河流域に其根據を据ゑたことには疑ひの餘地がなかつた。紀元前十四世紀頃からの史的記述は、次第に正確を増し來り、周代以後は略々信用してもよい年代記となつてゐる。それらの日に於いても、漢族は北狄と南蠻とに威壓せられて、絶えず自分達の勢圏を擴大する爲めの戦争に従事しなければならなかつた。彼等の文化は東方の諸民衆に比べれば、餘程進歩したものであつたので、次第にその影響を異種族に與へて、東洋文化の一般的進歩に非常なる貢獻をした。

春秋戰國の時代から秦の時代を経て、漢の時代が來た時には、支那は最早立派な國家を形成して、其勢力範圍は非常な遠方まで擴張せられた。紀元前一世紀の武帝の時

代には、殆ど現今の支那と同じ廣さの領土を占めてそれを統一することが出來た。武帝の元封三年(西曆紀元前108年)には、漢族の勢力は滿洲、朝鮮にも及んで、半島の北部には樂浪、臨屯、玄菟、眞番の四郡が置かれたが、昭帝の始元五年(西曆紀元前82年)には四郡を廢して樂浪、玄菟の二郡に併合した<sup>(四)</sup>。しかし、これらは行政區劃を定めて若干の官吏を派遣したといふだけで、植民地といふほどのことはなく、固有の民衆がそこに定住して、それ／＼いくつかの獨立した小部落を建設してゐたのであつた。前漢のこれら植民地に於ける勢力は、王莽の時代に一時衰へて、優勢な部落は次第に國家を形成しようとする形勢を示した。後漢の光武帝の時はいくらか勢力を恢復し、同時代の末葉には半島の西海岸に樂浪、帶方の二郡が置かれ、曹魏の時代に至るまで、兎も角も表面だけでも統治權を漢族の手に握つてゐた。

漢族の朝鮮半島に扶植した勢力は、さほど強大ではなかつたけれども、樂浪、帶方二郡の郡治附近に於いては、可也に多數の漢族植民を見たであらう。彼等は恐らく郡衙の附近に博士の家屋を營み、漢族の風俗習慣に従つて、其家庭社會の兩生活を營んだであらう。彼等は武器として長三角形の青銅鏃を用ひ、米穀を食し、五銖錢、貨泉を通用し、銀指環、琥珀玉などを裝身具として愛用した<sup>(五)</sup>。

樂浪郡治の遺址は、平安南道大同郡大同江面土城里——平壤の對岸下流——にあつて、周圍に繞らせた、土城が尙ほ殘存して、昔日の佛を傳へてゐる。土城の内には漢代の瓦が散亂して居り、瓦當には「千秋萬歲」だの、「大晋元康」だの、文字が浮彫にしてあ



穹窿天井を有する漢式裝飾古墳 (肥後井寺)

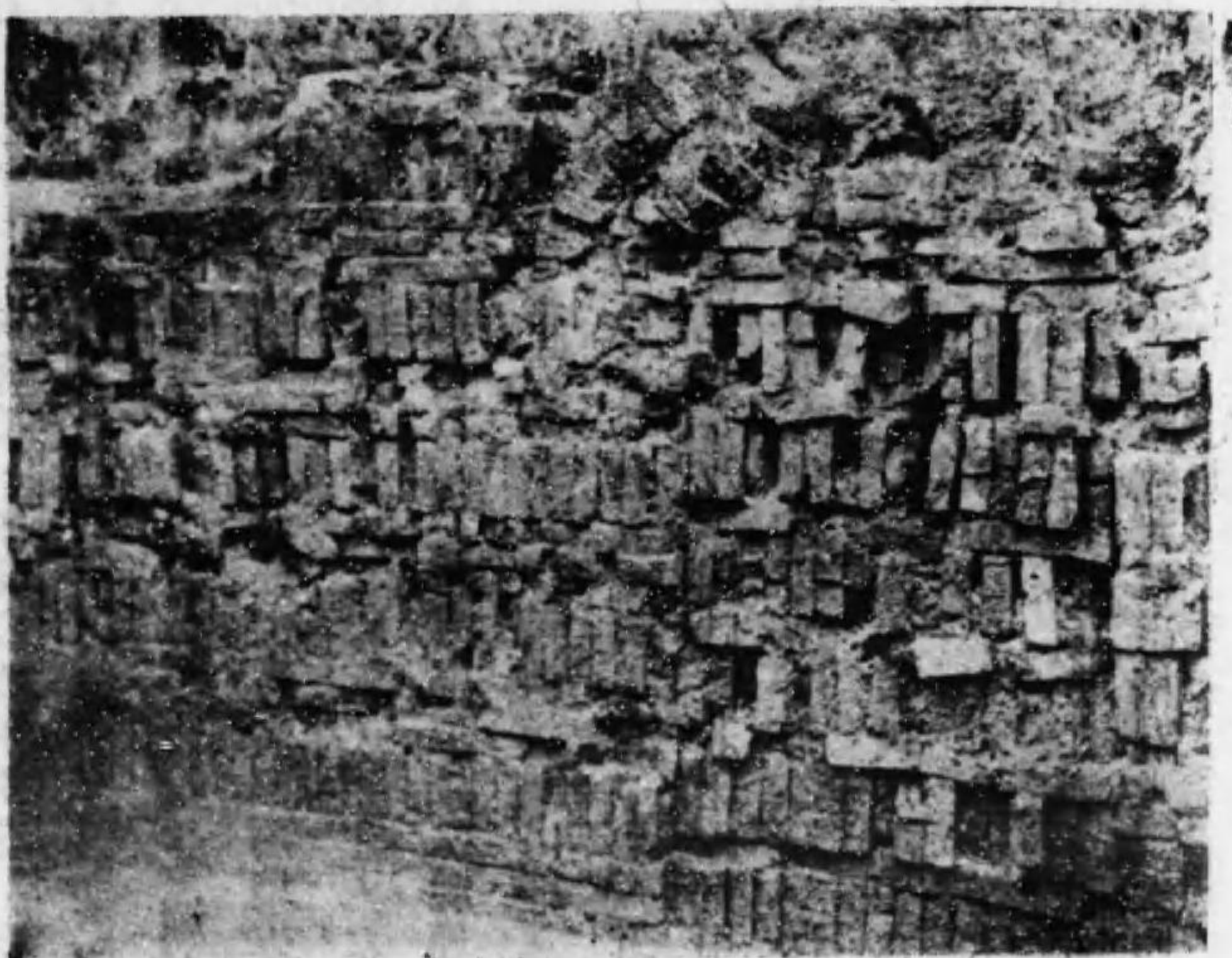
る。銅印、銅鑲、貨幣、裝飾品なども少からず發見せられた。土城里の周圍には樂浪時代の墳墓が千百三十基も存在して、相應に漢族の勢力が盛んであつたとを示してゐる。これらの墳墓はそれ／＼構築の様式を異にしてゐるけれども、石巖

磚墓の構造

里にある磚墓は穹窿の天井を有し、床は磚を綱代に敷き、室の左右壁に接して磚床が設けてあつた。此附近の磚墓で興味を感じるのは、磚の積み方が縦横交錯して居て、今日私達の見ると煉瓦積みとは形式を異にし、たゞ古いパビロンのエアンナツム (Eannatum)

エアンナツムの井戸

アツシリヤの圓室



朝鮮平安南道大同郡大同江面磚墓内部

の井戸にのみ見られる物であつた。磚の形は色々あり、穹窿に用ひるものは歐洲の要石の如く、細長い扇形で、上部太く下部細く、せり持によつて弧形を保たうとした意圖が窺はれる。表面には文字又は文様の彫刻があつて、如何に其製造に努力を費したか知られる。また穹窿は弧部が半圓形を呈せず、いさゝか尖圓であるところに固有の手法が横はつてゐて、それは遠くセンナケリブの時代にアツシリヤ人の間に發達しつゝ、あつた圓室の屋根とよく似てゐることとを、私達はクユンジク (Kouyunjik) の壁面の浮彫によつて知ることが出

アルタクセルクセスの宮殿

帶方郡治址

漢族と朝鮮半島との關係

來る。かうした關係で、漢代の支那文化、殊に物質文化からは、強烈な西域地方の香氣が嗅けるのであつた。<sup>(一)</sup> 磚石の文様も多分スーサに於けるアルタクセルクセス・ムネモン (Artaxerxes Mnemon) の宮殿に於ける煉瓦細工と同一の起原のものであらう。<sup>(二)</sup> 此朝鮮の磚石と大同小異のそれが、印度支那地方でも発見せられるといふから、漢代以後に於ける漢族の勢力がどんなに強く、どんなに遠くまで及んだか<sup>(三)</sup> 分る。

樂浪郡治址に比べれば、帶方郡治址は規模が狭小で、前者が後者よりも盛大であつたことが分る。帶方郡治址は黃海道鳳山郡文井面石城里城内洞にあつて、土地の人々から唐上城と呼ばれてゐるものと目され、其附近には「帶方太守張撫夷墓」の文字を刻んだ磚墓が発見せられ、同時に若干の日用品、裝飾具なども発見せられて、それらの日に於ける漢族の文化を私達に語つてくれる。

これらの遺物遺跡は、漢族の植民が造つたもの、或は彼等から影響を受けた朝鮮民衆が營んだものであらうが、いづれにしても漢族がそれらの地方に政治上、經濟上の勢力を扶植してゐたことは明らかである。今日朝鮮半島には比較的漢族の勢力が振はななければ、平壤附近だけは格別で、大同江の渡船場では多數の漢人の往來するのを見受ける。地理と人類との關係は不思議なもので、昔から漢族は平安、黃海、兩道

欠



# 欠

大同郡龍淵面坡長里	六三基
道濟里	五七
加鶴里	九
巢里	一三
大同郡南串面南井里	一七七基
甫城里	一二
長梅里	八六
柳寺里	七六
	三五一基

(一〇) Hancock: "Mesopotamian Archaeology," p. 57 et Pl. VI.

(一一) 同上, p. 155. 参照。

(一二) Lieut.-Col. P.M. Sykes: "A History of Persia," vol. i., p. 159.

(一三) 私は曾て此事を東京ハノイの『東洋學院報告』で知つたが、ちやうどそれが手許にな  
いので、巻数を明示することが出来ない。

(一四) 『朝鮮古蹟圖譜』一、第四十圖版、一四一—一四六圖参照。

(一五) 鳥居博士『有史以前の日本』一八二—一八八頁参照。

(一六) 理學博士松村任三氏『溯源語彙』及び『語原類解』参照。氏は日本語の大部分を漢語で  
あると断じてゐられる一人で、可也間違も多いやうであるが、また申つてゐるものも少くな  
いと思はれる。

## 第五章 日本帝國の萌芽

### 第一節 群島の牽引力

人類の要求  
した三つの  
モースト

進化が人類を生んだ。彼等は向上することなしに彼等自身を見出すことが出来なかつた。一つの泉から流れ出た水が、末はいくつにも分れて川々をなし、岩に觸れては奔湍となつて激し、野に逢うては溪流となつて眠るやうに、少くとも四種の人種を現出して東西南北に散つた人類は、地理的窘境に影響せられて益々其特殊の性能と體格とを發達せしめた。さうした時には、彼等はそれらの境遇に應じて、出來得る限り最善、最美、最眞の生活を送らうと心懸けた。三つの「至上」<sup>モースト</sup>を求めて飽くことを知らなかつた彼等は、それらを手に入れる爲めに漂泊を試み、漂泊の後に漂泊を續けて、遂に世界の果てから果てにまで、地帯の極みから極みにまで移動した。

移動の自由

極めて古い時代は姑らく措いて云はぬことにする。新石器時代には彼等は主として西と東とに動いた。それは一面、西方渴仰と、東方憧憬とに引張られ、他面、自然に壓迫せられて苦しい生活を安易の生活に乗り換へる爲めであつた。かうして北から、

漂泊の中止

南から、あるは又西から、いづれも東の果てにあるといふ太陽の源泉を原ねて、東方を憧憬する様々の民衆が日本群島に集つて來た、野を越え、山を越え、海を越えて。そこには境界もなく、障礙もなく、又防壁もなく、たゞ自由と希望と歡喜とがあるばかりであつた。<sup>(二)</sup>北の果てから來た舊アイヌは、そこに會て知られなかつた安易の世界を見出した。北西から來たツングースは、そこが理想の樂土であることを知つた。西南から來た印度支那族は、そこに楽しい美の別天地のあることを發見した。南から來たインドネジャ族は、そこに満足の念に満たされた生活を營んだ。ネグリトは厚い唇を反らして夢みるやうな月日を送つてゐた。彼等はいづれも在りし日の要求を忘れたかのやうに、此群島に來て其漂泊を止めてしまつた。

牽引力

氣候がよく、景色がよく、物資が豊富で、人口の稀薄なアメリカ大陸が、今日でも尙舊世界の人々に、現世の樂園ともいふべき移住地と思はれてゐるやうに、それらの日に此日本群島は四方の民衆にまで樂園であり、天國であつた。群島が北方民衆を牽き着け、南方民衆を牽き着け、西方民衆を牽き着けて、それらの人々に満足してそこに定住し、また他の地方に移つてゆくまいといふ決心をさせるには、そこにいくつかの力強い因由がなければならなかつた。

## 氣候の中和

(一) 氣候の中和は其有力な一因由であつた。暑くもなく寒くもない群島の氣温は、どんなに北方民衆の凍つた血を溶かして、酷寒の脅威に萎縮してゐた身體をのんびりさしたであらう。どんなに南方民衆の溶けた肉を引きしめて、極熱の壓迫に弛緩した運動をびくとさしたであらう。雨量多く、従つて水蒸氣が多く、空氣の濕潤した、其癖、明るい、麗かな群島の雰圍氣は、どんなに西方民衆の鬱血した頭腦を刺戟して、變化の少い寰境の影響に馴致した習俗を打破せしめたであらう。氣候は生活の第一條件であつた。經濟が生活を左右しなかつた自然民衆に取つては、好惡の感と適否の情とを彼等に起させるものは、主として氣候であつた。其氣候の中和(三)な群島から、彼等が居を移さうとしなかつたのには無理がない。

(二) 景觀の美麗もまた民衆にまで一つの大きな牽引力であつたに相違ない。自然の美は所詮形式の美に過ぎなかつた。形式の美は、空間と時間との面白い按排に過ぎなかつた。山は木で蔽はれ、野は草で蔽はれて、見る限り青々としてゐた群島の夏は、どんなに北方民衆の眼を娛ましめたであらう。谷も、森も、野も、山も、陸地は悉く雪に閉されて、眼路の限り白色に醇化された群島の冬は、どんなに南方民衆の心を驚かしたであらう。春の花の紅、秋の葉の黄は、霞と紛ひ、霧の中に匂つて、どんなに

## 景觀の美麗

## 雨期

## 颯風期

## 豊富の物資

西方民衆を牽きつけたであらう。雄大な浪の音、可憐な鳥の聲、蝶の翅の美しい文様や鳥の柔毛の興味ある色彩、それらはどんなに原始民衆の耳に眼に、美しい聲音、美しい色彩と映つたであらう。森の神祕、山の莊嚴、海の雄渾、河の廣濶、それらはどんなに群島に移住した人々の若い心を動かしたであらう。地には強烈の香氣を漂はせる花がないけれど、空には永劫の光輝を放つ星がひろめてゐた。(三)雨期には黒雲が天を蔽うて、地は流されるかと思はれるばかり雨が降るけれども、一たび霽れ渡ると空氣は舊の明澄に歸して、そこに新鮮な生命の呼吸が呼吸せられた。(四)颯風期には東から南から、大地をゆるめかして暴風が襲來し、樹を抜き、家を破り、人を倒すけれども、一たび風けばそこには靜かな天地が開けて、平和の空氣が四邊に充ちるのを覺えた。かうした自然の美しくしさは、北から南から西から此群島に集まつて來た人々を安め、慰め、落ち着かせて、そこを去らうとする氣を起させなかつた。寧ろ永久にそこに住みたいと云ふ心を起させた。そこは彼等にまで美の殿堂であり、愛の境域であつた。何物にも替へられないほど、彼等は此群島を愛する心情を懐くやうになつた。

(三) 物資の供給の豊富であつたことは、確かに群島が四方の民衆を牽引した大きな力であつた。山林には無限の材木があり、溪谷には多量の石材があつた。藥にする草、

繩にする蔓、織物にする植物、花や葉や實や根を食物にする草木の類はどこにでも見出された。それらの山林には鳥が啼き、獸が吼えて、彼等の矢の的となり、石棒の的となつて、彼等に多量の食物を供給し、衣服の料を供給した。海に行き、入江に行き、河に行き、湖沼に行くと、そこには無数の魚類が棲息し、また取り盡されないほどの介類がゐた。<sup>(五)</sup>かうして移住民衆は、食住衣の三つの要求を容易に充たし得たが故に、また此群島を去つて他に移轉する必要を見なかつた。狩獵時代が過ぎて農業時代の曙を迎へた時には、彼等は最早愛着の心を起して、其足の裏が美くしい群島の地にへばりついてゐた。

かうした三つの主因、それらに更にいくつかの従因が絡まつて、群島に移住した人はそこを自分達の植民地であるとは思はなくなつた。二世代も三世代も經つ中には、そこを全く自分達の故郷のやうに思ふまでになつた。自分もそこで生れた、親達もそこで生れた、祖父母もそこで生れた。祖父母の親達はどこで生れたか知れないけれど、さうした事は回顧の力の薄い、想像の力の弱い、豫見の力を殆ど全く持たぬ自然民衆に取つては、初手から大した問題ではなかつた、否全く問題とはならなかつた。かうした理由で、移住民衆は全くそれらの故郷を忘れてしまつた。群島を自分の國であ

## 食住衣の三原料

## 故郷の觀念の生成

## 繁殖の事業

り、自分の發祥の地と思ふやうになつた。

愛着の心はこゝに湧いた。單に氣候、景色、物資といふやうな主因が彼等を引き着けるのみならず、後にはそれらが後から袖を引かずとも、否寧ろそれらが生活に不利不便なやうな日が來ても、彼等は群島を去ることを忍び得ないまでになつた。彼等は單に彼等の生活の資源を得ることに努力したのみならず、彼等の種を絶たない爲めに繁殖の事業をも營んだ。<sup>(六)</sup>彼等が移住を開始した時、そこには稀薄の人口しか見出されなかつたが、生活を平安にする三つの動因は、同時に生殖を容易にする動因ともなつて、彼等の人口はどしどしと増したに相違なかつた。猛獸が少く、鷺鳥が稀れで、時たま起る天災地異の外、彼等の生命を未盡に奪ふものはなかつた。それ故に彼等の戸口は驚くべき勢を以て増殖した。一對の夫婦は少くとも一世代に十二人の子を生み、其中の二人を喪つたであらう。子の半數を男性とし、半數を女性とし、それらが又一世代に各、十人の子を生んだとしたならば、第一世代に二人の人口は、第二世代に親子合せて十二人の人口となり、第三世代には祖父母は死んだと假定しても、親子合せて六十人の人口となり、第四世代には父母のみ生存するとしても、それに一婦人の擧げる正味十人づゝの子の數を加ふれば、總數實に三百人(親五十人、子二百五十人)の多

## 人口増加率

四世代に百五十倍

數に上る。即ち人口は三世代九十年間に三十倍、四世代百二十年間に百五十倍の増加を見る筈である。複雑な構造を持つた近代人に在つては、人口の増加はとて「鼠算」のやうな比率を見ないけれども、生活が安易であつた時代には、「鼠算」以上の結果を見る<sup>(七)</sup>ことが出来たであらう。

愛郷心

かうした比率を以て生れた子女は、皆此群島を故郷となし、父母の國となし、自身土地であつて、他人の土地ではないと信じたが故に、愛着の心は一世代毎に増加して、遂にはそこを無比の樂園、至上の國土と思ふやうになつたのであつた。愛郷心は畢竟土地の牽引力に胚胎する群衆心理の産物であつた。ここに日本群島と住民とを結合した強力な楔子が打ちこまれて、こゝから「日本人」といふ混血民衆が出現して、其無限の發達に向つて出立しつゝ、あつたのであつた。

(一) 漂泊民族の間にも一定の境界があつたけれども、それは比較的後代のことである。殊に新發見の土地にはさうしたものゝありやうがない。土地を拓いたものが、其土地を取得するのである。

(二) 氣候の中和が人類の生活に適することは、古代の五大國——エジプト、アッシリヤ、支那、メキシコ、ペルウが皆温帯に位してゐることを想へば、直ぐ理解が出来るであらう。

(三) 古代日本人の歌謡には、自然の美を讚美したものが多し。寒いところ、暑いところか

ら此群島に移つて來た當時にあつては、四季に亘つてそれなく變化する日本の光景は、必ず移住民の耳目を歎ばしたに相違ない。銅器、土器などにはかうした讚歎の情が文様となつて現はれてゐる。

(四) 颱風は可也に古代日本人に注意せられてゐたらしい。スサノヲ神話は一種の暴風神を日月神たるアマテラス、ツクヨミに配したものである。

(五) 人口の稀薄な間は、生活の原料が豊富なことは説明するまでもない。現にアイヌの如きも江戸時代の末期までは、豊富な鮭の漁獲に農耕の必要を感じないほどであつた。漁具、獵具の進歩が、人口の増殖と相待つて、自然の物資、殊に食料品を減少せしめるのは著しいことである。

(六) 古代日本人が生々繁殖主義の民衆であつたことは、其神話が殆ど全く「Fertility」を背景としてゐることによつても分る。「生産」といふことの最も顯著な神格化の例として、私はタカミムスビ、カムミムスビ、ワカムスビなどを擧げることが出来る。

(七) 自然の状態に放置されてゐた寒帯の或民衆は、一世代三十年の間に、三千人から八千人に増加した。温帯に於ける増加率は寒帯よりも更に大きい筈であり、しかも生々繁殖主義の觀念を懐いて、子殺し(Infanticide)を兩性に亘つて行はなかつたらしい古代日本人に於いては、それが一層大きい筈である。そこで、私は色々の比較研究を試みた結果、一世代に人口が五倍するものと假定して如上の計算を立て、儼然たる原日本人の動的生活を回想するにしたのである。

(八)私は「原日本人」(Proto-Japanese)と「日本人」(Japanese)とを區別する。「日本人」といふのは「現日本人」(“Hoio-Japanese”)と同じ意義で、人種學的に云へばツングース、舊アイヌ、ネグリト、インドネジヤン、インド・チャイニース、漢族——六種の血液の混つた混血民衆である。

## 第二節 聚落の生成と其發達

純粹な狩獵生活の時代から群島に住まつてゐたものも、尙ほ湖の畔とか、河の岸とか、靜海の濱とか、山林の端とかに小屋を營んでゐたであらうが、それは決して永久的のものでなくて、やがては獲物を逐うていづくかに轉徙しなければならぬのであつた。それ故に、それらの日にはまだ聚落が十分に發達しなかつた。然るに、後から引續き群島に移住した民衆は、石器や骨器は使ひながらも、主食物は漁獵し得た鳥獸魚貝に仰ぎながらも、尙ほ原始的な鎌や鋤を使つて、或種の植物を栽培し、其實を收穫することを怠らなかつた。金屬が用ひられる時代が來てからは、飢饉に對する苦い經驗と、器具の與へる便利とが、彼等をして農耕に心を傾けしめるやうになつた。勿論、それは紀元前三、四世紀のことであつたが、印度支那族が米の耕作を教へて以來、

狩獵時代の聚落

原始農業時代の聚落

金屬時代の聚落

住居の定着

聚落は溪谷に

「溪谷式聚落」

原日本人は殆ど全く農業生活を送るやうになつてしまつた。

そこに生活の改善が起つた。——狩獵生活が住居を移動せしめる性質を持つてゐるに反し、農業生活はそれを定着せしめる性質を持つてゐた。それらの日まで、漂泊を續けて來た民衆は、一定の場所に定着して土地を開墾することに努めた。此時から聚落が生成されたのであつた。聚落は大抵湖沼の岸とか、河川の岸とかに作られた。北には高地があり、南は開けて日當りがよく、しかも水を得るのに都合のよいやうな場所が、自ら聚落のある場所となつた。

聚落の生成は溪谷——といはうよりは河川の流域に主として見られた。或河川の左右兩岸には、若干の沖積平地の開けてゐるのが常であつた。さうした平地を民衆は喜んで開墾し、其一端に彼等の住居を構へた。人口の繁殖に伴うて、一の平地から他の平地へと移り、どの溪谷もどの溪谷も小屋の見えないところがないやうになつた。一つの溪谷にはいくつもの家族があり、それらは下流から次第に上流に住居を作り、縦に細長い「溪谷式聚落」ともいふべき聚落が現はれた。さうした日に於いては、其溪谷は其聚落の民衆に向つて開放せられ、それをどの家族が持つといふやうなことはなかつた。況んや個人などいふものは全く認められてゐなかつた。即ち、聚落は溪谷を

聚落の一單位

家族の膨脹

開墾は共同作業

聚落は家族の延長

一單位とするやうに、所有權も聚落を一單位とするやうな傾きがあつた。それはらやうど牧畜民衆の間に於ける漂泊の限界のやうなもので、「所有」といふほどの明確な權利觀念はなく、只だ其溪谷に住居を持つてゐるものは、其溪谷のどこを開いても差支へないといふほどのものであつた。膨脹した家族は其眷族を一つ屋根の下に住まはせることが出来なくなると、已むなく他の場所に過剰の家族——たとへば若夫婦などを住まはせる家を造らねばならなかつた。そして新らしく一家を構へた若夫婦は自分達の間もなく自分達の間に出来た子供達との生活を支持する爲めに、新らしい土地を開墾せねばならなかつた。溪谷は聚落に屬したが故に、開墾せられる前には聚落のものであつたけれど、それが一たび開墾せられると、其耕作の義務が開墾者の責に歸するものが常であつた。

そこに、しかしながら、記憶しなければならぬ一事があつた。それは開墾に於いても、耕作に於いても、一聚落の民衆は一個の團體となつて共同に働いたことである。だから、嚴密に云へば、一溪谷は一聚落の共有であつた、或地域が或家族の責任區域となり、其耕作を委任されてゐるといふまで、どの家族がどこを持つといふことはなかつた。さうした日には、一つの聚落は一つの家族の延長したもので、いくつの家

「臨時會議」

首長の必要

氏族長即聚落長

族があつても皆血縁が繋がつてゐた。他の言葉で云ひ現はせば、一聚落は一氏族であつた。兄の子よりも自分の子が可愛く、弟の妻よりも自分の妻がいとしいが故に、感情の上から利己的な振舞が現はれ、従つて争ひもあつたであらうが、理窟の上では兎も角も、一氏族は共同して氏族全體の生活を支持したのであつた。彼等は利害を共にしたが故に、固く團結して共同の害敵に當り、又共同の利福を分つた。彼等は利害が同じばかりでなく、血液も同じかつたが故に、其關係は切らうとしても切ることが出来なかつた。彼等の間には、始めの中は定まつた首領といふやうなものがなく、各家族から老人達が集つて来て、其經驗を唯一の資本にして所謂「臨時會議」(Intermittent councils)を開き、決しなければならぬ色々の事を決したのであらう。

けれども溪谷を一單位とする聚落がいくつも、現はれて、それらが互に接觸する機會が殖ゑて来ると、聚落は一人の首長を選んで自分達を扞護してもらはねばならなくなつた。家族は、それらの日には既に母權が衰へて父權が盛んになり、男子の家長によつて支配せられてゐたから、聚落を同じくする各家族の家長達の中から、聲望あり威力ある一人を氏族長とすることにした。氏族長は即ち聚落長でもあつた。氏族の利害と聚落の利害とは相反しなかつた。かうして日本群島や、朝鮮半島には、獨立し

氏の上  
ムラ

マールと  
コウル

村から國へ  
氏上から君  
主へ  
新羅の國家  
は六村から

た小國家——溪谷に沿うて建てられた聚落がいくつも出て来て、手々に自分達の聚落の向上と發展とを圖つてゐたのであつた。古代日本語では、かうした氏族長を「氏の<sup>上</sup>」といひ、かうした聚落を「ムラ」といつた。ムラは「群」の意で、朝鮮語の「弗<sup>(pul)</sup>」、「伐<sup>(pal)</sup>」、「夫里<sup>(puli)</sup>」など同一の語原から出た語である。今日でも朝鮮では、府のことを「<sup>マール</sup>마울」といひ、郡のことを「<sup>コウル</sup>고울」といふが、前者は <sup>マール</sup>ma-pul の約、後者は <sup>コウル</sup>ko-pul の約で、共に「大村」の意に過ぎないが、之を日本語に比較すると、前者がムラと一致し、後者がコホリと一致してゐるので、古代に於いては日鮮語が同一であつたことが知られる。

これらの聚落が發達して小さい「國」となり、聚落長(氏族長)が發達して國君となつたことは、古い傳説史が私達に目に見えるやうに教へるところであつた。『三國史記』に従へば、新羅は辰韓の六村から發達したものであつた。始め兄江の河流に沿うた溪谷に、閔川楊山、突山高墟、背山珍支、茂山大樹、金山加利、明活山高といふ六村があつたが、突山高墟の村長の蘇伐公が、大きな卵から生れた朴居西干を見出し、六村の人々がそれを推戴して王にしたといふ。『魏志』に従へば、辰韓は已祗、不斯、勒耆、難彌離彌凍、冉爰、軍彌、如洪、戸路、州鮮、馬延、優中、斯盧の十二箇國から成立

斯盧

弁韓と馬韓

日本國家の  
搖籃

聚落の形式

し、其大國は四五千家、小國は六七百家を計へたといふから、一溪谷に占據した家屋の数は、少くとも數百戸に上つてゐたといふことは知られる。又此中の斯盧とあるのが後の新羅に發達したものであるとすれば、聚落中の勢力あるものが、他の聚落を統合し、それが遂に國家にまで發達したのだといつても差支あるまい。

弁韓は洛東江に沿うて生成した十二箇の聚落の統一されたものであり、馬韓もまた錦江に沿うて生成した五十餘箇の聚落が、伯濟といふ強力な一聚落の爲めに統一されて現はれた國家であることが知られる。漢魏の時代には日本群島——殊に九州にはかうした聚落が發達して、其數が百餘箇に上つてゐたといはれる。支那の史籍に従へば、日本といふ國家——古代には耶馬臺といつた國家も、矢張り九州の一隅にあつた耶馬臺といふ聚落から發達したやうに思はれる。しかし、支那の史籍は比較的確實であるとしても、私達は悉くそれに憑據する譯には行かない。私達は所謂「文獻歴史」のみが眞の歴史であると信するものでないばかりではなく、寧ろ「遺物歴史」に重きを置かうとするものであるから、私達の選んだ考古學的證據によつて、日本國家の發達の徑路を探らなければならぬ。

聚落の形式は、考古學上からも、文獻學上からも之を知ることとは出来る。文獻學的



對馬

一支  
末盧

奴

投馬

耶馬臺

三箇の小國  
家

に觀れば、紀元三世紀の中葉に於いても、對馬の如きはあつた島國であつたから、土地は嶮岨であり、森林が深くて道路といふ道路もなく、さうした山谷の間に千戸ばかりの聚落が出来てゐたが、勿論良田のあらう筈がなく、民衆は海産物を取つて生活してゐたとある。一支(壹岐)は戸数が三千ばかりあり、田地も稍開けてゐた。末盧(松浦)は四千戸ばかりで、住民は潜水して魚鮫を捕り、伊都(五十述縣)は千戸餘りで、朝鮮から來る使節はそこに駐るのを慣はしとしてゐた。次ぎの奴(隼縣)は二萬餘戸あり、不彌(宇美)は千戸あり、女王國に近づくに従つて次第に殷盛となり、投馬(上妻)は五萬戸を算し、女王のゐる耶馬臺(山門)は七萬戸の上に超えてゐたとある。これで大體、聚落發達の程度を知ることが出来る。

しかし、これらの記載は、九州方面に局限されて居り、それらの日に於ける日本群島の大勢を知るとは出来ない。考古學や、神話學の力を藉りて考へると、紀元前四、三世紀の頃から、群島には多數の小聚落が出来、それらは更に少くとも三箇の小國家に統一されてゆく傾向があつたらしい。三箇の小國家といふのは、今の出雲、日向、大和を中心とした地方で、そこにはどうも政治上、經濟上の大きな中心があつたやうに思はれる。此事は遺物や神話によつて、略確實に證明せられるのであつた。遺物は

# 欠

# 欠

タタラとタ  
リ

辰韓の砂鐵

貝塚いら鐵  
錐

天秤のやうに吊紐が横木の兩端から下り、板を履むとそれが上下して風を起し、風は竹の筒を傳はつて鎔礦爐の方に行く装置になつてゐる。爐には松炭と砂鐵とを混ぜたものが入れてあるから、松炭が火になると砂鐵が鎔けて製煉され、そこに始めて鐵塊が出来ると譯である。タタラは朝鮮語の「脚」を意味する<sup>テリ</sup>타리(Tari)と關係のあるもので、人名には古代にヒメタタライスヒメ、中世に大内多々良氏などがあり、地名には多々羅濱といふ場所が多い。或工學者の研究では、タタラは韃靼と同原であらうといふとであつたが、それは私には承認されない<sup>(二二)</sup>。辰韓(新羅)は漢魏時代から砂鐵を産し、倭や濊と交易をしたのみならず、鐵塊を貨幣にしてゐたといふが、今でも新羅の都であつた慶州附近の川々には、清淺の水に黒い砂鐵が流されてゐるのを見る<sup>(二三)</sup>。辰韓と出雲とは極めて古い時代から交通があつたから、砂鐵の製煉を辰韓から習得したに相違ない。私は曾て弁韓の金海貝塚に近い酒村面の石器時代遺跡から鐵錐<sup>(二四)</sup>を發見したことがあり、また金海貝塚では鐵の渣錐<sup>スラフ</sup>を發見<sup>(二五)</sup>したことがあつて、青銅と殆ど同時に辰韓民衆が鐵器を製造したと思つてゐるが、然らば辰韓はそれをどこから學んだかといへば、恐らく支那を経由することなしに、沙漠北路を通じて直接に彼等の祖先の地から其術を習得したらしい。鐵は朝鮮語では<sup>チヨル</sup>철(chol)であり、蒙古語では<sup>ツムル</sup>tumluであつ

て、兩語が同一語原から派出したことを思はせる。トルコ語では金屬の土を *temir* といひ、「堅い」を意味する *tin* の轉訛であるといはれ、前述の蒙古、朝鮮兩語と同じ系統である。鐵器の名稱には、日本と朝鮮と同語のものが多し。例へば、

國名	品名	國名	品名
朝	鮮	鎌	斧
日	本	iat	tokkui
		riata	tatsuki
國名	品名	鉞	鋸
			sahi

といふ風に、品種は異つても名稱は同源である點が面白いのである。此一點から考へても、出雲の製鐵が辰韓から傳へられたものであることが分り、かうした武器、農具を持つたものが、それらを持たなかつた部族よりも強力であつたことが想像せられる。出雲部族が古代に優秀の地位を占めたのは、全く製鐵の技術によつたのであつた。

出雲附近には多數の古墳が存在し、神話上の傳説地が散在し、殊にオホクニヌシを祭つた大社、コトシロヌシを祀つた美保神社、スサノヲを祀つた熊野神社などがあり、

十月には日本中の神々が悉く大社に集つて、青年男女の爲めに縁結びの會議を開くので、其月には神々が留守であるといふ神無月説話の残つてゐることや、玉造部が長く残つてゐて、國造から朝廷へ毎年玉類を進貢したことや、オホクニヌシといふ神名や、國譲り神話などから考へて、出雲が勢力の中心であつたといふことを疑ふ餘地がない。私達は一々其證據を擧げる煩はしさに堪へないほどである。

(二)日向國家。——神話から觀れば、皇室は日向國から發祥してゐるが、今さうした先入的傳説を捨て、ひたすら考古學上から觀ても、日向地方には大きな勢力中心があつたやうに思はれる。第三次の移住を試みたツングース族——主としてダウル族(日向族)——は、對島海峽を横ぎつて朝鮮半島の西岸から九州の北端に上陸し、其海岸を東南進して、今の日向、大隅地方に植民した。彼等が移住する前、そこには既に先着の民衆が住んでゐたが、彼等は其優秀な精神と、銳利な武器とを以て、先住民衆を次第に壓迫驅逐して、東海岸の沿海平地に政治、經濟上の中心地を出現せしめた。それは『魏志』に現はれてゐる呼邑國——今の兒湯地方であつて、半島の斯處が新羅に、伯濟が百濟に發達したやうに、呼邑は後に兒湯縣に發達して、大きな國家形成の一要素となつた。兒湯地方には多數の古墳群があつて、天孫民族の首長たる皇室の祖先の

湯附近の  
古墳群

古代九州の  
聚落

大和國家

傳説陵墓が其中に少からず發見せられる。舊高千穂庄だけでも古墳の数が五十五基<sup>(三二)</sup>を計上せられるから、九州の東海岸全部では枚舉することが出来ないほど多數に上らう。兒湯附近には、神話を事實化したやうな傳説地が數多くあるが、中には事實の神話化されたものも若干あつたやうに考へられ、此邊りに一つの勢力中心地を假定することなしに、古代の歴史事實の進化の経路——特に國家發達の経路を推論することが出来ないやうに私を信ぜしめる。

漢魏時代に於ける九州の聚落の發達の著しかつたことは、文獻の十分に證明するところであり、また遺物も十分に立證するところであつた。同時代の支那の史籍に従へば、邪馬臺といふ一大勢力中心地があつたけれど、これは種族を異にした倭人(印度支那族)の統治の中心地であつたから、たとへ其統治者がツングース族であつたとしても、別にそれを考へなければならぬ。

(三)大和國家。——出雲民衆は日本海岸を東進して、丹後地方から畿内に入り、山城、河内、大和といふ風に、淀川、木津川、大和川(古代には大阪灣に注いでゐた)の流域に植民を試みたが、其中、三方を山に圍ませ、一方が河川によつて下流地方に通じてゐる大和平原に勢力の中心地が出来た。ツングース族は石器時代に於いて、既に

生駒山脈

河内平野と  
大和川

大和平原に侵入してゐたが、そこが物資に豊かであり、氣候もよくて、生活に適した平安の地であることが知れ渡つて、生活の安易と向上とを要求する有爲の出雲民衆は、或は群をなし、或は單獨でどしどしと平原に入り込んだのであつた。

大和と河内とは生駒山脈、葛城山脈によつて、東と西とに兩分せられてゐるけれど、それらの山脈は超えることの出来ないほどの高度を持つてゐる譯でもなく、水量の多い大和川が緩傾斜を以て兩地を連接してゐたので、河川の遡航に慣れた古代民衆に在つては、大和と下流地方との交通はさほど困難ではなかつた。殊に河内の平野はそれらの日には大方沼澤沮洳の地であり、大和川は生駒山脈の下を流れてゐたから、水路を取つても、陸路を取つても、大和に行くことは容易であつた。出雲民衆の多數が大和、河内の兩平野に住居を定めた頃には、既に農業生活の時代に入つてゐて、彼等は、大和川と淀川との沖積層上に米を作つて、其生活の資源を得ることに努めた。彼等の聚落はこゝに、かしくにも生成して、兩河の流域は殆どそれによつて連絡せられるまでになつた。兩河を下流から上流へ溯り終せると、一は山城であり、他は大和である。これらの二つの平原には、當時の民衆の聚落としての理想に適つた地點がいづれにもあつたが、其中廣潤な大和平野が選ばれて、誰れ定めるともなく、そこには自らな大

聚落が現はれたのであつた。

大和の地名は、アイヌ語の「栗池」を意味する *Yama-ko* から起つたもので、その山間には多くの池があり、池の畔には栗の木が生えてゐて、多量の食物を供給したといはれてゐるけれど、大和盆地からは舊アイヌの遺物の發見される度合が、他の地方よりも遙かに少いのであつて、そこからは寧ろ原日本人に屬する彌生式の土石器が發見せられるのであつた。さうした點から考へると、その地名は當然ツングース系の語で解釋せらるべきであり、従つて「山地」を意味する古代日本語 *Yama-tai* をそれに擬することが出来る。私は此地方が早くから原日本人に侵入せられ、狩獵せられ、續いて開墾せられて、多くの聚落が形成せられるやうになつたと思ふ。

さうした聚落の中の大聚落が、後には帝都となり、盤余、葛城、藤原、飛鳥、平城、平安、東京と傳統の絲筋を曳いて進歩發達したのであつた。かるが故に、私の假定した三つの勢力中心の中では、大和が最も重を措かるべきもので、そこには既に有史以前に於いて、出雲、日向と同じく小國家が成立して居り、それが更に他の二つの否、それよりもつと多くの小國家を統一して、日本帝國を建設するに至つたのであつた。以上述べて來た三箇の小國家以外に、今一つの小國家が九州の一角に立つてゐた。

大和の名は  
アイヌ語の

日本語「ヤ  
マト」

聚落から大  
都市へ

女王國「耶  
馬臺」

女王國の位  
置

『魏志』の解  
釋

古代人の河  
川利用

それが即ち「耶馬臺」であつた、「魏志」には女王國として述べられてゐる。此書の記すところに従へば、朝鮮半島の南端である狗邪(伽耶)から千里の海を渡ると對馬國があり、更に千里の海を超えと一支(壹岐)國があり、また千里の航海を續けると末盧(松浦)に達する。そこから東南に向つて五百里ほど陸行すると伊都(怡土)國に達する。そこから百里の東南に當つて奴(儼)國があり、百里の東に不彌(宇美)國があり、水行二十四日南に向つて進めば投馬(妻)國に達し、更に南進して水行十日、陸行一月を費すと耶馬臺(山門)に達する。これが女王の都である。此記述は甚だ不正確で、昔から學者の間に色々議論があるけれども、私はそれらの地名を前掲の如く今日知られてゐる九州の土地に擬することにした。私の此擬定に従ふと、太宰府の北方に當る宇美から、今日の石堂川を溯れるだけ溯つて二日市邊に出で、それから筑後川の支流を下つて赤川のあたりで本流に入り、一旦下航して三浦の附近から支流である甘木川を溯航し、上妻(投馬)から矢部川を下航して津島のあたりで上陸したものと見れば、方位も距離も略理解が出来る。古代人が河川を旅行に利川したことは驚くべきことで、出来るだけ小舟で溯航し、今日ではとても舟の通はぬやうな場所でも、曳船でそれを通過したのであつた。かうして溯れるだけ溯つて分水嶺に達すると、一氣にそれを越え

## 女王國の政治

て反對側の溪流を下航するのが、彼等の取つた航行法であつた。<sup>(二九)</sup> 統治については簡単な記述しかなく、しかもそれは既に前に述べたが、尙ほ念の爲めに重複を厭はず記述すると、それらの國には各王があつて、それらの王は皆女王國に統屬してゐる。女王は卑彌呼(日女子)<sup>(三〇)</sup>といひ、鬼道に事へて能く衆を惑はし、年頃になつても婿を取らず、弟に國政を助けさしてゐた。一體に争訟は少いが、法を犯せばそれら所罰せられ、輕罪は妻子を没し、重罪は族滅した。社會には階級があつて相臣服した。租税は徴收せられ、交易は國々の間に行はれた。其監督は大倭が之を行つた。女王國の北には一大率が置いてあつて諸國を檢察したので、諸國ではそれを忌憚した。——これらの記述から見ると、聚落にはそれら首長があり、其首長を女王が統制してゐたやうに思はれる。女王は婦人のシャマンであつて、幼稚な宗教的觀念から民衆が自分を尊敬したのに附込んで、段々と自分の勢威を張つたやうに思はれる。

## 肥筑地方の特殊古墳

筑後川、矢部川、菊池川、白川、緑川、球磨川によつて造られた沖積平野には、日本その他の場所のそれと異つた古墳があつて、いくらが漢族の色彩を帯んでゐるところを見ると、倭國と帶方郡との間には交通が開かれ、漢族若しくは漢族化された帶方民衆が末盧方面からそれらの地方に入り込んでゐたやうにも思はれる。

## 神籠石

## 女山

## 四つの大聚落

## 「大和時代」

又九州の一部には「神籠石<sup>(三一)</sup>」といはれる一種の石造物があつて、その文化が出雲民衆、大和民衆のそれと可也に大きな差のあつたことを示してゐる。邪馬臺の故址の擬定せられる筑後の山門——『日本書紀』神功紀の所謂「山門縣」——は今日は山門郡清水村に屬してゐるが、其清水觀音堂の北方、山谷數町の間<sup>(三二)</sup>に女山の神籠石といはれる古代の遺跡がある。國史に精通した建築學者は之を山城の跡と斷じ、歴史學者は之を聖域の址と斷じ、其間に見解の差はあるけれども、いづれにしてもそれを邪馬臺の治址と見るには差支ない。女山の地名の起原についても、其地方の人々は、それが「女王山」の約まつたものであると主張してゐる。『魏志』に「城柵嚴設」といふ記述があるから、之を山城と見做すに異論あるべき筈がなく、同時に又聖域の址と見ても差支はない。かうして少くとも四つの大聚落が群島の内にあつたが、それらは或は併合せられ、或は擊滅せられて、遂に一番優勢であつた大和の聚落に統一されてしまつたのである。さうした統一によつて民衆に國民的結合が出来てから、佛教文化が輸入せられて固有文化の顛覆を見るに至るまでを、私は「大和時代」と名づけて、「飛鳥寧樂時代」に先行せしめようと思ふ。それは兎も角も、前述の如き國家の地理的發達を、社會的、歴史的發達と比較して見ることは、是非とも私達の試みなければならぬところである。次

ぎの一節は即ちそれが爲めに設けられる。

- (一) 本書、第三章第三節註(一〇)を参照せられたい。
- (11) Deniker: "The Races of Man," pp. 244-251.
- (12) Dr. Sigmund Freud: "Totem and Taboo," pp. 1-23.
- (四) Hearn: "Japan, An Attempt at Interpretation," pp. 65-86.
- (五) 『三國史記』卷第一、『新羅本記』第一参照。
- (六) 『魏志』卷三十、東夷傳参照。
- (七・八) 『三國史記』及び『魏志』参照。
- (九) 『魏志』卷三十、東夷傳参照。
- (一〇) 同上、倭についての記述参照。倭人傳については既に多くの學者が其研究を發表してゐる。橋本増吉氏『耶馬臺國及び卑彌呼に就て』、『史學雜誌』第二十一篇、第十、十一、十二號連載)、文學博士内藤湖南氏『卑彌呼考』、『藝文』第一年第四號)等は其一斑である。
- (一一) 山田新一郎氏『神代史と中國嶺山』、『歴史地理』第二十九卷、第三、五、六號、及び第三十卷、第一、二號)参照。
- (一二) 故工學博士渡邊波氏の意見でそれがあつたといふことを私は第三者から聞いた。
- (一三—一五) 大正八年の朝鮮研究旅行に於いて、私はかうした材料を或は自分の手に入れ、或は調査の便利を與へられ、或は觀察することが出来た。慶州から佛國寺に至る沿道の小川に於いても、私は度々砂鐵の流れてゐるのを見た。貨幣にしてゐたと思はれる鐵塊は、金州

半島、平壤、慶州邊に於いて多く發見せられる。

- (一六) 金澤文學博士『言語の研究と古代の文化』参照。
- (一七) 雲伯地方に於いては今日と雖も、農閑期には、農民は砂鐵を採掘してこれを製鍊する。古代の鐵の造り方は、今日とは大分趣きを異にしてゐて、始めに先づ山の麓を掘つて小川を作り、これから山の上を崩すと、流れに従つて鐵と土とが流下し、兩者は自ら二つに分れる。そこで黒い土だけを採つてこれを坩堝に盛り、蹈躑でこれを熔化する、と浮いて来るものがある。それが俗に「カラミ」といはれるもので、即ち渣滓である。カラミを取り去つて坩堝の分量を推し測り、坩堝に穴を穿けてそこから鐵を流出せしめる。流出した鐵は箕のやうな形した、中を土で塗つたものに承けられる。これが即ちツク(生鐵、銑鐵)で、鍋釜に鑄られるものである、その一名を鍋鐵ともいふ。朝鮮では之を水鐵(介殼)或は鍋鐵(早劍)といつてゐる。此銑鐵を更に七日ほど鑄かすと、銑は流れ去つて熟鐵が底に残る。これをケラ(鑄)といふ。ケラを再三銷拍すると熟鐵になる。ケラになつてもそれを取り出さず、十一日間鑄かして置くと、色爽かに質硬いものが出来る。即ちハガネ(鋼)である。ハガネは刃物の金の義で、再三銷拍すると、立派な刃物の刃部となる。昔から熟鐵は出雲、播磨を上とし、備後、備中、奥州の仙臺、藝州の廣島を其次とし、伯耆、美作それに次ぎ、石見、日向のものは更に一段下り、但馬のものは最も下等だといはれる。此中仙臺と日向とを除けば、一様にこれを雲伯地方といふ一つのローカリチイに纏めると出来る。此工業はたしかに古代出雲民衆の遺業である。

(二八)『古語拾遺』参照。出雲の玉造川の兩岸に、東忌部、西忌部といふ氏族が聚落を作つてゐた。忌部の祖先である太玉命の率ゐてゐた櫛赤玉命が此忌部らの祖先だといはれる。此聚落には玉造りが住んでゐて、玉と玉器とを作つて、貢物に添へてそれらを朝廷に奉獻した。後世、玉作連、玉祖宿禰といはれたのは、此玉造の末裔である。これらの氏族は、諸國に散在してゐる玉造部の工人を支配してゐた。大化の革新の際、これらの支配権は停止されたけれども、出雲の玉造のみは諸國のそれが減んだ後も、依然として其製造を續け、國造から朝廷に進獻した。其年類は赤水晶八、白水晶一六、青石玉(出雲石)四四、合計六十八個であつた。今日、山陰地方では、出雲石で造つた曲玉、管玉などが發掘され、又水晶や瑪瑙のものも出る。出雲石は濃綠色を呈し、稍、硬質で、玉として造るのに適當な原料である。これら發掘品の中には、出雲の玉造りの造つたものが多からう。玉造川附近の地層は、石英粗面岩から成つて居り、其岩層中には數條の玉髓質瑪瑙の細脈を通じてゐる。此岩層は數箇所に於いて露出し、中には水晶を交へてゐる部分もある。クララ道、大谷、ヨコヤ掘などの露出岩はクラヴェル状をなし、其下にはクラヴェルと粘土とが夾雜し、粘土の中から玉髓瑪瑙が掘出される。大谷から西玉造温泉の附近では、青色瑪瑙が多く採掘されるが、中には紅色、綠色のものもある。今日でも、こゝでは瑪瑙、水晶などで色々の玉器を作つて販賣してゐる。

(二九)別に日向民衆を *Dine* 族とする的確の證據はないが、扶餘が棄離から出たことが明らかであるから、扶餘から出て來た諸部族は矢張ダウルから系統を引いたものと見てよからう。

(二〇)呼色を兒湯とすることには異説が多いが、兒湯が日向地方の勢力の中心であつた、とは争へない事實である。

(二一)中村徳五郎氏『日本開闢史』参照。此書は科學的に見れば、立論の點に於いて不満足なところが多いけれども、取扱はれた材料についての記述は信憑されるであらう。

(二二)大和川が堺に導かれたのは、元祿年代のもであつて、其以前は大坂城東に於いて淀川に合流してゐた。すつと以前、建國の頃には大坂城東は海水が灣入し、幅の廣い大和川が生駒山脈の下を流れて、柏原の邊から今日と同じ河身を走つてゐたと思はれる。

(二三) Chamberlain: "The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan viewed in the Light of Aino Studies," p. 70.

(二四)日本語 *ya* は、琉球語 *moi* と同じく、琉球語 *moi* は朝鮮語 *ma-jin* と同原である。朝鮮語 *ma* は「處」を意味し、耶馬臺の「臺」に一致し、轉訛して *ma* となつたものが耶馬臺の「堆」と一致してゐる。

(二五)今日の名護屋附近。

(二六)今日の福岡市が奴國の後身である。

(二七)筑後の妻と見る。日向にも妻神社があつて、日向と筑後との古代交通が思ひやられる。

(二八)筑後と肥後との國境近くにある、山門郡清水村の邊り。

(二九)私は『魏志』の水行を海洋航行でなく、河川航行であると斷ずる。さうした斷定は、



私の古代船舶研究の結果である。

(三〇) ヒミコといふやうな名前、諸國の官名などから觀て、倭人の統治者がツングースであつたといふとは分る。

(三一) 大倭は倭と異つて、これが大和朝廷のやうに思はれもするけれど、それは女王國のことらしい。

(三二) 倭を日本人とする學者があるけれども、私達ワラル・アルタイツク系言語を用ひてゐるツングース族に在つては、「倭」(モ、或は、ミ)といふやうなモノシラビツクな國名をつける筈がない。だから、當然、倭人はモノシラビツクな言語を用ひた印度支那人に相違ない。

(三三) 神籠石のことは學者の間はまだ定説がない。文學博士白鳥庫吉氏『所謂神籠石に就いて』(『史學雜誌』第二八卷、第八號)、工學博士關野貞氏『所謂神籠石は山城址なり』(『考古學雜誌』第四卷、五一頁)、及び文學博士喜田貞吉氏『神籠石は山城にあらざるべし』(同上、八〇頁)等参照。

(三四) 關野博士『所謂神籠石は山城址なり』参照。

(三五) 文學博士大類伸氏の説では、聖域でもあり、また城址でもあるやうに神籠石を見られた。

### 第三節 皇室の勃興

人類の群團生活

タイラアも曾て考へたやうに、人類は決して銘々に勝手なことを考へて、競争する

群團を生ずる動機

やうな群團としては生活を續けることが出来なかつた。自分の都合を圖ると共に、他人にも都合のよいやうな働きをして、共に向上の一路を歩んで來た筈であつた。群團は色々の動機から、色々の形に於いて造られたに相違なかつた。第一に考へられるのは、結婚の規則と親子の愛情とに従つて、懇ろに且つ固く結びつけられた家族であつた。家族を離れて第二に考へられるのは、狩獵或は漁撈の目的を持つた者同志が、山林或は海洋に於いて、一時的に結ぶところの群團であつた。第三には牧畜の群團、第四には農耕の群團、第五には工作の群團、第六には交易の群團があり得ると考へられ、第七には宗教の群團が結ばれ得るといふことが假定せられる。かうした諸の群團が或場所、或種族に起り得るとすれば、これらは又他の場所、他の種族にも起り得るものと考へなければならぬ。二つ以上の群團があつて、類似の志向を持ち、類似の方針を探り、類似の行動をはたしたならば、そこに互に自分達の爲めに計る必要を認めなければならぬであらう。自分達の利益の爲めに計る時、そこに二つの道が分れる。一つは競争であり、一つは互讓であつた。互讓の如きは餘程理智の進んだものでなければ持つことの出来ぬものであつて、未開時代の人類が選んだのは競争への道であらう。競争とは自分達の爲めに他を壓する目的を實現する爲めの手段であり、其目的が達せられ

ない時は、敵の爲めに目的を達せられた時であつた。壓服の目的を達する爲めに、群團は様々の手段を取つて、自分達の力を有効に協せる工夫を運らした。首長の存在はかうして現はれたのであつた。

首長の推戴  
肉體よりは  
精神

既に、競争が二個以上の群團の間にかかるものであるとすれば、これは家族と家族との間にも起らねばならなかつた。漁獵團、牧畜團、農耕團、工作團、交易團、宗教團の間にも起らねばならなかつた。各の群團は自分達を勝たしめる便宜の爲めに、自分達を扞護する優秀者を其首長としなければならなかつた。漁獵團は力の強い者を選んで猛獸大魚と戦はしめる必要があるが、牧畜團や農業團に在つては、腕力の強さよりも經驗の深さを必要とした。工作團、交易團は尙更のことであり、宗教團は殊に肉體よりも精神に重きを措いたが故に、腕力といふことは重要な條件でなく、能力が必須の條件とせられた。かうして時代が進めば進むほど、暴力は社會に對する價値を減じ、知力が反對にそれを増して來たのであつた。だから、どんな自然民衆の間に於いても、首長には大方年を取つた、經驗を積んだ老人がなつてゐる。暴力を以てすれば、人類は大抵の動物に敗られて、其人類としての地歩を占めることが出来なかつたのであるが、知力を以て暴力のすぐれた動物を征服し得たが爲め、直立の姿勢を持つた人

### 盛装のシャマン

圖はシベリヤに於るシャマンが盛装して、太鼓を持つた姿である。ツングースとサモイェッドとは、シャマンの神憑り形式が少し異ふけれども、大體に於いては類似してゐる。此寫眞はイェニッセイのシャマンとして有名なボクコブシュカ(Bokobushka)である。神憑りをする時には、初め齋服を着て、小聲で歌を唱へ、次ぎに大聲で歌ひ、それから卜占を行つて齋服を脱ぎ、今度は大聲で悪い精靈と問答する。其間に悪い精靈は落ちてしまつて、病人は病氣が癒り、死人は死から甦生する。太鼓はシャマニズムを行ふ際に、歌に合はせて搦たれる。日本の降神術(spiritism)と手續きが甚だ似てゐて、シベリヤのシャマニズムと、日本の降神術との間には、土俗學的差異を認めることが出来ない。それ故に、私は原始神道をシャマニズムに結びつけて考へると、それを理解する捷徑であると信じてゐる。



ひつりてきへるも、そのが無難なる其語りなるも言してゐる。

差異が臨むるころの出来は、その姑に、其の風故轉産が「マニスマ」に語  
 附てゐる、その「マニスマ」は、日本の轉産の間の、土俗學の  
 一類に、類に合はせて併せられる。日本の轉産(Shirishaim)の手續を其の  
 「麻人の除除」を説き、其人の其の主張する。太鼓の「マニスマ」は其  
 類を、今更に大體で羅の辭彙も問答する。其間に羅の辭彙が著せられた  
 著し、小筆で類を即へ、夫れの大體で類を、その「マニスマ」の古の序の  
 「マニスマ」(Bokkoshu)である。轉産のする類に、時と處に  
 大體に於いて同類してゐる。此處に「マニスマ」の「マニスマ」の序の  
 「マニスマ」の序の「マニスマ」の序の「マニスマ」の序の「マニスマ」の序の  
 「マニスマ」の序の「マニスマ」の序の「マニスマ」の序の「マニスマ」の序の

盤装の「マニスマ」

腕よりは頭

ギリヤーク  
の靈魂觀

シヤマンの  
靈魂

類に發達することが出来たのであつた。だから、人類が暴力よりも知力を重んじ始めたのは、餘程遠い昔であらねばならなかつた。

かう觀て來ると、群團間の競争の勝利は、腕ではなくて、頭であつた筈である。原始民衆は一切の抽象觀念を持つことが出来ず、すべてを具體化しなければ理解が出来なかつたが故に、此頭の働き——知力を抽象的に理解することが出来ず、優秀な頭腦の所有者に對しては、一般民衆と異つた或物を持つてゐるといふ風に解したに相違ない。たとへばギリヤーク(Gilyak)の如きは、普通の人は一つしか靈魂を持つてゐないが、富んでゐる人は二つの靈魂を持つて居り、巫者の如きはそれを四つも持つてゐる。巫者の靈魂の中、一つは山から、他は海から、も一つ外のは空から、最後の一つは下界から受けたものだ。或貧乏人の子は年僅かに十二歳であるのに、靈魂を二つも持つてゐたので、巫者になるやうに人々から勧められた。これらの靈魂の外、人々は皆補助的靈魂を持つてゐるが、それは卵のやうなもので、主要な靈魂の中に宿つてゐる。人が夢を見たりするのは、皆此補助的靈魂の仕業であるといふ風に考へてゐる。<sup>(三)</sup>ギリヤークの此考へは、即ち原始民衆が具體的に知力の優れたものを觀るといふことの證明であつた。

年齢よりも  
知力

男子家長制度が発見した後、老人がよく首長の地位を捷ち得たが、大きな聚落に於いてはそれが幾人もあつて、どれが首長になるかといふ問題が起つた筈である。此問題を解決したものは、年齢よりも、経験よりも、主として靈魂の數、即ち知力であつたに相違ない。かうして知力の優秀が、首長の資格の第一條件であつた。

首長は皆祭  
祀者

原始民衆の首長の任務には、皆一種の宗教的儀式の執行が計へられてゐる。中部オーストラリアのトーテム團に在つては、其首長は皆インチウマを執り行ふ時、其指導者となるのが常である。<sup>(三)</sup>東アフリカのバンツ族の首長は、雨請ひのマジックが重要な任務の一つとなつてゐる。<sup>(四)</sup>例を我邦に取つて云へば、かの『日本書紀』に現はれてゐるオホナムチが、スクナヒコナと力を協せて天下を經營し、民衆と家畜との爲めに醫療の方法を考へ、又鳥獸や昆蟲の禍害を攘ふ爲めに禁厭の方法を定めたといふが如きは、つまり此首長の任務の一つにマジックが重い地位を占めてゐたといふことを裏書するものであつた。かうした任務は、メキシコに於いても、メラネジャに於いても、ポリネジャに於いても、皆首長或は王の負擔してゐるところである。否、首長、或は君主は、此マジック執行者から進化して來た地位であるといへるかも知れない。それについて、或人類學者は簡単に述べてゐる。

オホナムチ

政治と宗教  
との起原

「多數の人類學者のいふ所に従へば、原始民衆のマジシャンは自分の偉力を利用して、王並びに祭祀長の位地を占めた。多くの場合に於いて、祭祀長は神の化身だと考へられてゐた。しかし、間もなく、王は彼れの臣屬の一人に祭祀長としての權力を代理せしめた。それは正しく權謀であつて、民衆の智恵が進んで來ると、祭祀者のマジックが常に必ず成功するものでないことを觀破するからであつた。かうして王は恥辱を臣僚の一人に塗りつけて、自分の聲望の失墜を避けた。マジックは常に必ず效驗があるものではなかつた。ちやうど王がマジシャン即ち祭祀長としての權力を、其臣下のマジシャンに代理せしめたやうに、祭祀者はまた其責任を神に歸して、無智の民衆に、雨其他すべて求めるところのものを神に請はしめるに至つた。これが祈禱の初めである。」

三つの國家  
起原

いみじくも簡単に述べられたものだ！ 國家學者が國家の起原として假定してゐる契約説は夢に近く、征服説は盾の半面であるけれど、神權説はかうした基礎の上に築かれた學説であつて、一番正しく確からしく私には思はれる。どんな國家の發達も略、同様の徑路を踏むことは私も認めるけれど、そこに少しづつ、の差異がなければならなかつた。そして其少しづつ、の差異こそは、實は私達歴史家の究めなければならぬ大切

の重點である。私の考へでは、日本は日本としての特殊の發達の徑路を取つてゐた筈である。

聚落は家族の集合

前にも説き來つた如く、日本群島への移住者は、こゝに農業時代を迎へて其生活様式を改善し、漂泊生活から次第に定着生活に移り、私の所謂「溪谷式聚落」を諸所の溪谷に出現した<sup>(六)</sup>。地理的聚落はそれを社會的に觀れば、いくつもの家族の集合であつた。各家族は多くの場合に於いて、血液を同じくし、祖先を同じくしたが故に、一聚落は云はゞ一氏族群であつた。各家族には家族長があつたやうに、各氏族には氏族長があつた。氏族長は即ち聚落長であつた。聚落長は氏族の長であると同時に、また自分の家族長でもあつた。家族長が家族を支配するやうに、氏族長は自己の氏族に屬する聚落の住民を支配した<sup>(七)</sup>。かうした支配力は單に行政の側面ばかりではなく、むしろ重きを宗教的側面に於いてゐた。

聚落長は氏族長

トートテム信仰

思ふに、非常に古い時代に於いては、各氏族は皆それぐのトートテムを信じてゐた。白菟を信じ、蟻を信じ、鹿を信じ、熊を信じ、蛇を信じてゐた。トートテムの信仰はタブーを生じ、タブーと同時に祭祀を生じ、呪文を生じ、マジックを生じた。さうしたマジックは個人の爲めに行はれるのではなくて、氏族全體の爲め、トートテム團全體の爲め

マジック

マジシャンの地位の高揚

に行はれるのであつた。マジックの爲めに、風害<sup>(八)</sup>、水害<sup>(九)</sup>、蟲害<sup>(一〇)</sup>は封じられ、其結果、其聚落の狩獵もまた成功して、マジックの執行者たる聚落長の聲望は高まり、聲望は更に威力を積成して、彼れの前には頭を擡げ得るものがないやうになつた。彼れは時に其不思議の魅力を以て悪魔を驅除し、病める妻女を健康に回し、死んだ子供を生命に復した。妻の夫、子の親達は、彼れを當然生命の支持者、所有者と信じ敬つたであらう。かうしてマジシャンたる聚落長の地位と富力とは次第に高まつて行つた。彼れは遂には「人」ではなくて、「人」の形を具へた「神」<sup>(一一)</sup>である、「神の化身」<sup>(一二)</sup>であるといふやうな考へを民衆に懐かしめるに至つた。彼れが何故さうした偉力を持つてゐるかについて、民衆が考へる時、そこに説話が湧き、傳説が流れた。さうした説話、傳説の中、最も普遍性を持ち、最も妥當性を持つたものが、最も早く、且つ最も汎く分布して、其聚落は勿論それ以外の民衆にも力を扶植した。天降説話<sup>(一三)</sup>、太陽神話<sup>(一四)</sup>はどんなに力づよい、幅廣い、足早い流傳と播布とを見たであらう。天と太陽とは一致してゐたが故に、天から降つた神人と、太陽の血を傳へた末裔とは、原始民衆の頭腦の中に一致して、そこにさうした太陽トートテム<sup>(一五)</sup>の首長を廻つて、一種の強力な宗教的の渴仰と崇拜とが起つた。他の言葉で云ひ現はせば、天から降つた太陽の末孫だといひ傳へられる

太陽トートテム

マジックの偉力を人よりも餘計に持ったトーテム長が、民衆を畏怖せしめ、信頼せしめて、いつの間にか自己のトーテム團以外にも勢圏を擴めて、行政的にも、マジック宗教的にも一聚落の首長となるやうな日が來た。かうした太陽トーテムの痕跡は、日本のみならず、高句驪(コウクリ)にも、百濟(ハクセ)にも、新羅(シンラ)にも残つてゐて、彼等が其故郷に於いて既に有つてゐた信仰のやうに思はれる。またこれらの國々に於いては、王は宗教上並びに行政上の首長であつて、政教がそれらの日に一致してゐたことを示してゐる。

新羅國王の第二代は次次雄と云ひ、それに「慈充」といふ漢字をも宛てるから、文字は單に符號フオホチカライ的に用ひられたゞけで、本來は「巫」を意味する新羅語で、民衆は祭祀を尙んだ結果巫を尊重し、遂にそれが尊長を呼ぶ名詞となつたのである。(一九)一時、新らしい史學研究が鬱然として我邦に起つた時、此次々雄は日本のスサノヲに當るもので、同時にシャマンとも同原であらうといふやうな説が大分行はれてゐた。(二〇)シャマンと次々雄とは同義には相違ないが、同原か否かは分らない。いづれにしてもマジシャンから君主へ首長が發達して行つたことは明らかであるが、それらは自分で首長になつたか、民衆から首長に推されたか、問題である。日本では「君を立てる」といふが、此「立てる」といふ中には、選舉の意味が含まつてゐるやうである。さうした性質のもので、

北東アジヤ  
の太陽ト  
テム的痕跡

次々雄とシ  
ヤマン

立君の性質

神道の還元

ツアブリカ  
のシャマン  
研究

組織

資格

原始國王があつたことは、朝鮮史の上でも、いくらかづ、痕跡を残してゐる。恐らくは所謂「持ちつ持たれつ」の状態であつたのであらう。かうした原始状態を知らうと思はゞ、現在の祭祀と其執行者とを原始の状態に還元して考へて見なければならぬ。さうするには神道と起原を同じうし、しかも尙ほ原形を殆ど失はないでゐるシャマニズム(Shamanism)を研究し、それを執行するところのシャマン(Shaman)の資格、任務、社會的地位といふやうなものを知り、それらを口碑史の記述と比較して見るのが一番早道でもあり、また一番正確でもある。

ツアブリカ(二二)のシャマニズム研究は典據的であるが故に、私はこゝに彼女に従つて、シャマンの性質を究めることにする。あらゆる原始宗教に於けるが如く、シャマニズムに於いても、巫覡(ニニ)は信仰や傳説の基調であるから、其任務は極めて重要なものである。然らばシャマンの組織はどうかといふと、部族の異なるに従つて少しづつ、異つてゐる。或場合には此地位は世襲的であるが、しかし、いつ如何なる場合にも、超自然的の才能がシャマンになるのに必要な資格だとされてゐる。舊シベリヤ族に比べて、一般に文化の程度の高い新シベリヤ族の間では、シャマンの資格は舊シベリヤ族のそれよりも高い條件

家族的と職業的

を含んでゐる。一體、家族的シヤマンは舊シベリヤ族の間に多く、職業的シヤマンは新シベリヤ族の間に多いが、ボゴラスの調査したところに依ると、家族的シヤマンを重んずる風は、チュクチの外、大抵の部族の間では次第に消滅し、其代りに個人的シヤマンが段々起りつゝ、あるやうな傾向が見える。かうした個人的シヤマン、即ち家族ではない、職業的なシヤマンは、チュクチの間では、精靈使ひ(enenilit)と呼ばれてゐる。enenilitといふ語は、シヤマン的精靈といふ意味を有つてゐる。

ヒステリー  
北極憂鬱病

シヤマンの仕事の底に横はつてゐるのは、ヒステリー——それを或人々は北極憂鬱病(Arctic hysteria)といつてゐるもの——であるけれど、シヤマンのヒステリーは普通の患者のそれとは異つて、烈しい発作の起つた儀式中にも、自分を制してゆくだけの偉大な力を持つてゐる。立派なシヤマンは、異常な、多くの性質を持たねばならないが、中でも重要なのは、感覺と知識によつて馴致した、周囲の人々を感化するところの力である。政治犯人としてシベリヤに十九年間を送り、殊に久しくヤクト人の間に住んで、其言語、習慣に熟達したワスラウ・シイロスチュウスキイは、或度合までツングース、ユーカギル、チュクチをも研究したが、彼れは屢々コリマ(Kolyma)地方に於いて、年の若い、熟練したシヤマンに逢つたが、其シヤマンはどんなむづかしい

感化力

シヤマンの  
優劣

烈しい神憑り

シヤマンの用品でも立派にやり終せた。棒を呑んだり、赤熱した石炭を食つたり、硝子の破片を頬張つたり、口から貨幣を吐き出したり、また同時に異つた場所にあるたりすることが出来た。それにも拘はらず、彼れは民衆から第一流のシヤマンとは考へられてゐなかつた。反對に、



シヤマンの用品でも立派にやり終せた。

さうした用品は出来ないけれども、神憑りの烈しい、年寄りの婦人のシヤマンが聲望高く、人々の間に持て囃されてゐたといふ話を語つてゐる。疑ひもなくシヤマンの態度が、周囲の人々に大きな感化を與へる。いつ、どうして、其靈感的發作——動もすれば狂氣のやうになる發作を起すべきか、又日常生活の間にはどうして其尊嚴な態度を持つべきか。それらをシヤマンは知つてゐなければならなかつた。



シャマンの  
地位と能力

太鼓

チュクチ

シャマンの  
幕僚

こゝに私が語つてゐるシャマンの仕事の中には、コリヤクや、アジャ種のエスキモーや、チュクチや、ユーカギルの家族的シャマンは含んでゐない。これらのシャマンの地位や能力は甚だ低級で、次の記述の中に其仕事の様子が分る。——各家族はそれぞれ一個以上の太鼓を持つてゐるが、特別な時期の外はそれを打つことが禁じられてゐる。即ちそれを打つ時には、様々の節の歌に合はせなくてはならない。さうした場合には、家族の一人がシャマンの態度を真似て、「精霊」に通じようとしたり、時には豫言をしたりすることもあるが、それに對して一同は何等の注意をも拂はない。家族的シャマンや職業的シャマンの仕事は、夜間奥まつた室で行はれるのが常であるから、かうした真似は晝間に入口に近い室で行はれる。

成年のチュクチは、折々、特に冬季に於いては、太鼓を取り上げて、しばらくの間それを寢室の暖い床の中で打つことがある。其時は燈をつけることもあるが、また黒闇の中で打つこともある。しかし、いづれにしても、太鼓の音に合はして歌を唱ふだけのことはしなければならぬ。

これらの事實に依つて観ると、家族の一員は或儀式の行はれてゐる間太鼓を打つ義務を持ち、また時々神懸りによつて自分自身を娛ましめるのであるが、餘處目にはそ

れがちやうど、儀式を離れて、たゞ太鼓を拊つて娛しんでゐるやうに見える。勿論、私達はかうした家族の一員をシャマンと云ふことは出来ないが、シャマンを模した儀式の主と云ふことは出来る。私達がシャマンと云ふことの出来るのは、たゞ特殊の熟練と任務を持つてゐる個人のみである、それらの人々は系圖がシャマンであらうとあるまいと、そんなことは少しも構はぬ。

シャマンは  
滅びつゝあ  
り  
老人とシャ  
マン  
カムチャダ  
ル

然るにコリヤーク、アジャ種のエスキモー、チュクチ、ユーカギルなど——舊シベリヤ族——の間には、職業的シャマンがある。ヨヘルソンは千九百年から千九百一年まで、二年間コリヤーク族の間に滞在してゐたが、其間に彼れは只だ二人のシャマンに逢つたのみであつた。しかも其二人は共に年若の男で、格別な尊敬を受けてゐるやうにも見えなかつた。これらの事實は、所詮、シャマンの滅びつゝあることを示すものであるが、しかし全く存在しないのではない。クラッシュニニコフ<sup>(111)</sup> (Krasheninnikoff) は十八世紀の中頃、カムチャダルの住んでゐる地方を旅行した人であるが、彼れの語る所に依ると、カムチャダルの間には、たゞ年一回の大祭があるばかりで、それは十二月に執行せられ、其儀式の肝煎は老人がしたといふことである。彼れはまた云ふ。——「カムチャダルの間には他の國民同様に、特別なシャマンといふ

老婦人の神  
憑

ものがないが、しかし老婦人とコエックチユッチ (Koeckchuch) といふ男の着物を着た女  
とが夢判断をしてゐた。彼等は巫女であつたのだ」と。  
これだけの記述では、クラッシェニンニコフの時代に、カムチャダルの間に家族的シヤ  
ンがあつたかなかつたかは分らない。何故かといふに、老人の行つたのは家族的祭式  
ではなくて、團體的祭式であつたからである。それ故に、かうした種類の祭式は、之  
を團體的シヤマンと呼ばなければならぬ。しかし、そこに特殊化されたものでないが、  
兎も角も職業的なシヤマンの形があつて、老婦人が神憑りしたといふことは出来る。  
また別に次のやうな記述があつて、私達にシヤマンに必要な資格を知らしめる。「女性  
は男子よりも美しく、また概して惻愍である。シヤマンに男よりも女と男裝女とが多  
いのは其爲めである。」——これはトロツシヤンスキイといふ人の記述であるが、女が男  
よりも美しいといふやうな漠然たる詞句では、シヤマンに必要な資格を十分に知るこ  
とが出来ない。

巫は女と男  
裝女

ヨヘルソンの  
説

ヨヘルソンは云ふ。——「一般にカムチャダルの間に、職業的シヤマンが存在してゐな  
いと信じられてゐるが、事實に於いては誰れでも彼れでもそれを練習し、特に婦人と  
男裝女とは其術に熟達してゐること、シヤマンには特別の服装がないこと、太鼓は川

團體から個  
人へ

ひず、只だ呪文を唱へて占卜することなどの記載がある。此記述は、それが寧ろ今日  
の家族的シヤマンに近いものであることを私達に想像せしめる。カムチャダルに職業的  
シヤマンがないといふ點で、彼等のシヤマニズムをアジャやアメリカの他の部族のシヤ  
マニズムと異つたものとするとは出来ない」と。

婦人の美と  
賢

ヨヘルソンの此記事は支持されるべきものである。即ちカムチャダルの間には、前述の  
老人によつて示されたやうな團體的シヤマンから、次第に職業的シヤマンに移行しつ、  
あるといふことは考へられる。又クラッシェニンニコフの記述の如く、最も著しく神憑  
の出来たものは、美しく且つ賢しい婦人であつたといふことは、個人的シヤマンが憧  
憬される傾向があり、そしてさうした理想には婦人が最も近かつたといふことを裏書  
するものである。「魏志」に現はれてゐる卑彌呼だの、「倭姫命世紀」に現はれてゐるヤ  
マトヒメだのは、さうした時代の民衆のシヤマン理想を暗示してゐるものであるまい  
か。

三大首長の  
合同

如上の記述は極めて簡單であるけれど、兎も角もシヤマンの仕事が神憑によつて精  
靈と交通し、時には卜占をするものであつたことがよく知られる。又シヤマンに婦人  
が適すること、そしてそれが男裝(ニミ)をする事なども窺はれる。かうした原始的のシヤ

シヤマン

マンが、家族的、團體的から次第に個人的、職業的になつて、其職業シヤマンの頭に王冠の輝く日が来たことは疑問を挟む餘地がない。——もつと具體的に云はうならば、出雲民衆の間には、それを統率するほどの大きな力を有つたシヤマンが現はれ、日向にも、大和にも、それ／＼力と富とを持つたシヤマンが現はれたが、それらは遂に互讓の精神から合同し、或はいくらかの葛藤を経歴した後、遂に大和國家が、最も大きく、最も力強く、最も評判よく發達して、宗教國家から政治國家に發達したのであつた。傳説の私達に語るところでは、日向國家が出雲國家と任意合同をなした後、大和國家を征服した形になつてゐる。しかし、それは所詮神話であつて、それから正確な歴史を知ることが出来ない。

發祥地は大和

紀元五世紀の皇室

かうして皇室が大和に勃興し、小さい大和國家を大きい日本帝國に延長展開させたのであつた。皇室の基を開かれたのは非常に遠い昔であるとしても、日本といふ國家が形成せられ、天皇といふ主權が出現したのは、紀元前後の間に相違なかつたと思はれる。支那史によれば、皇室と支那王室との公的交際は宋の武帝の永初二年（西曆四百一十七年）から始まつてゐる。順帝の昇明二年（西曆四百七十八年）の頃には、もはや皇室の勢力は日本群島の大半を籠罩し、海峡を越えて朝鮮半島にも及んでゐたやうである。かうした悠久

名詞は性質の代辯者

の歴史と不斷の發展とを以て、皇室は其無限の統治權を「朝日の直射し夕日の直照る」日本群島の上に設定した。それは眞に歴史以前から傳はつた傳説的精神で、民衆は皆其國家を神の國家だと信じ、神の國家であるが故に神の後裔のみがこれを統治し得るのだと考へてゐた。スメラギの稱呼は天皇の勢權の發展の經過を表現し、ミカドの代名詞は皇居の宏壯を暗示し、アキツカミの形容名詞は天皇の統治權の性質を象徴してゐる。天皇と其家族との運命は、初めから祝福されてゐた。神權國家は年々に膨張して行つた。

- (一) Tylor: "Anthropology," p. 402.
- (二) Czaplicka: "Aboriginal Siberia," pp. 272, 273.
- (三) James: "An Introduction to Anthropology," pp. 170-172.
- (四) Frazer: "Magical Origin of Kings."
- (五) Mitchell: "Anthropology, Up-to-Date," pp. 55, 56.
- (六) 本書第三章第三節參照。
- (七) 『日本書紀』卷三。——「遼遠之地。猶未露王澤。遂使邑有君。村有長。各自分疆。用相凌轢。」
- (八・九) 『祝詞』龍田風神祭。——「天下乃公民作作物乎。惡風荒水爾相都々。不成傷者：……」

- (一〇)同上、六月晦大穢。——「昆蟲乃災。高津神乃災。高津鳥乃災……」。
- (一一・一二)『萬葉集』卷一。——「安見知之。吾大王。神長柄。神佐備世須登。芳野川。多藝津河内爾。高殿乎。高知座而。……山川母。依氏奉流。神乃御代鴨。同上、卷十八。——「高御座。安麻能日繼登。須賣呂伎能。可未能美許登能。伎己之乎須……」。
- (一三)天降神話を或學者は南方系統のやうに云つたけれども、北東アシヤ民族の間にもこゝれは分布してゐる。一例すれば蒙古のゲシル・ボグド(Gesil Bogdo)の如きは、其顯著なるものである。
- (一四)太陽神話は太陽崇拜と關係あることは云ふまでもないが、これも南北兩民族の間に存在してゐる。
- (一五)私は我皇室の如きを「太陽トイテム」と名づけることに躊躇しない。即ち高天原の統御者であるオホヒルメムチは太陽神であつて、それが皇祖となつてゐるのであるから、皇位は御歴代これを「天つ日嗣」といひ、皇太子は「日嗣の御子」といつた。太陽トイテムは太陽を崇拜し、太陽の侵犯を禁止し、太陽の恩恵を受くることを特權とする。
- (一六)『廣開土王碑銘』。——「惟昔始祖鄒牟王之創基也。出自北夫餘。天帝之子。母河伯女郎。剖卵降出。」
- (一七)『隋書』百濟傳、及び『續日本紀』卷四十。——「百濟太祖都慕大王者。日神降靈。奄扶餘而同國。」
- (一八)『三國遺事』卷一、延鳥郎、細鳥女の項參照。——「是時新羅日月無光。日者奏云。」

日月之精。降在我國。今去日本。故致斯怪也。

(一九)同上、南解王の項參照。——「或曰。次々雄。或作慈充。金大問云。次々雄。方言謂巫也。世人以巫事鬼神。尙祭祀。故畏敬之。遂稱尊長者爲慈充。」

(二〇)久米博士『日本古代史』上卷、一一〇頁參照。

(二一)『Aboriginal Siberia』, pp. 169-172.

(二二)『Description of the Country of Kamchaka』, ed. 1775. p. 85.

(二三)アマテラスがスサノヲと盟誓せられる時、男装をして天安河原に出られたことや、神功皇后が三國征伐の時、男装をせられたといふことや、素より神話の領域に屬してゐるけれども、尙ほシベリヤに於ける koekichuk を想ひ出さしめるほどのシャマンらしい要素を含んでゐる。歴代の齋宮が皇女であつたといふことなども、矢張りかうした考への後世に傳はつたものと觀ることが出来る。

(二四)『古事記』及び『日本書紀』の國讓り神話と、神武天皇大和進入の條とを參照せられたい。

(二五)『日本書紀』に現はれてゐる神武天皇紀元は、推古天皇の九年(辛酉)から逆算して、一葦千二百六十年前の辛酉の歳を革命の年と見做し、これを神武天皇の即位の年と推定したのである。此推定は『識緯曆運説』に基づいたもので、一元を六十年とし、二十一元千二百六十年を一葦とし、一元で一個の舊生靈と代謝し、一葦で統治の様式に大變革があるとしたものである。皇室の御歴代は記紀に由るより外に道がないが、兩書には干格があつて